
今日もどこかで

北極猿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今日もどこかで

【Nコード】

N5962B

【作者名】

北極猿

【あらすじ】

あなたの知らない街のどこかで今日も何かが起こっている。過去に書いた小説作品群です。ジャンルはその他ですが、やや滑稽的です。「スケープゴート」、「雨降り地蔵」、「白日夢」、「ロンドンの夜明け」など。

始めに

これからご紹介するいくつかの短編は、まだ僕が小説を書き出してから日の浅いころの作品群です。といっても今でもそんなに日が経つわけではないのですが、まだほんの駆け出し、おそらくは三ヶ月くらいのころに書き殴ったものだと思います。なので読者様のお目汚しになる可能性もないではないのですが、今日昨日読み返してみたところ、なかなか光る点もあったので、なんだかもったいないなと思いついて投稿してみました。

中には以前に別の名義で投稿したものも交ざっております。今とはまるきり文体も違って、どこか既存の三流作家を思わせるところもあり、全体的にはずいぶんと拙いものなのですが、割りに構成はあるようです。それでもよろしければどうかお読みになってくださいまし。

「今日もどこかで」というタイトルは、なんとなく全体を読んだ後の心持ちが「ああ、こんなドラマが今日もどこかで繰り広げられているに違いない」という風になったからでした。ある程度時間を置いたことで自分の書いたものも、自分から切り離して読むことができるものなんですかね。そう思いました。全体的にやや滑稽の風潮を孕んでいます。そのせいか読み返していて恥ずかしくなるものもありました。そういう場合には若気の至りと思ってご容赦ください。

雨降り地蔵 1

僕の町には一つの有名な伝説があり、それは往々にしてやはり雨降り地蔵に関するものだ。雨降り地蔵は遺恩寺の常楽池にとつぷりと頭のでつぺんまで浸かっていて、目を瞑り、赤い前掛けをして胸の前で手を合わせている。何十年も水に浸かりっぱなしだから所々にすつかりと苔が生え揃っていて、傍から見ているだけでもその手の平大の地蔵がぬめぬめとした触感であることがわかる。

僕と哲平が保育園の園児だった頃、保母さん達と手をつないでよくその寺へ散歩にいった。しかし僕らはまだその頃鼻水を垂らしたガキンチョだったので、保母さんや園長先生の雨降り地蔵伝説の説明は耳から入ってまた反対の耳へと抜けてしまっていたわけで。だから雨降り地蔵の伝説をちゃんとした形で聞いたのは、僕も哲平も4年生の校外学習の時だったと思う。担任の藤波先生はとてつもなく恐い先生だったし、生徒のあくび一つでも簡単にぶちぎれたから大人しく聞くほかなかったのだが、それはまあ置いて、ここで雨降り地蔵の伝説を簡潔に説明する。

昔々、僕らの住む城武市で半年にも及ぶ日照りが続き、村人達が頭を悩ませているところにある日子供が近所の田んぼに転がっていた小さな地蔵をくすねてきて、その子供は親にめちやくちやに叱られたのだが、その様子を見てか知らずか、地蔵が誰にともなくぽつりと言った。「ここには水はないんかの」。ぽかんとしばらく口を開けた後、気味の悪さにぞくぞくとした子供の親父は息子を叱るのを一旦止めて、おそろおそろその地蔵を握って障子を開け放ち、カンカン照りの庭に放り投げた。すると地面に仰向けになった地蔵は「日干しはかなわん。雨じゃ雨、雨を降らそう」と言っぴよっこり立ち上がったと思うと、そのままじつと祈り、本当に雨を呼んだ。雨は一週間降り続け、枯れた稲も草花も命を取り戻し、結果的

にその年は稀に見る大豊作の年となった。それからというもの、地蔵は「水なしではいられないお方」と呼ばれ、普段は遺恩寺の常樂池に浸し、日照りが続いた年には池から引き上げて供え物をして、人々は地蔵が雨を呼ぶのを待ったという。

その話が本当かどうかは僕にも誰にもわからないが、この行事は今でも続いている。そしてそんな、僕と哲平にはまるで関係なさそうな雨降り地蔵伝説が僕らをスリリングでスキャンダラスな事件へと導いたのも、やっぱり地蔵を祀る、年に一回の町行事でのことだった。

山ノ神祭りは立春の後、最初の寅の日寅の時刻から、つまり2月8日の午前4時頃から始まっていて、まだ夜も明けきらない内から祭場となる神木に向かつて人々が集落をぞろぞろと練り歩く。近寄りがたいオーラを放つ袈裟を着たお坊さんや、木で出来た祭壇を肩に担いで歩くお爺さんの間で、寒さに体をちぢこませながら僕と哲平は白い息を吐いて内心はしゃぎまわっていた。僕らが親公認で真夜中に外へ出られるのはホント年に数回のことだったし、それも二人で、子供だけで暗い時間に外出するなんてことはこれが多分初めてだった。

言っておくと、山ノ神祭りに子供が楽しめるコンテンツなんて一つもない。けれど僕らお子様の脳みそは夜中に子供だけで外出するという行為自体に興奮していて、古臭い行事も夜遊び的なものへと自動変換してしまう。僕と哲平はもう楽しくて楽しくてしょうがなかった。家を出てからずっと口元を緩めっぱなしで、お互いの些細な冗談にも腹を抱えてケラケラ笑った。大勢の人がいるということだけでなぜか笑いが込み上げてくるし、僕らの前にいた、お参りのついでに犬の散歩まで済まそうと考えているらしきおじさんを見ているのにも込み上げてくるおかしさを我慢できなかった。いやいやホント、なんでだろう？ たぶん僕らはどうしようもなく浮かれて

いて、何が無くとも面白かったのだ。

哲平は学校に着てくると全く同じ黒のジャンパーを着込んでいて、下には裾がほつれたナイロン製のジャージを穿いている。「まあ夜だったら暗い色の方が目立たないかね」と彼は言つて、僕はこのとき気づくべきだったと後から思う。哲平にだってこのときまだ事を起こすような気はさらさらなかったのだろうけども、今思えば確かに何かの予兆を感じたし、哲平からもその片鱗がちらほらと見え隠れしていた。だから僕はこのとき、「ヘンなことするとバチが当たるよ」ぐらいは言っておくべきだったのだ。たとえ結果が変わらなかったとしても。

集落を抜けて田んぼ道に出ると、林の方に向かって鳥居が二つ並び、それをくぐつてさらに少し歩いたところに遺恩寺はある。もうこちら辺にまで来るとお寺から鳴らされるフレダイコの音がトーン・トーン、とはつきり聴こえてきて、僕らはまたにわかに興奮する。舗装されていない畦道に出て風を遮る家々が無くなると、身を切るようなつむじ風が吹いて、僕らの興奮して火照った体を嫌というほど冷やす。冬の厳しい寒さを毎年あつさりと忘れてしまう僕はあまり厚着をしてこなかったせいで、途端に齒がガチガチと震え出し、たまらず「行こ行こ、走ろ」と哲平の腕を引っ張つて鳥居の方へ走り出す。正月呆けを引きずったようにのんびりと歩く大人達の間をスタタつとすり抜けて、100メートルも走つて林道に入ると風は止み、後ろではびゅうびゅうという低い風の唸りと肩を抱え込むように歩く人々の姿が見える。

「どこだ？ どこでやってんだ？」と突然、瞬間移動でもしてきたみたいな面持ちで哲平が辺りの林をきよろきよろと見渡すので、僕は哲平の背中を小突いて「どこ見てんだって。ほらあそこだよ」と前に続く道や人の群れを指差した。林の奥の暗がりには幾つかの小さな火が灯っていて、そこだけが夜の闇の中にぽっかりと浮かんで

いる。ゆらゆらと揺れる火がなぜだろう、僕には来る前想像していたよりも幻想的で、自分から意気込んで指を差したはいいが、少しの間その光景に見とれてしまっていた。

雨降り地藏 2

道を進むとやがてパチ、パチパチ、という焚き木の音が聞こえ出し、枯れた背の高い杉の木々に吸い込まれていた人々の静かなざわめきもぱらぱらと耳に入ってくる。寺の入り口にある最後の鳥居を越えると、カバ一頭分、猫30匹分ぐらいの大きな焚き木を人々が囲んでいて、僕と哲平もなんだか釣られて言葉少なでそこに並ぶ。火は近くで見てもやっぱりどこか神秘的で、でもキャンプファイヤーなんかとはまた違って、火に同調するんじゃない、一方的且つ無償的に暖められているような気分になり、僕は鼻水をすすりながら、自分でも掌握できない込みあがる感情に胸を打たれる。隣にいる哲平もスンスンとやはり鼻水をすすっていて、瞳にはゆらゆらとした炎が映し出されている。

「今日呑めんのかなー、甘酒」と思い立ったように哲平が言つて、僕は一瞬きよんとする。甘酒？ あー、あれね。「呑みたいの？」と僕は訊く。哲平は手の甲で完全に鼻水を拭いきって頷き、「そりゃ呑むつしよー、ここまで来たら」とまた燃え盛る焚き木に両手を突き出す。

しばらくして、「でも甘酒出るのかなー」と僕はぼんやり呟く。「出る出る。ぜってえ出る」「なんで？」「うちのばあちゃんが言ってたもん」「ふーん」「和尚さんおもしれー人だから多分俺達にも呑ましてくれるな、きつと」「無理でしょ。だって俺ら去年の」「いやいや無理じゃないって。マジで」「なんでよ」「すんげーいい人でしかもおもしれーんだってば、和尚さん。聞く聞く？ その話」「あ、うん聞く」

それから哲平はふふつと肩を震わせて「ぬはは。ゴメン、思い出して笑っちゃった」と一人で軽く悦に入ってから、記憶を手繰るように焚き木から少し目線を上げ、にやりと笑って僕に振り向いた。「やっぱダメだ。後で話す」

「えー、それなしでしょー。タチわりいよー」

「いいからいいから。後で話した方がぜってー面白れーから」

哲平は含み笑いを交えながらそう言うのと焚き木に手を伸ばし、また一人でくすくすと笑う。

僕は「教えてよ」と言いかけるけど止めておく。哲平の言った「後から話した方が面白い」という言葉を一応はまあ信用しておくことにする。

そろそろ朝の5時くらいにはなったかなー、と僕は思うけど空は暗いままで、相変わらず僕らは焚き木の前で両手を突き出したままだった。そうこうしている内に、焚き木の前から段々と人々が姿を消し、寺の本堂、賽銭箱の周りにぞろぞろと集まっていく。「甘酒呑みてー」と呟きつつける哲平の横でぽかんと本堂を見やっていると、やがて賽銭箱の前にマイクスタンドが置かれ、ピー、ガコン、という耳障りな音と共にどこかで見たことがあるようなようなおじさんがそのマイクスタンドの前に立って一つ咳払いをした。

「皆様、どうもおはようございますー」

アンプを通したダミ声が響き渡り、賽銭箱の前に集まったお参り客からおじさんに拍手が浴びせられ、田舎臭い「よっ」「待ってました」などの掛け声が耳に届くと、「ほえ？」と間抜けな声で哲平も振り向く。

「市長さんの話でしょ」と僕は言う。

すると哲平は興味を失って「あー、長い話ね」とまた鼻水をすすって焚き木の方に向き直ってしまった。

「えー、今年も寒さ厳しい中お集まりいただきまして誠に感謝いたします。おかげさまで山ノ神祭りも今年で八十を数えるまでになりました。といってもそもそもは百年以上も昔から語り継がれた行事なのでございましてね。名称こそ明治の年に変わりましたが、今でも神仏混交の姿を残す民俗学的にもたいへん貴重な行事です。皆様もまだ記憶に新しいとは思いますが平成6年には山ノ神祭りのあ

とで実際に、市の畑が長い日照りから救われました。言い伝えどおり、雨降り地蔵は今も農作物を干ばつの被害から守っておられるのでして――」

「おい、もう行こうぜ」と突然哲平に腕を引かれて僕はよろける。「行くつてどこに」と僕は言うけど、哲平は眉をしかめて人差し指を口元にあて、「シー、いいからついてこいって」とまた僕の腕をぐいぐい引っ張るので、僕はその力に逆らわずに哲平の後についていく。

本堂の前に群がる人の間を子供ながらのフットワークですり抜け、僕らはこそこそと寺の裏側に回り込む。何何なんなの？ と僕は哲平に引かれるままにいたのだが、哲平が「見ろよ」と囁くような声で言つて僕は言われたとおりにする。目を凝らすと寺の裏手の、林なんだか寺の敷地なんだかよくわからない薄闇の中で、二、三人がこそこそと動いているのがわかった。

「何これ」と僕は哲平に囁く。

「待つて。たぶん和尚さんいると思うから」

哲平はそう言つてから僕の腕をすらりと離し、注意深い足取りでそのこそこそ動く怪しい人達に歩み寄つていく。

「和尚さん、いる？ 和尚さーん」

哲平がおそろおそろ囁き、一人がおもむろに顔を上げる。

「あんらゝ？ テツくんかゝ？」

とその人がどうやら和尚さんのようで、それがわかったと哲平はデヘへと笑つて頭の後ろで手を組んだ。

「テツじゃないよ。哲平だよ」

「こんなとこで何してんだ？」

「ん？ お参り」

「さっちゃんは来とらんの？」

「お母さんは家で寝てる。ねえおしよーさん、それより甘酒ちよーだーい」

「甘酒？ おう、いーよう、てっちゃん。ここにあるから持つてけ」

「やつほーう。ほらほら、くれるって、こっち来いよ」

マジで？ そんなにあっさり飲めちゃっていいの？ と僕は心の中で自問しながらも、哲平よろしくやつほーう、ってな気持ちの方が強くて、うきうきわくわくしながら子供らしからぬ媚びた足取りでひょこひょここと和尚さんの方に歩み寄る。哲平はかけつけ一杯とばかりに早くも一杯流し込み、「かー、うんめー」と天を仰ぐ。和尚さんも和尚さんで一杯やつちゃって、水戸黄門みたいにカツカツと笑う。そしてこの僕も一杯。やつぱり僕も「うんめー」とか言ってみるけど、内心は違う。おえええ、何だよこれ、ゲロマズ。というのが子供の本音でありつまり、僕らは大人を気取っているだけであって本当に甘酒がおいしいと感じることなど無いわけなのだ。何もおいしくて飲んでいたわけではなくて、僕らは背伸びして『酒を呑む』という行為に酔っていたわけで、『甘』って漢字はこの際排除して、便宜的に『酒』ってことにしちゃったまでのだ。子供ながらに分別があるんだかないんだか。

雨降り地蔵 3

そうして10分も経たない内に、酔っ払いもどきが二つ出来上がる。哲平が「俺酔っ払っちまったよー」とふらふら鳥居の前を歩き、僕もおよそ自然でないシャツクリを交えながら「つまみ欲し〜つまみくれ〜」などとだんまりな杉林に無理難題を突きつけたりする。

本堂の周りには相変わらず人が集まっっていて、市長さんの長い話は未だに続いている。

「和尚さん面白かったべ〜」と哲平が言う。「あの人マジうけるよ〜」

「うん、面白かったー。ってかそろそろ教えてよ、和尚さんのおもしろい話」

「何？ そんなに聞きたいの？ 明日じゃだめ？」と哲平が言うて、僕は内心ムツとする。

「あつたりまえじゃん。しかも哲平、後で話すって自分で言ったし」

「あーわかったよ、もう。教えるけど絶対誰にも言うなよ」

「俺に関係ないことだったら言わない」と僕は言う。

「それじゃだめ。そんなんだったら教えられない」

「わかったよー、言わないー」

「よし。じゃあついてきて」

えっ？ どこに？ と言う間もなく、哲平は急にシリアスな顔つきになったかと思うと本堂を一瞥してから林道を駆け出し、僕もあわててその後を追っていく。哲平は鳥居のある入り口を抜けて右に折れ、真っ暗闇の杉林に突進する。

「ちよっ！ どこ行くんだよー！」と僕が叫ぶが、哲平に振り向いて「いいから！」と力強くたしなめられて、僕は黙ってしまう。

地面の固い土には霜が降りていて、一つ踏み込むたびに、ザクツという音がする。しかも林はでこぼこしている上に、急な坂や、時

々誰かがイタズラして作った落とし穴なんかもあって危ないのだ。
しかし、僕も哲平も走っている内にお互い突然、計ったみたいに笑
い出す。ぶぶぶつ、ぶはは。僕はもう何がなんだかわからないのに
楽しくて仕方がない。僕がふと思いついて「丘」をこえ、ゆこ
「およ」と歌いだすと、哲平がはぶぶすと笑ってから「くち
ぶえ」吹きつ」と息を切らしながら続ける。

で、結局どこに向かつてるんでしょう？ と僕が冷静さを取り戻
したあたりで哲平が止まり、僕の方を振り向いてにやりとした。

「誰もいないか一緒に見て」

「はい？」

「いいから」と哲平は僕の腕をぐいと引き、それから身を屈め
て林の奥に目を凝らした。「あそこに池があんの、見えるべ？」

「あー、去年校外学習で来たところ？」

「そそ。あそこに和尚さんの秘密が眠ってるわけよ」

「つていうかそれあからさまに雨降り地蔵のことじゃん」

「あつ、バレた？」と哲平が僕に笑いかける。

「バレるよそりゃ」

「まあいいんだけどさ、和尚さん、雨降り地蔵の首折っちゃった
んだって」

「はあ？ それマジで？」

「ぶぶつ、マジマジ。んでうちのばあちゃんに相談したらしい」

「で？ どうなったの？」

「知らん。だから見に来た」

おいおいそれってけっこうやばいんじゃないの？ と僕は思い、
走って火照った体に冷たい汗が貼りつく。

「じゃあ誰もいないみたいだし、行こっか」と哲平が言って身を
起こし、ジャージについた腐葉土を手で払って僕に手を差し伸べる。
しかし僕はその手を掴まない。「ホントに行くの？」

「行くよ。行かなきゃアカンでしょ、ほら」とまた僕は哲平に腕
を掴まれ、否応なしに引き起こされる。あう。

哲平は踵に重心を置いて坂をズザザーと下り、僕は何度も転びそうになりながらもなんとかその後についていく。運動神経はそれなりにいいはずなのに、緊張も相まって見事にぎこちない僕の足取り。何も首の折れた地蔵を確認するっていうのだけが恐いんじゃない、他にももつと色々あるのだ。だって、池の傍には墓地があるわけだし、池まで行くにはその墓地をとおらなきゃいけないわけだし、しかもいくら朝だからと言ったって、まだこんなに暗いわけだし。けれど哲平に僕の心中を察することなんてそもそも出来るはずもなく、彼はスイスイスイと立ち並ぶ墓石を抜けて淀んだ真緑の池に辿りつく。僕は息を震わせて哲平にさりげなく寄り添い、彼の真つ黒ジャンパーを掴んで離さない。寒い。ここは二つの意味で寒いよ、阿呆の哲平さん。

「ほら、見てみ」

哲平が池の中を指差し、僕はおそろおそろ覗く。たらいほどの小さな池の中に、コケシ大の地蔵が沈んでいる。

「……あれ？ でも首はちゃんといってるよ」と僕は言う。

「アロンアルファでつけたんだな、きつと」

アロンアルファで接着したかどうかまではわからないが、確かに地蔵の首はちゃんとズレもなくついている、ようには見える。哲平がふと屈みこんで池の中に手を入れ、僕は仰天して思わず小さく叫ぶ。

「ちょっと、何やってんだってばよ！」

「だってちゃんと見なきゃわかんねーじゃん」

「バカ、まずいって！」

「大丈夫だよ。ほら、けっこうしつかり……」

と彼が言って地蔵をその手で掴み上げた瞬間、この世全体のあらゆる不吉な予感がこの場に収縮し、万力でプラスチックが捻り潰されていくみたいに僕の心はバラバラになってもはや遠くの寒空に投げ出されてしまっていた。僕はその瞬間、シヨックのあまり一度死

に、そして逃れられるはずのない責任やらなんやらのおかげでまた即座に息を吹き返した。

「ころころりん、ころころりん。そう、地蔵の首がポキッと折れて、哲平の足元にころころと転がったのだ。」

「僕らは声を失い、仰向けになった首だけの地蔵をしばらく見つめていた。それから互いを見合わせ、哲平が震えた声で僕に言った。」

「……俺のせいじゃないよね？」

「僕は頷く。とりあえず頷く。哲平が何百年も続く伝統ある行事の主役である地蔵の首を折ってしまったということになれば、その場にいた僕だつてももちろん無実で済むわけがないのだ。何時間後かには、僕らの想像もつかないお仕置きが待っているに違いなかった。」

「くつつけて！」と僕は咄嗟に叫んだ。「早く！ 今ならなんとかなるかも」

「くつつけるってどうやって！？」

「首持つてよ、そんでほら、胴体にくつつけてよ」

「無理だよ。瞬間接着剤でもない」と

「僕は地蔵の首を拾い上げ、哲平から胴体を奪い取ってはめこむ。でも全くダメだった。はまるはずもない。しかも地蔵は苔がぬめぬめして気持ち悪い。それになんか臭いし、おえっ。」

「あつ！」と僕はその瞬間、今度は別の恐怖にとりつかれ、哲平の腕を取る。」

「ねえ、行こう。移動しよう。もう少しでみんな来るよ。祭りの最後は神木とここですよ」

「あ、そっか」と哲平も途端に焦りだして、僕らは地蔵を手に元来た道へと駆け出す。」

雨降り地藏 4

とんでもないことになった、というのはわかりきったことで、僕らは走って走って杉林の中でとうとうへたり込んで、互いに黙っている。事の重大さを口にした所で、万事は解決しないのだ。地藏の首も元には戻らない。僕は意識を集中し、解決策を考える。糸口は必ずあるはずで、焦っているから見えないだけなのだ。確証はないけど、いつだってそうだったはずなんだから。多分。多分多分多分。今すぐ家に帰って瞬間接着剤を持ってくるってのはどうだろう？ もしくはコンビニでアロンアルファを買ってくるとかどうだろう？ 僕はそう考えて、やっぱりダメだと思う。時間が足りない。家まではどう見積もったって3キロはあるし、コンビニはもつとずつと遠い。田舎のバカヤロー。あと30分もしない内に、本堂に集まっていた人の群れがこっちにやってくるのだ。池にあるはずの雨降り地藏をみんなが拝みに来るのだ。

何も解決策が浮かばないまま、僕の心臓は早鐘を打ち出す。こいつはせかして欲しくない時に限って僕をせかす。哲平は僕の方に顔を向けず、すんすんと鼻を鳴らしている。僕にはしばらくして、それが泣いているのだとわかった。

「哲平」と僕は呼ぶ。「泣いたってどうにもならないよ」

「んぐっふ、う、うるへー」と泣きながら哲平が言って、僕は何かに目覚める。このままではいけないということに気づく。藁にでもすがった人間が、何かを最後まで成し遂げることができるのだ。

「地藏に祈ろっ」と僕は言う。「地藏に雨を呼ばせて大人達に足止め食わそう」

「そっ、それで、ふっ、どう、なるんだよ」

「その間に俺らがアロンアルファ買ってくる」

「んぐっふ、無理だよ、ふっ、そんなの……俺達、ふっ、もう終わりだよ……」

「じゃあいい。一人でやる」

僕は土を平らにならし、地蔵をまず立たせ、その上に首を慎重に載せる。それから地面に両手について地蔵に口元を寄せ、息を吹きかける。

僕のその奇妙な行動に気づいて哲平が顔を上げ、泣くのを中断する。

「……何やってんの？」

「地蔵の体感温度上げてんの」と地蔵に息を吹きかけながら僕は言う。

哲平は僕の言ったことの意味がよくわからなかったみたいで、ぼんやり僕と地蔵に視線を注いでいた。それは多分、とてつもなく阿呆な光景だったんだと思う。でも僕はその時その瞬間、この世の誰よりもマジだった。人間、本当に必死な時は常識に囚われたりなんてしないのだ。特に、それが年端もいかない子供であつたりした場合なんかには。

「……俺もやる」と哲平が涙を手の甲で拭い、その目には何かしらの決意があり、もう絶望の気配は感じられなかった。

そして僕らは二人して地蔵の前に両手をつき、ふーふーと出来るだけ熱い息を吹きかけ続けた。およそ現実離れたことをやっていくのにそれは奇妙なほど現実味たつぷりで、僕らの間には必然的に笑いが存在しなかった。フレダイコの音が近づくに連れて心臓は飛び跳ねるし、杉林もしんと黙りこくつていて気味悪く、もはやどこにも笑える要素なんて見当たらなかったのだ。

けど哲平より先にふーふーを続けていた僕には、彼より一足早くこの行動の無意味さと阿呆さ加減が嫌でもわかってくる。あーこんなことやってて大人の俺が見てたらきつと笑うんだろー、とかぼんやり思い始めてきて、「もうやめようか」と哲平に言おうとする。

しかし、その時にそれは起こった。

「あっちー」

僕らはびくつと体を震わせて互いを見やり、瞳を震わせた。

「今、……なんか言ったよね？」と哲平が囁く。

僕らは少し後ずさる。恐い。今、確かに地蔵がそう言ったのだ。なんだかんだで、地蔵がホントにしゃべっちゃったらちよつと不気味だよなー、とか今さら遅いけど、そんな考えが僕の頭を巡り、事実それに直面してるんじゃないか？ とさらに客観的に悟って僕は肌寒くなる。おいおい。

「聞き間違え？」と哲平が言つて、僕は首を振る。聞き間違えなんかじゃない。地蔵はちゃんとしゃべったのだ。

するとガサツという音と共に地蔵が立ち上がり、僕らは目を見開いて硬直する。それは奇跡と呼ぶにはあまりに生々しかったし、不穏だった。暗い杉林の中で、苔に覆われた地蔵が立ち上がり、天に祈ったのだ。目を開けて、しかも関西弁で。

「日干しはアカンゆうとるやるがー。雨や、雨。雨降らそ」

僕らはもう、その場に根が生えたみたいに動けなかった。地蔵はそう言い終えるとまた目を瞑り、ぴくりとも動かなくなった。

「……見て」と哲平が震えた声で言つて、ハツとする。「空が」

僕はぱつと顔を上げる。瞬間、雲ひとつなかった空に雷鳴が轟き、綿飴を作る機械みたいにぐるぐるーつと雲が空の中央に集まり出したかと思うと、バケツをひっくり返したような雨が本当に降ってきた。僕と哲平は息を飲んで声もないままに歓喜して、それから雨降り地蔵を見つめた。それはもうれっきとした奇跡だった。雨降り地蔵は雨の中でこれ以上ないほど幸せに見えたのだった。めでたしめでたし。

というわけにはもちろんいかず、僕らは大雨の中を急いで駆け出し、杉林を抜け、鳥居を抜け、「テツくんどこいくん？」と呼びかける和尚さんの声も無視して、ついでに「だから哲平だってば」という哲平の声もおざなりにして、瞬間接着剤を求めて城武市を太陽よりも早く東から西へと一直線に走ったのだった。思惑通り、予

期せぬ大雨で足止めを食った市長さんと他多数の大人達は本堂の前で世間話をしていて、今がチャーンスだった。

それから僕は自分んちに着いて哲平を外で待たせ、窓からこっそり入って、床がびしょびしょに濡れるのも構わず、居間の引き出しからアロンアルファを取ってきた。それをポケットにねじ込み、準備完了、哲平と走って池に戻りながらまた面白くなってきて、ぶぶすつと笑いながら鳥居を抜けて杉林を元の場所まで駆け戻る。

雨降り地蔵は杉山の中腹であの、天に祈りを捧げたままの恰好で立ち尽くしていた。その顔に、もはや神秘的な何かは存在していない。赤い前掛けをした背の低い、ただの地蔵でしかない。僕はアロンアルファをにゅーっと出して地蔵の首に塗りたくり、慎重に慎重に、１ミリのズレも許さず、胴体とバッチリはめた。許せ地蔵、悪いのは和尚さんだ。

それからアロンアルファ万歳。コニシ株式会社ありがとう！

なんてことを僕が言ったので哲平はケラケラ笑い、そこにもう緊迫した空気はない。僕らはしばらく雨に打たれながら泥んこまみれでケタケタ笑っていた。地蔵はやはり目を瞑り、僕らに何か一声かけてくれたりはしない。元の地蔵だ。雨降り地蔵はあの瞬間だけ雨降り地蔵だったのだ、と僕は思う。

そして雨で滑りやすくなった坂をズザザーっともう一度降り、僕らは墓石を抜けて池に地蔵を戻す。雨に業を煮やした大人達が、辛抱できずにフレダイコを鳴らして、雨の中をやってくる。僕と哲平は慌ててぐるっと杉林を半周して行列の最後尾に割って入り、人の間でもみくちやにされながら二人で含み笑う。この行列の人々はもちろん、僕ら以外の誰一人として、雨降り地蔵伝説が現実起こったことを知らないのだ。この雨はただの雨じゃない。雨降り地蔵が降らせた雨なのだ。うしし、僕らだけの秘密。

僕が「またやろうね」と哲平に言って、哲平が泣きそうな顔で笑

う。「もうカンベン」

今回の雨は一体いつまで降り続けるのだろうか？ 雨降り地蔵はやっぱり雨降らしの神なのだろうか？ いや、土着の神である雨降り地蔵は人々の願いの偶像であり、そして仮の姿なのだ、と僕は思う。本当の雨降り地蔵はもっと別の場所にいる。似たようなケースで、僕としてはジブリの「トトロ」を思い出してしまう。トトロもやはり、会いたい時にいつでも会えるわけじゃなくて、サツキとメイが本当に困った時にだけ、決まってひょっこり現れる。人々もやはり、真摯な祈りを捧げるからこそ、雨降り地蔵のいる、本当の場所に辿りつくことができるのだ。

信じる心があればよし。信じることは決して弱くなんかないのだ。時には弱さや情けなさを見せられる人間の方がずっと強いに決まってる。僕は哲平の肩をがっしりと抱いて、哲平も僕の肩に腕を回す。肩を組んで大勢の間をゆらゆら歩き、僕らはまた「丘」をこえ、ゆこーおよー」と歌い出す。

行列は熱を持ち、うにようにと蛇のように山を登っていく。遠く雨雲の向こうでは、もう朝日が淡く透け始めていた。

テレビマン

テレビは嫌いだったけどやっぱり見ないわけにはいかなかった。

なぜなら学校の友達であるヤツ君やトオルは毎日登校してリュックを机の金具に引っ掛けると、早速昨日見たテレビのことをペチャクチャペチャクチャケラケラケラケラと話し続ける。「そこでバーン！　とか弾けてさ、みんな超驚いてんのー」ケラケラ。「それウケるー、マジでウケる」ケラケラ。それでもって一通り話が終わると今度は僕の方を向いて、「昨日なに見てたー？　テレビ」とか訊いてくる。「見てないよー寝てたー」とか言うと、二人はどっちらけ。

「ふーん」と言つて、もう僕に興味はないと、違う生徒に話しかけにいつてしまふ。こうなったら適当に番組を一つでっち上げてしまおうかとも僕は思うが、見破られるのは何より怖いのでやめておく。でもしかし、別の生徒と楽しそうに話す二人を見ると、僕はもう島流しにあつたみたいに孤独でやりきれない気持ちになる。だからなんととしても今日こそはテレビを見なきゃいけなかった。このままじや僕の学校生活、ひいては人間関係が危ういのだ。

僕のお母さんはかなり温和で穏やかな人なので、小さい頃から僕によく本を読ませた。「トム・ソーヤーの冒険」、「チャーリーとチョコレート工場」、「ムーミン谷の仲間たち」など……。でもそのおかげで、僕は全くテレビを見なかった。それにテレビが面白いと感じることもほとんどなかった。今こうしてブラウン管の前に座っていたって、ときどきわくわくする思いなど胸に一欠けらとしてない。むしろおっくうだ。本当は今すぐベッドに横たわって、最近読んでいる「車輪の下」の続きを読みたい。

だがそういうわけにはもちろんいかないのです、僕はリモコンを手にとって、「よっ」とスイッチを入れた。淡い光がゆっくりと薄暗い夕方の部屋に浮かび上がる。

「——それではこの辺でお別れいたします。さようなら」

ちょうどニュースが終わったところだった。シックなスーツを着込んだ男達が画面の中で深々と頭を下げ、視点が上の方へと上がっていく。「ご覧のスポンサーの提供でお送りしました」はい、さいですか。

ここでふと思い立ち、CMの隙について僕はキッチンに向かった。朝にお父さんが新聞を読んだはずだからきつとあのままテーブルの上に置いてある。……ビンゴ！二つに折られた今朝の新聞が無造作に置かれている。僕はそれを手に取って大きく広げ、番組覧に目を走らせた。7時——「笑いの殿堂」、「プロ野球G対Y」、「解明スペシャル！ミイラの謎に迫る」、「田舎生活」、「超戦士びーだまん」。NHKはなんともマイペースな番組がずらりと並ぶので避けておくことにする。さて、と僕は唸った。果たしてあの二人はどの番組を見るだろうか。同じ歳の子たちの考えてることもわからないなんて、急に自分が20年くらい老け込んでしまったように思える。

「わはははは……」

テレビのある居間から声がして、僕は顔を上げた。点けっぱなしのテレビがあつという間に陽の落ちた暗い部屋で光り、笑い声が漏れている。どの番組だろう？とりあえず新聞を持って居間に戻り、リモコンで画面表示をプッシュ。画面に映っていた映像を配信していた放送局は0チャンネル。0チャンネル？もう一度画面表示をプッシュ。映ったのは0チャンネル。おいおい、0チャンネル？

「少年、少年」テレビは何やら喋り続けている。

僕はテレビの内容など目に入らず、思いっきり混乱していた。テレビに果たして0チャンネルなんてあつただろうか。いや、あつたかもしれない。なんせ僕はほとんどそれほどの注意を持ってテレビに目を向けたことがないからだ。あるいは最近出来たのかも。もしかしたらよく学校で耳にする、あの2チャンネルとかいうのと同関係があるのかもしれない……。

「おい！ 少年！」テレビが叫んだのでハッとした。あわててボリウムを落とすが、テレビは変わらずもう一度叫んだ。「私を見たまえ、少年！」

一体どんな番組なんだろうとテレビを見たら、思わず「えっ」と声が漏れた。テレビには戦隊モノの原色スーツを着込んだ男が腰に手をあててこちらを見ている。日曜の朝にトリップしてしまったのだろうか。んなバカな。男が呼んでいるのはもしかして僕のことなんじゃないか、と思った。

バツチリ、そのとおりだった。

「そうだ、君だ」とテレビの男は言った。僕の目を見て男は少し頷いた。「君に話しかけているんだよ」

冷や汗の波が全身の毛を逆立たせ、僕は画面に釘付けになった。
what happening? ついに来るべき恐怖が来た！

僕はなぜだかそう思つて、0.0001秒でも早くテレビを消すために、親指に全身の力を込めた。あらん限りの力でリモコンの赤い電源ボタンを押す。恐怖が消える。いや消えない。男はまだブラウン管の中で平然と腰に手をあてて佇んでいる。僕はもはやおしっこを漏らしそうだった。

「少年、驚くのは仕方ない」画面の中の男はどこか残念そうに言った。「ただし私は君の味方だ」

男の表情は全身を覆ったいかにも戦隊モノのスーツのせいで読み取れない。首を振ったり、頷いたりするだけだ。口の動きもないので、声だつてどこから聴こえてくるのかいまいちわからない。

「少年、何か言ってくれ」男は呆然とする僕に待ち疲れたように言った。「一言でもいい」

言われたとおり僕はおそろおそろではあるが声を出した。「あ…

…」

「あ、じゃわからん。もう少し何か言ってくれ」と男は言う。「本当に君の味方なんだ。信じてくれ私は君を救おうと——」

「——あれ？ タクちゃん帰つてたの？」男の声を遮ったその声

は紛れもなくお母さんの声だった。振り向くとお母さんは、キッチンの方からこちらに顔を覗かせて買い物袋をテーブルに載せている。次の瞬間、僕は泣いてお母さんに走り寄っていた。「怖かったよーお母さんー」とお母さんの胸に顔をうずめてマジ泣き。「何？ 何かあったの？」とお母さんは当然困惑。僕は今起こったことの全てを説明した。

「——ほんでね、テレビに……テレビに変な奴が出てきた」居間を指差し、Ｔシャツの袖で涙を拭う。本当にめちゃくちゃ怖かったのだ。

「テレビ？」拍子抜けしたようにお母さんは復唱した。「テレビって……あそこのテレビに？」

「……うん。お母さん見てきて」

お母さんは不思議そうに僕の顔を見たあと、言われたとおりにテレビのある居間に移動した。僕もその後をつける。お母さんの服を掴んで、いつでも隠れる準備はオーケー。だが男はいなかった。テレビの中には真っ黒な闇しか映し出されていなかった。

「タクちゃん何見てたの？」お母さんはリモコンを手に取って、スイッチを入れた。笑い声が漏れて、僕はぞつとした。でもよく見るとそれはどの局にもありそうな普通のバラエティ番組だった。

「わかった。ここでお昼寝しちゃったんでしょう、タクちゃん」

お母さんは優しく温かい腕を僕の首に巻きつけ、あやすように言った。僕はその腕をどけて「違うよ」と言った。

「見たもん。ヒーローみたいなテレビマンがいたもん」そうは言ったが、正直ヒーローなのかはどうかはわからない。でも見たもん。絶対。

お母さんは優しく微笑んだだけだった。僕の頭を撫でてキッチンに戻り、買い物袋からネギやらじゃがいもやらを取り出して夕食の準備に取り掛かってしまう。僕は悔しくてテレビを点けたり消したり、チャンネルを変えたりしてみた。でもあのテレビマンはもう映

らない。ああ、なんだよもう、テレビマン。わけのわかんないときに出てきてわけのわかんないうちに消えちゃって。おかげで僕が噓つきみたいだ。

それから僕は学校でのヤッ君やトオルのご機嫌とりなどおかまいなしに、学校が終わると即座に家に帰ってテレビの前に座り続けた。今日こそはテレビマンが出てくるはずだと信じて、ちかちか光るブラウン管をひたすら眺める。お母さんは目が悪くなるよと言っただけで無視。テレビマンをもう一度呼ばないことには僕の汚名は晴らせないのでから。

だがテレビマンは一向に現れなかった。そのかわり、僕は学校で一番のテレビ通となった。なんせ毎日ころころとチャンネルを変えては全ての番組を見てるのだ。そしてつけられたあだ名が「テレビマン」。まさかこの僕がテレビマンを襲名するなんて。ってことはテレビマン2号か？ それとも2代目？ とにかく一つ言えることは「テレビマン」というあだ名が僕にとって果たして利益か損害かと言ったら断然損害にあたるということだ。小学生にとって語尾に「マン」をつけられるのは大概いいニッケームではない。もちろんヤッ君やトオルと話が合うことになった点ではすごく有益だったと思う。しかしそれも束の間のことだった。ヤッ君やトオルだって小学生なのだからそうしょっちゅうテレビばかり見ているわけじゃなくて、たまには外に出て遊んだりもする。僕はその日見たテレビのことを知りすぎていたのと同時に喋りすぎていた。もしかしたらだけれど、ヤッ君やトオルは僕にちょっと嫉妬めいたものを感じていたのかもしれない。今さらながらに、ちょっと調子に乗りすぎたかなと僕は思ったりする。ヤッ君やトオル、はたまた他の児童と話せることが嬉しくて僕は普段の5倍は話した。そして暗に自慢していた。へへん、俺はテレビのことなら何だって知ってるんだぞ。

バカだ。僕はバカだった。空き樽は音が高いつていうじゃないか。

こうなると僕はどうしたらいいのだろう？ テレビを見なければいいんだろうか？ でもテレビマンの正体は未だにちよつと気がかりだ。でもテレビマンなんてあだ名が中学校に入つてまで定着したらと思うと背筋が寒くなる。はあ、助けてくれよテレビマン。

そう言えばテレビマンは僕の味方だと言っていた。それから僕を救いたいと言つてさえたような気がする。なら今こそ助けてくれ！ と僕は思う。後からじゃ遅いのだ。僕のイメージがまだぼんやりとした状態である今の内に手を打っておかなきゃ、後からいくら考えたところで解決する策なんてきつと思ひ浮かばない。

そういつたことを頭の中に巡らせながら、やっぱり僕はテレビの前にいた。こうなつたらテレビマンを信じるしかないのだ、と僕は自分に言い聞かす。テレビの前で座禅を組み、お母さんがやつていたヨガの呼吸法でどうにかこうにか自らを高めるような気分についていく。スカアーサナ。ようし、なんかテレビマンが現れるような気がしてきた。どんな気だ？ いや、構わない。僕は真つ黒なりモコンを握り、溝に埃の溜まつた電源ボタンを静かに見据えた。テレビマン様テレビマン様お願いします僕のために出てきて下さい言つたとおり僕を救つて下さいテレビマン様お願いします……

白日夢 1

どういうわけか、俺は朝日が嫌いだ。こんなことは子供の時分には無かったはず、だと思われる、けれどもやはり確証はなく、まあどうでもいいや。立ち上がったてカーテンを閉めきり、さて何をしてやろうかと手持ち無沙汰していると、山積みになっている本から暫くを以て探していたフランチ・カフカの「城」を見つかる。世間では積読本なんて呼ばれているらしいが昔は俺もそうだった。本を買いはいいが、10ページも捲ってちよつとビールでも飲みたいな、と思うと本を閉じ、その積読本と云われる永久凍土の中に本を眠らせる。ツンドクボン。情けないことに俺は文学小説とやらが苦手だった。CDもそう、評判を小耳に挟んで買うはいいが、何がいいのかさっぱりわからない。んでもって世間の阿呆共はこんなものを聴いてきやつきゃ、きやつきゃと喜んでいいのかと心の内で蔑み、得意になって鼻を鳴らし、自分が世代の波に乗り遅れているらしきことを全力で否定する。歳を取ると嫌ってほどそのことがわかつちまうから恐い。しかしCDの良さは今でさえわからないものの、本だけはちと読んでみようかと思っている今日此の頃。ベッドに転がり一つページを捲り、また一つページを捲る。駄目、さっぱり。俺は本を閉じ、やっぱり冷蔵庫からビールを一本取り出す。俺は何にも変わっちゃいないらしいぜ、畜生。自分の何もかもが嫌になる。こんなことだから仕事も無くなるんだ。

そんな時にかかってきた電話は今から紹興酒でも一杯ひっかけないか、という誘いだ。こんな時間に。白日夢で。でも白日夢だ。いい名前じゃねえかよ、と思う。こんな俺達に白日夢。

目標はある。しかし、道は存在しない。俺はカフカの「城」を手携えて煙草をふかし、迷路みたいな下町通りを歩きながら、妄想に耽った。そうだ、あいつらに自慢してやろう。あいつらは馬鹿だ

からまず本なんて読まん。いいところが漫画、それも助平なやつ。どうせならいい酒が呑みたいもんだ。

古臭かった通りにもいつからだか近代的な造りの建物が並んで、透明なガラス張りの美容室、青い光のコンビニエンスストア、じゃんじゃらじゃんじゃら音を漏らすパチンコ屋。そして黒ずんだ看板を引っ提げるコロッケ屋、……なんて敗北感だろうか。こいつらも俺と一緒に。近代的な造りの何がいいのかわからない、といった風な顔をしておいて、実際は嫉妬を募らせている。哀れ哀れ。哀れなり、俺とコロッケ屋。

これだけはどうしようもない迷路のような下町を縫うように歩き、原色の看板。白日夢。昼間だっていうのに、その看板には薄気味悪い、真夜中の森や暗渠を連想させる真緑。俺は胸に苦味とそっくりな嫌悪を感じ、強烈に行きたくなくなつた。嫌だ、もう行きたくない。カーテンを閉め切つて、阿呆な連中と昔話にくだを巻いて敗北の酒を呑むなんざ御免だ。朝日が嫌いなんて駄目な人間の思う所だ。俺は来た道を引き返し、途中に見た公園の中で塗装の禿げたベンチに座つた。そうさ、ここで陽を燦燦と浴びながら手に持った本でも読めばいい。向こうにいるよりかは幾分ましじゃないか。

「おいさん」

ふとその時声が聴こえ、振り返ると幼い男の子がゆらゆら揺れる動物を模した遊具の上で俺を眺めていた。どうやら自分と呼んでいるに違いなく、俺は急に声をかけられたもんだからびっくりしてベンチから腰を浮かせ、「どうした坊主」と開きかけた本をまた閉じてしまった。

「おいさんの本ちよつと読ましてくれない？」

「本？」と俺は、相手が子供であることも忘れて思わず顔を歪めた。そうだよ子供のいうことじゃないか、とすぐさま自分に言い聞かせ、俺はにかつと笑ってベンチから立ち上がり、坊主のところまで寄つて行つて、身を屈めてやつた。

「これはまだがきんちよの読む本じゃねえんだよ。大人になつて

からな」

そう言って坊主の頭を撫でてやろうとした時だった。坊主の目つきがきつ、と鋭くなっただかと思うと、俺目掛けて腕を伸ばした。

「いいから貸せよ」

俺は見事にぱしつと簡単に、手に持っていたフ란ツ・カフカの「城」を奪い取られてしまった。しかしそんなことはどうでもよく、俺は子供の所業に啞然としてしまった。なんてガキだ。人の物を断りもなく奪い取るなんて。これが世間で云う、あの「教育がなっていない」というやつなのだろうか。でもそんなものは俺とは縁遠いものだとばかり思っていたし、テレビの中だけの世界、あるいは誰かの作り話だと思っていた。俺はもう突然のことに頭が混乱しちまっで、怒るところか口を開きかけるが何も言えないし、子供を殴ろうかと考えてそれも面倒事になっただけと思うと気が引けるし、つまり俺はとことん舐められているらしかった。年功序列なんて駄目な人間には当てはまらないのか。そういう金持ちや有名な子供も好き勝手に人を罵るような。となるとこいつは金持ちの息子か？ いやいや、そうでなくても俺みたいに何かに敗北してはいないんだろう。きつと。むかつく。

諦めと怒りを同時に感じた俺は、唇をきゅつと締め、まるで自分の物を取られたようにして背中の方に本を持った手を回す坊主へ、何かひとこと言ってみようかと試みた。だが尚も混乱の余韻は脳膜を巡るし、子供は俺を睨んでいるし、で上手い言葉が見当たらなかった。

そうこうしている内に、若い女の呼び声が俺の耳に届いた。

「たかし」

警戒するような声だった。すると子供はふわつと安心したような笑みを浮かべ、女の方にとたと俺の本を手を持ったまま走り出した。女は両手を開いて子供を抱きかかえ、赤ん坊に喋りかけるように甘えた声で語りかけると、ゆさゆさと腕に抱えた子供を揺すった。

それから俺に向けられた目。まるで人攫いでも見るような目つきであった。胸がかあつと熱くなり、しかし怒りよりも恥ずかしさが勝る。それは俺の本で子供が奪ったのだ、と正直に言いたい、子供は巧妙にそれを母親の視点からは忍ばせているし、俺は元来の気の弱さと上がり性が相まって、少し俯いたまま屈辱に耐えるような恰好で遊具に手をついているだけであった。

それと云うのも、女は無茶苦茶に美人であった。俺とは縁遠いどころか、死ぬまで一言も言葉を交わすようなことがないような美人であった。俺は生まれながらに女や子供に敗北をしているのだ、と悔しくも本能的に悟ってしまったのである。

女は俺を尻目に軽蔑の念を滲ませ、子供の耳元で何か言い、それから背を向けて尻を揺らしてせかせかと歩いていつてしまった。そしてまだそんなものがあつたのかと思うほどに、ごっそりと俺の中の自尊心やらなんやら、自愛の心が根こそぎ奪われ、俺は死にたくなった。このままこの寂れた公園の片隅で死んでしまいたくなった。これは何かの悪い夢か？ 妄想か？ 霜のように不気味な汗を背中にじんわりと搔くあの白日夢か？ 俺の人生はいつから敗北を決定付けられたのだ？ 糞だ。世の中は糞だ。どいつもこいつもが俺に唾を吐きかけようとしやがる。

目標はある。しかし、道は存在しない。俺は帰りに本屋へ寄り、フランツ・カフカの「城」を買って家に帰った。だがやはり、俺は読書をぞんざいにしてビールを飲んだ。俺は俺の城に籠もることになれちまったんだろう。敗北者、負け犬。世間が糞なわけじゃない。ただ単に俺が糞なのだ。俺は自分の陳腐でしかし頑強な城に籠もり、何事に攔いても自分の都合のいいように白い物を黒だと言い、沿わない野郎は阿呆だと頭ごなしに決め付けている。本当の阿呆は俺。救いようの無い阿呆。それでもこの城は癖になる。唯一俺を持て囃してくれる虚無の城だ。

俺はビールを飲みながら白日夢のことを考えていた。あの女が夢

に出てきてくれるといい。孤独な城の中で俺の体のあちこちを温かい舌でなぞってくれる。俺は女の中で何度も射精を繰り返す。俺は下劣な男だ。けれどもそれだっていいじゃないか。大小様々ではあるにせよ、人は誰しもが心に隔離された城を持ち、その中で孤独な白日夢を見ているわけだ。もちろんそれが虚しく終わることを知っていて。

白日夢 2

いくらか呑んでうとうとしかけたところで、電話が鳴り、五月蠅いので保留を押す。しかしまたすぐに掛け直つてくるので、ぶしつけな野郎だ一体誰だ？ と画面を覗くと、そこには西尾智英と文字が浮かび上がっており、そうこいつはあの白日夢で呑んだくれている中の一人だ。仕方ねえ、と体を起こし、肘をついたところに尖った食べかすなんかがあつて、やっぱり今日は心持ちがわりいなあと思いながらも俺は電話に出た。

するとどうも白日夢での呑み会は早々と切り上げられたらしく、「やっぱりセンちゃんがないとどうにもまとまりがなくてさあ」などと西尾は言つて、嘘を申せ、嘘を、と自分は思うのだが、「で、今から来ない？」と言つので、まあいつか、「わかった。着替えるからすぐじゃねえぞ」と返事をした。

でも着替えなんてないや。まああれは言葉のあやといふかなんというか、時間に遅れても問題ないように仕掛けた保険。弱者は対応力に優れてない分、後々のことまでしつかりと考えているのだ。といつてもせめて見据えられる後先はせいぜい二日か三日がいいところだけど。そもそも将来を見据えることが出来ていたらこんなところで油を売っているわけがない。俺のだ阿呆。

商店街を抜けて駅を逸れ、家だらけの中に見つけたるは西尾の住むボロアパート。俺が不思議なのは、奴がどうして家賃を払えているのかということだった。まあ多分、親の脛でも齧つていやがるんだろうな。あの馬鹿野郎。バーカ馬鹿馬鹿。あいつはそういう奴なのだ。

ドアをこんこんと拳で叩き、すぐに中からのしのしという足音が聞こえ、扉が開く。

「いらつしゃい。ノックなんかしなくてもいいのに」

にやりと笑って俺を出迎えた西尾の顔は黒くすすけていて嫌らしく、俺はその瞬間に来たことを後悔した。ああ、なんであんな電話なんかに出ちまったんだろう畜生め、と俺は思わずして自責の念に駆られた。電源切つときゃあよかったんだ。どうせ俺に用のある人間なんてろくなのがいやがらねえんだから。俺はここへ来りやあ少しくらいは心持ちが好転するんじゃないかと思込んでいたのだ、これでも。だが、予想は外れ、結果、西尾の乱杭歯やばさばさの浮浪者髪がより一層俺の気分を沈ませた。俺はこんな連中と付き合って自分を満足させているのだ、ということのを改めて気づかされた。つまりは俺もこいつと同類ということなのだ。

おう、と声を返して中に通され、またもやうんざりする。ひどいもんじゃねえかよ、おい。俺んちよりひどい。俺だって定期的にゴミ袋は外の収集所へやってるし、生モノは冷蔵庫に放り込んでる。しかし、これはなんだ？ これじゃ朝のゴミ収集所まんまじゃねえか。パンパンに膨れ上がった数多のゴミ袋、口の開いたままカーペットに倒れた醤油、壁に張り付いたガム、部屋干しされた干し柿みたいなトランクス、それにこの、もわつとした胸が焼きつくようなひどい匂い。おえつ。ここに比べれば、あるいは公衆便所の方が幾らかはましなのではないだろうか。俺はもう奴への嫌悪が一杯になり、今度は自分を呪い始めてしまった。俺はどうして負け犬なんかに成り下がっちゃったんだろう。俺はせめてもう少しくらいはまともな人間だったはずなのだ。きつと。

しかしあからさまに嫌な顔をするというのもモラルに反するし、なので俺はぐつとこう息を止めて、足の踏み場がない台所をひよひつ、ひよひつ、と片足ずつ器用に下ろして、居間へ着いてから一気に空気を吐き出した。居間には西尾だけでなく、連れの奥田英朗と石平康平もいる。俺は咄嗟に身を引いてしまった。何故というのも、そこにある独特の雰囲気俺を拒絶させるのである。世にも下らない、卑猥な冗談を言い合ってげらげらと笑い、無精髭に缶の口を持

っていつてビールをがばがばと呑む連中のこの光景。ああ、やってしまったのだ、俺は。先刻、敗北の酒を呑むなんざ御免だと言いつたのはどのどいつであろうか。もう駄目だ。俺はもう本当に糞。ここまできたら糞以下かも知れん。

しかもこいつら、何を言い出したかと思えば、今現在小説家になろうと目論んでいる、とへらへらしながら俺に言う。いつか印税で生活するんだ、と言う。しかも全員が全員だ。そんなことが幼稚で軽薄な望みだということがこいつらにはわからないだろうか。そして俺にその原稿とやらを見せ、他人の目も時には大事だとかなんだとか言いやり、つまりは俺に酷評されても気にはしないよ、という心の保険を掛けやがった。負け犬の典型的な自愛、自尊心に自己至上主義。だから俺は徹底的に言ってやることをせず、こう言った。

「まあいいんじゃないやねえか。売れる売れる」

すると保険を掛けやがった石平が、ふふんと自慢気に鼻を鳴らし、壁に寄りかかって薄ら笑いを浮かべながら腕組みをする。どうやらこれは石平が書いた小説のようだった。けったくそ悪い。やっぱりぼろくそになじってやるべきだった。

西尾と奥田は途端に石平に羨望の眼差しを向け、どうやら糞だめの中にも僅かながら優劣関係が出来上がったらしい。しかもずぶの素人である俺の言葉を買ったことだ。こんな奴らが小説家になどなれるはずがない。いつか印税で生活するだと？ 馬鹿馬鹿しい。いつかなどと言ってる内、そのいつかは存在しない。「自分の行いについて、無知であることほど恐ろしいことはない」「行動が全てだ。栄誉に価値はない」「望んでいたものを手に入れたと思い込んでいるときほど、願望から遠く離れていることはない」——ゲーテを読め、ゲーテを。

しかし何を言っても無駄なのだ、こいつらにはもう。しかも今の散文、なんという駄文であろうか、主人公が高校生だと？ 吐かせ、阿呆。あんな高校生はおらん。背が187センチで美少年、スポー

ツ万能で成績は常にトップ。で、そのストーリーというのがまた実に珍妙で白痴。その気取った高校生が雨の帰り道を歩いていると、捨て猫を拾った同じ学校の女子生徒が雨に濡れながら歩いている。そしてそれに胸を打たれた主人公が声をかけて相合傘で一緒に帰り、やがて仲良くなり、主人公は心の温かさを取り戻していく。阿呆。

阿呆の一言に尽きる。どれだけおめでたい話だ馬鹿野郎。大体が猫を拾う奴なんて偽善者にそれ相違ないのであって、家に帰りやあ蚊は殺すはゴキブリは叩き殺すは、命の重みなんてわかっていない野郎なのだ。命に基準なんてものは無し、そもそも命に重みという概念すらない。だって、世界中の人間が菜食主義でなければこれ、採算が合わないじゃないか。まずは処理場でバラバラになる前の牛を助けるシーンから始まって欲しいね。

そして大きく欠如しているのは現実味であって、これにはまるで人間臭さや現実臭さが無い。これじゃ俺の聞いたうんこJ・POP CDと同じじゃねえかよ、と俺は思う。それからあのテレビでやっているドラマやなんか。果たしてあんなものを見ている人間がいるのかと、俺はいつも信じられなかった。視聴率なんてテレビ局がうまいこと誤魔化しているようにしか思えない。

しかしそれとも、とここで俺は思う。

やはり、俺が駄目なのだろうか。俺が駄目だから、見るものが全てつまらなく映ってしまうのだろうか。俺がつまらない人間だから……

こうなるともう、いよいよ俺は俺の城に籠もるしか道がなくなってしまう。俺はこれ以上自分を傷つけない。想像を遮断し、俺は俺の中に籠もらないわけにはいかなくなってくる。それが連中に言った、自己至上主義だとわかっていてもやめられない。俺は所詮、こいつらと同じ敗北者なのだ。

その後で俺の尻ポケットに「城」が挟まっていたことからカフカの話になり、さきの事で勢いづいた石平は調子に乗って「カフカな

んて全然面白くない。つまんない」と言い、それは聞き捨てならん。カフ力は決してつまらなくななどない。俺が本を読めないのは俺がつまらない人間、何かしら先入観を抱いているからであって、もしくは本がお堅いと思い込んでるだけであって、断じてつまらないということはない。そもそもつまらないという批評なぞないんだある。つまり、また石平の自己至上主義。自分のちつぽけな榮譽を守るために必死で、もはや盲目なのだ。大馬鹿。こういう奴は心に巨大な城を持つてる。何事も自分の都合のいい方向に丸め込んでいってしまう。あらゆる可能性をもぎ取り、世界全否定の自己満足に終わる。俺が悪いんじゃない、あいつが悪いんだ、といった具合に。しかしそれも自分の中だけであるのだから、現実は何も好転しない自分が劣っていることを認めた人間だけが、またその階段を上ることを許されるのだ。

しばらくして「で、俺に自作の小説を見せるために呼んだのか？」と俺は言い、奴らは「そうだよ」なんて言いやがるから、俺はもう完全に頭にきた。

立ち上がった後ろも見ずに、そこらのゴミを蹴飛ばしながら歩いて玄関を出てやった。連中にどう解釈されたところでかまうもんか。やはり追ってくる奴はいない、臆病の集まりだからな、ふん。他人の振り見て我が振り直せ、とは正にこのことだと思い、俺は決めた。もう連中とは付き合わない。俺には色々考えることが必要だ。いや、その前に何より行動が必要なのだ。こんな時のために読んでおいてよかった、ゲーテ格言集。行動とは成功や失敗のためにあるのではない、少なくとも今の自分には。

じゃああいつらは一体いつになったら気がつくんだろう、と俺は思う。互いを褒めちぎり合い、グループマスターベーションを延々続けている。俺はもう御免だ。本気で御免だ。絶対、二度と繰り返さない。こうなると、城とは個人だけが有するものではないのかもしれない。あるいは共有も。

……ああ、そうか、なるほど。あいつらも白日夢の中にいるんだ。夢の中にいすぎて、もう現実と錯誤しちまってるんだ。

俺はもう電話が掛かってこないように電源を切り、道をずんずん歩いて来た道に戻った。しかし、家に帰って何をしよう。ランニングでもするか？　なんて考え、それでもいいな、うん。健康にもいい。だが家に帰ってもし俺という野郎がビールに手をつけちゃうことを考えると、少々肌寒い。まず自分をよく知れ、思い出せ。となると今帰るのは絶対によくない。俺はそれで駄目になるんだ、いつも。

じゃあどうする？　よしこうしよう。

要は連中のところに行かなければいいのだから、別の友人宅にお邪魔しよう。しかしこうなると、その数が相当に限られてくる。なにせあの馬鹿な連中とばかり毎日飲んだくれていたわけで、高校時代の友人などとはほとんど縁が切れてしまったわけである。ふむ。となるとやはり、村上しかない。でもあいつんちになんか行つて何すんだ？

ええい、ままよ、ってんで俺は決断する。行かないよりはまし。行動が全てだ。さ、行こう。

メゾネットタイプ。と云うのか知らんが、まあ簡単のところ、平屋をぶった切って二つに分けたようなアパートで、村上はその左側に住んでいる。俺は錆びて茶色くなった心許ない階段を上り、またドアをぐんぐんと拳で叩いた。しかし人の気配がない。どこかへ出かけてしまったのだろうか。けれどもこの村上という男、質素というか得体の知れない貧乏臭さがあって、自分もあまり知らないのではあるが、アウトドア派にはどう考えても属さない。

なんだろう、部屋でこっそり死んでるんじゃないだろうな、だったら嫌だな、なんて思いながらドアに耳をあてていると、ばいんといきなりドアが開いて、出てきたのが仄暗い瞳をした村上。あたた。俺がしこたまぶつけた鼻を手で押さえていると、奴はドアを半分開け、ぴくりとも笑わずに冷たい無感動な目で「……何やってんの？」と言う。

「いやさ、行くとこねえからよ、お前んとこ来た」

「じゃいいよ。上がんなよ」

言われた通り玄関に入り、靴を脱いで村上の後を追う。台所は随分と小ぢんまりしているものの、簡素でまあ清潔。しかしこれ、貧乏を絵に描いたような家の中で、本当に何も無い。しかも日用品なんかが要所にきちんと整頓されているから、余計にがらんとした印象を受ける。床もなんだか心許なく、俺と村上が踏むたびに、にし、と軋むのである。

「泥棒がげんなりして帰っちまうような家だなあ。風呂はねえの？」

俺が言うと村上は振り向いて顔半分だけ覗かせ、また向き直る。

「ない」

村上に通された部屋には飾り気というものが全く皆無で、部屋の中央に四角い白のテーブルがあり、上にノート型のパソコンが一台、

様々な袋の飴が丸い綿棒の容器に似た円筒型の透明プラスチックに詰め込まれている。味気ねえなあ。呟きながら俺は部屋の中をついぞ見渡すが、やはりこれ以外に目のつくものがない。天井はやはり低く、所々雨漏りの痕が黒ずんでいて見る影もない。もう木が腐りかけている。

「お前んちテレビもねえのかよ」と俺が言うと、村上は特に気にもしない顔で「ないよ。飴食べる？」と俺に訊く。要りません。俺が邪険に手を振ると奴は容器をぱかっと開けて中から小さな袋をつまみ、袋を剥いで飴を口に放り込んだ。

「お前いつもこの部屋で何やってんのよ、一人で」と自分はうすぼんやりと村上に尋ねた。

というのも、こんな部屋にいたのでは気が滅入ってしまつて仕方がないのではないかと自分は思つたのだ。これなら幾らか散らかつていた方がましかも知れん、というのは駄目な人間が思うもんなん？ 少なくとも俺は駄目。散らかつてないと居心地悪いもん。えへ。だが村上はやはり呆けた顔で、雨を口の中で転がしながら「別に」とかつたるそうに言う。

「別につて。何かあるべよ、せめて本読んだり、なんか雑誌とかよう」と自分はそこの床を見渡し、ほらあつた、本があるじゃねえか。とそこには見知つた名前。「あつ、なんだこれ、カフカ？」

「変身」と奴が言い、飴をこりこり噛み砕いて胡坐を掻く。

本は使い込まれた歯ブラシのようにページが外を向いていて、村上がどれだけ読みふけたかがわかる。ほらね、やっぱりカフカはつまらなくなどないのだよ、と俺は自分に半分、阿呆の連中に半分、頭の中で呟いた。まあ読んだのは俺じゃねえけども。

「俺も持つてんだ、今日。ほら城」

尻ポケットから文庫本を引っ張り出し自分が言つと、村上はそれほど興味なさそうに目を細め、また視線をそこらへ投げやった。その後で今度は自分の足の爪を指先で何やらいじりだす、と思つたらきつたねえ、爪の垢をほじくり出してるんじゃないか。

つたく、と俺は一人で呟いた。こつちもこつちで随分とまたやぐざな部屋じゃねえか。

村上がそうして俯いていると、奴の顔はほとんど髪に埋もれる。村上の髪は真つ黒で前髪が特に長く、まるで頭から醬油をかぶったみたいに見える。そして襟の伸びきった白いＴシャツ。腕や脚は俺以上に白く、すらりと伸びてはいるが木の枝のように細い。

「お前さ、あいつらが何やってるか知ってる？」と話題もないので俺は言う。

「あいつらって誰？」

爪をほじくりながら村上が言い、俺はポケットから煙草を取り出して火を点けた。

「西尾と奥田と石平」

「あの三人が何かしてるわけ？」

俺はふふんと笑って薄ら笑いで煙を吐き、出来うる限りの皮肉を込めて言った。「あいつらさ、小説書いてるんだとよ」

「俺も書いてるよ」

「えっ、なんじゃそら」

と自分が頓狂な声を上げると、村上は俺をちらと一瞥してから灰皿に爪の垢をまぶし、小指で耳の穴をほじりながら言った。

「知らないよ、そんなの。でもこの前あいつらに書いた小説見せた」

「……はあ？　ってことは何？　お前に影響されて書いてるわけ？　あの馬鹿共」

「知らないよ」

どこまでも軽率な野郎共である。して俺は言う。

「お前何か言わねえのかよ、ふざけんなとか、やめろとか」

「どうして？」

あつけらかんと村上に言われ、そう言えばなんでだ？　と俺も思う。なんで奴らが真似しちゃいけないんだ？

「ムカツクだろうよ、だって」と俺は言う。

「そんなの自由じゃん」

ふいにくしゃみが出る。えつくしゅん。他人の噂話をしている時になぜくしゃみ？ 俺はずずず、と鼻水を嚙りながら考えた。そらまあ、村上の言っていることは正論だ。世の人々は俺も含め、何かしらに影響を受けた上で活動している。じゃけどさ、やつぱり他人のお株を易々と真似てみせるなんざ失礼千万、白痴というものじゃないのだろうか？ それともやはり村上にはそれ相当の自信があつて、余裕綽々なのであろうか。俺だったらどうする？ きつと一喝するに違いない。だって気に食わないもん。あんな自己完結の間抜け野郎共に思いつきで真似されたんじゃないかなんだかこっちのやる気が出ない。でもそれってやつぱりエゴかしら。そこは常識人として何も言わず乙に澄ますべきなのだろうか。でも釈然としないよやつぱり。

村上は爪をほじくり終えると座椅子に座り、テーブルに胸をひつけてパソコンを立ち上げる。左手で耳をほじくりながら、マウスをクリッククリック。マイクロソフトなんたら云うのを開いて、出てきたるは傍線のみ引かれた白紙。村上は何やら神妙な顔でその四角い画面と睨めっこを始める。

「何始めんのよ」と俺は村上に尋ねる。

「……いや、執筆」

村上は画面を睨んだまま俺に言い、突然キーボードを打ち出す。カタカタカタカタ。そしてふと手を止め、また睨み合ったかと思うと、カタカタカタカタ。

仕方がないので俺は寝転んで天井をしばし見つめ、その後でカフカの「城」を手にとってまた開いた。でも駄目だ。他人の家じゃなおさら読書なんて出来やしない。ナイーブなのだね、俺は。投げ出した足の先では村上が変わらず睨めっこを続けていて、時々ふと何かの意志に駆られるみたいに、カタカタカタカタツと凄じ速さでキーボードを叩きだす。そんな作業を延々と続けていくのである。しかもその執筆とやらに集中している時の村上には静かな迫力のよう

なものがあつて、なかなかどうして声をかける隙がない。

小説を書くことの何がおもしろいやら、俺には見当もつかない。ま、そういうのはきつと書いてる人間にしかわからねえんだろぅなあ、とは思ふ。しかしなんだろぅ、俺が思うに、村上の目指す目的地と石平共の目指す目的地はやはり別なんだと思う。誰かをちよいと真似して成功を手にしようなんて思う人間が本当に成功できるはずもない。まず連中の目指すところは金だ。金と金と金だ。それからどうこうという話じゃなく、ただ目的が金なのだ。とは言つてもやはり村上の目的地にもあるいは金が関連しているのではないかと俺は思う。しかしそれだけではないはずだ。人は心から喜びを感じないことに自ら打ち込むことは出来ない。村上にあつて連中にないは独自性だ。何かを作ろうとしている人間はその完成にしか目がいかない。それは駄目人間の俺がよくわかつてる。つまるところ人は漠然とした金のためにここまで真剣になることができるのだろぅか、ということ。ちよつと俺には想像がつかない。あるいは可能かもしれないが、よほど金に貪欲でなければ出来ない、とも俺は思う。

「順調？」と俺は訊く。

ややあつてから素っ気なく、「まあね」と村上は答える。

「どんぐらい進んでんのよ」

「原稿用紙だったら多分300枚くらい」

「ふーん。でもさ、それって出来上がったらどうすんの？ どうかに送るん？」

「送る。出版社に」

「送つてどうすんだよ」

「世に出してもらふ」

「で？」

「また次のやつを書く」

「そうか」と俺は言つた。

どうやら村上には目標があり、道が存在しているらしい。俺はな

んとも云えぬ感情が満ちてくるのを腹の辺りに感じた。悲しみとも違うし、悔しさともまた違う。音もない空洞にすっぽりと身を入れたい。あるいは虚しさなのかもしれない。いや、虚しさだつてきつとまた違う。俺は何も感じていないのだ。何も感じていないし、何も考えていないのだ。

「おう、なんか飲み物くれよ」と俺は言った。

「冷蔵庫に入ってる」

果たして冷蔵庫なんかありましたっけ？　と思いながら台所に行ったら、玄関の死角にちょうど人間が丸くなつたぐらいの大きさの小型冷蔵庫があつた。開けるとコカ・コーラのペットボトルがあつたのでこりゃいいな、と思って流し込んだら背中に寒気が走つた。

「おまつ、これ腐ってるじゃねえかよ！」

「違うよ。それ中身がコーヒーなんだよ」

村上に言われて匂いを嗅ぐと確かにそれはコーヒーだつた。あまりに想像した味と違うもんだからびっくりしたのだ。

「何だよ、何か一言いつてくれりゃあよかったのにさ」

「ごめん」

と言いつつもやはり村上はパソコンを睨みつけたままだ。

コーヒーを飲みながら俺は思った。俺は一体何をしているんだろう？　何しにきたんだっけ、そもそも。つまり人生のメタファーとして、さ。

ボーリング・フォー・リボーン 1

遠心力で素肌が赤くなるのも厭わずに、私は腕を支点にしてハンドバッグをブンブンと振り回し、その力とは全然関係のないところで決意をぐつと固める。友達からその誘いがあつたとき、私の第六感はいっぴん！ と反応してアドレナリンとエンドルフィンがドクドクでもう有頂天。ひゃっほーい。これはチャンスなのだ、彼を立ち上がらせる。今思うと全然第六感ではないのだが、私を救ってくれたことには変わりない。いやもつと正確に言えば、まだ何も救われてない。けどやっぱりこれはかなりの名案。希望の光は差し込んでいる。計画通りに事が進めば、私の理想郷が手に入るのだ。

階段を緑のラメが入ったミニールでトントントン上がって自宅に到着すると、中では寝つ転がって、畳に肘ついてテレビを見てるどーしよーもない甲斐性なしが一人いる。何を隠そう、これが私の彼氏なのだ。世界で一番愛するかけがえのない人……なハズなのに、最近じゃめつきりデートも減って、でもケンカは増えて、3日間口利かなくなったりした挙句、結局仲直りのセックスで元通り、みたいなカップルに私達はなっている。墮落、怠惰、不純。でも私は彼を養ってるんだよ？ コンビニの弁当選びが下手とか、見るテレビ番組が下らないとか、人に言う前にやることあるんじゃないの？ と本当はいつだってぶちまけたいが、彼を傷つけてしまう可能性が高いので私は言わない。だって結局、私は彼を愛してるんだから。

半日ミニールを履き続けていたせいでふくらはぎがパンパン。もみもみしながら部屋へ進むと彼は私が家に帰ったのも気づかないみたいなので後ろからこっそり近づいて驚かしてやろう、うっしっしっ……と思ったら彼は言った。

「おかえり」

「……なあって。気づいてたなら言つてよ」と私は彼の肩口ま

で伸ばした手を引っ込め、ベッドルームの方にくるりと方向転換して服を脱ぎ脱ぎしながら「今日は何やってたのー？」と彼に訊く。「別に何も」と彼。訊くまでも無かったか。「あっそう」と私も答えて会話終了。テレビの音だけが沈黙の中を泳いで、まるでうちらは倦怠期の夫婦みたい。私は気を取り直して、クローゼットのハンガーに脱いだちびパーカをちゃんと掛けながら「ねー、明日ヒマー」と彼に訊く。本当は訊くまでもないことだけど彼の自尊心を気づかう私ってえらい。彼は「なんで？」とだけ言う。なんでってあんたはどーせ毎日ヒマーでしょーが、と内心思うけどそれもやっぱり言わないでおく。彼の機嫌を損ねることは、ホント今だけは命取り。彼が頭をぼりぼり掻きながらおもむろにタバコに火を点けている間、私はクローゼットの中でカチャカチャとハンガー達が互いの身を擦りあう音を聞きながら、どうしたら彼が興味を持ってくれるのか考える。でも結局何も思い浮かびそうになくて、私はそのまま伝えてしまう。

「んー……明日ね、ちょっと出かけたいなーと思ってさー」

「どこに？」

「ボーリング。学校の友達と一緒に」

「はあ？ 何それ」と彼はテレビからようやく目を離して、私のいるベッドルームへ首をねじ曲げる。私は中学校から愛用してるジヤージにすっぽりと頭を入れて歩き、彼の傍のソファーに腰掛け、ちゃんと彼の目を見る。「何なんだよ」と彼は言う。「だからあ、あたしの友達と紋太とあたしでボーリング行こうって言うてんの。4人でダブルデートしよ」私がそう言うのと彼は少し固まって、目をじっと見つめてから「やだ」とだけ言った。

「えー、なんでよー」

「なんでもだよ。俺やだ、行きたくねえ」

「どうして？」と私は訊く。

「だからどうしてもだよ。俺はだるいの、そういうの」

わかっていただけだけど彼の断固とした引きこもり宣言を聞くと、

私はやっぱりうんざりしてどこまでも鬱になる。帰る途中に考えていたデートのあんなプランやこんなプランが音も立てずに、まるで砂浜に造った泥のお城みたいに物憂げな波に流されて消えていく。私が大きなため息をついて手に持っていた新しい下着を床に力無く放り投げると、また沈黙がやってきて彼もまたテレビに視線を戻して、ついにはやっぱり、怒りが込み上げてしまった。

「ねえ、お願いだからもつとちゃんとしてよ。家にばかり籠もってないで。あたしだって紋太ともつと出かけたりとかしたいんだからさー」

「うるさい」と彼は言うけど、やっぱり力無い反論。私の彼氏は決して悪い人間じゃない。だから自分がヒモであることにちゃんと罪悪感を持ってるし、私にも感謝してる、と思う。後ろめたさを時々滲ませてることぐらい、私にだって気づく。

「今回だけでいいの。今回だけでいいから一緒に行こう、……ね？」

「だってお前の友達でしょ？」と彼は倦怠感丸出しで首をのっそり動かして、灰皿にトントンと煙草の灰を落とす。「前に見たけどさー、お前の友達ってなんか阿呆そうな奴ばかりなんだもん。意味もなく群れてさー。女みたいに笑って、わけわかめーとか言ってる連中だろどうせ」

「いや、……ってかそんなこと言わないし」

「じゃあいつも何やってんの？ お前から友達の話聞いてるとみんな暇を持て余してるから仕方なく一緒にいるって感じじゃん。いつか電車無くなって電話かけたらみんなに遊ぶの断られたってお前言ってたじゃん。だからそれぐらいの関係なんだってば。でしょ？俺なんか間違ったこと言ってる？」

それでも人と付き合えないあんたよりはマシ。と私は思うけどここで怒ってしまったらいつもの繰り返しになるだけなのでぐっと我慢して、「そうなのかもしれないけど……」と肩を落として悲しんだふりをする。私ってえらい！

「いや、別にお前に言ってるわけじゃないからね」と彼も私の演技にかつがれてちよつと慌ててる。

「いいいいの、無理して誘うわけじゃないからさ。うん、わかった。その日は家でゆっくりしててよ」と私は言って立ち上がり、顔を伏せて涙を拭うふりをして啞然とする彼の横を、いかにも傷ついてますみたいな足取りで早々と過ぎ、ベッドにはたんと横になり枕に顔をうずめる。奥の手をととうと私は使った。これは鉄板なのである。彼にとって一番弱いであろう、私の涙。すぐに隣の部屋で彼が立ち上がるのがわかった。

「待つてよ、行くよ。行くつて。俺も暇なんだからさ、もしかしたら仲良くなれるかもしれないし、その大学の子達とも」

作戦成功。うっしっしっしっ。

ボーリング・フォー・リボン 2

ダブルデートの第三土曜日はすぐにやってきた。彼は久しぶりに髪をセットして、等身大の鏡に向かつてあらゆる角度から自分の身だしなみをチェックしてる。A型の割りに小まめではないけれど、その代わり彼はとつても神経質なのだ。潔癖症の完璧主義。しかも無駄なところばかり繊細で、ちよつとでも髪型が自分のイメージ通りに整わないと、今日はもう出かけない、とか本気で言い出しかねない。ここで私の舌技が活躍する。「それかっこいい」「あ、似合う似合う」「今日は今まであたしが見た紋太の中でベスト5には入るかも」などなど、言われた方の紋太もまんざらじゃなく、ちよつと嬉しそうに笑ったりする。んでそんな彼にこっちが胸キュンしちゃったり。もう紋太かわいー！

私の今日の恰好は、胸元に花柄の散りばめられたピンクのキャミソールをトップスに、タイトなパンツで頭には力チューシャ。それから白のバッグと、今日はけっこう歩くことになりそーなので、ぴったしあたしのために造られたような身長底上げ赤のパンプスを履いて準備完了。でもやっぱり彼はまだ鏡の前にいて、髪の毛のトップスを異常なまでに気にしている。「もう行くよー」と私が言っても彼は「うーん」とか適当な相づちばかり打って、ちつとも鏡の前から動く気配がない。

「もう十分かっこいいよー、紋太ー」

「うーん」

「そのシャツ似合ってるし大丈夫だからー」

「うーん」

「行こうよー、間に合わなくなっちゃうよー」

「うーん」

玄関から彼の姿を見ると、シャドーボクシングでもしてるみたいに見える。鏡の前であらゆる視点を確認して、その最中でも彼

の目は大真面目。私はタマちゃんにメールを送って、一応遅れるかもという連絡をしておく。また彼に「行こうよー友達待ってるー」と言ってみるけど、返ってくるのは「うーん」。はあ、どうしようもない。私は玄関のドアを開けて首をによつと出し、お空の具合を確かめてみる。空は私達の新たな出発を祝福してくれてるみたいだ。ド晴天だった。薄ーい雲がホント空の上の方に貼りついてるだけで、全体的には海みたいになつて青だった。「行くよ」と後ろから押されて私はびっくりする。「ちょちょちょ……」とか言って振り返ると、ケラケラ笑ったどうやら準備万端の彼が私を指差していた。

『贅沢は日本の敵です』精神を燦然と掲げる私達は時間に遅れようがお腹が痛かろーが、決してタクシーには乗らず、1キロ半ある駅までの道のりをのろのろと歩く。彼は昔から歩くのが早いけど、この時ばかりは私に合わせてくれているらしい。そして私達はぺちやくちや話し、楽しげに笑う。ああ、今日はなんていい日なんだろう。彼も段々うきうきしてきたらしく、話がいつもより断然弾んでる。犬の散歩してる姿を二人でかわいーと言いつたり、私なんでもない道で転びそうになったりするのを、私達は楽しむ。こういうなんでもないことがホント一番の幸せ。彼と私の間にはちゃんと二人分の空気があってそれがすごく心地いい。彼は笑う度に口の端から八重歯が覗いてかわいいのだ。えへえへあへへ。……っていうか彼が家から出たのって一週間ぶりくらいじゃない？ と私は頭の中で思う。あ、でもタバコは自分で買いに行ってるか。でもゴハンはいっつも私が帰りに買ってくるまで食べてないみたいだし、とりあえず遠出するのは相当久しぶりってことか。うん、それでいいや。

それから駅に着いて二人分の切符を私が買って、溝の口行きの電車に乗る。電車の中でも私達はラブラブで、私が腕を取ったりすると彼は嫌がるけど、それでも私は全然楽しい。これじゃどっちが久しぶりの外出なんだかわからないけど、正にこれこそが私の求める

理想郷。だから彼には今日だけじゃなくて、本当に変わってもらわなきゃいけないんだ。週に1回はこれがなきゃ彼氏のいる意味なんてないもん。

溝の口で降りて私が預かった切符を彼に渡して改札を抜けて、困惑気味の彼の手を取り、私はマルイの方へ歩く。手を離して彼の腕に自分の腕を巻きつけながら、なんだかもダブルデートにしないでよかったな、とすら私は思う。このまま二人でお買い物してカラオケ行つて、シツクなバーでお酒飲んで、最後はラブホで締めくくりたい。紋太を今日一日独り占めにしたい。けど私だけが誘ったんじゃ彼は行かないだろうな、と私がぼんやり興ざめしていると、前方にタマちゃん発見！ タマちゃんは無邪気にぴよんぴよん跳ねながら、人ごみの中で必死に私達に手を振ってる。横にいるのがどうやら彼氏みたいで、身長が180近くはある、タマちゃんとはかなり身長差カップルな男の子みたいだった。

「お前先行つてろよ」と私の横で紋太が突然言つて、私は動揺する。「えっ、なんで？」と訊くと、彼は「タバコ買ってくる」というので私は超心配になって、「バックレたりしないよね？」とおそるおそる訊くと、彼は笑つて「バカ、ここまで来てそんなことしねーよ」と言つので安心。「じゃあタマちゃん達とあの場所待ってるから」と彼を行かせて私は一足先にタマちゃん達と合流する。私はタマちゃんの方まで小走りして、タマちゃんと強烈なハグ。傍にいた彼氏の平和な笑い声が私の耳に届く。「元気ー？」とかタマちゃんに訊くので、そら昨日会ったばっかなんだから元気にきまつてるがな、とか思っけど一応「うん、元気ー」とか答えておく。「あれ？ 彼氏さんは？」と言つので「あ、今タバコ買いに行つてるー」と私はタマちゃんに言う。「あたしミーちゃんの彼氏に会った初めてだー。なんか緊張するー」とか言つので、私もちよつと緊張。「へーきだよ。全然フツーの奴だから」と答えて、私は「こんにちわ」と今度はタマちゃんの彼氏に挨拶する。「こんにちわ」と答えるタマちゃんの彼氏は、紋太とはまた違った感じに笑顔の似合う人

で、日本人的なつぺりした醤油顔をしてる。良く言えばもこみち風で、悪く言えば千原ジュニア風（我ながらすげえ差だな、おい）。とりあえず頭にかぶった哺乳瓶みたいなニットキャップは抜群に似合ってるぜ！

それからタマちゃんの補足で、ニット君が私達の1個下だということが判明。どつりで氣い使ってんなー、と思ったらそういうわけか。それから3人で立ち話をして、主にタマちゃんとニット君の話。二人も夏になったら同棲を始めるらしい。同棲ってそんな楽じゃないよー、とかおばさん臭いことを頭の中でぐるぐるさせるけど、二人の前途を濁すような真似はしたくないので黙っておく。それより私は紋太がなかなか帰って来ないことにハラハラドキドキしっぱなしだった。おいおいおいおい何やってんだよー。まさか迷ってんのか？ それともタバコ買いに行くっつーのは嘘でホントは帰ったんか？ でも彼は意外にも、それからあっさりと帰ってきた。人見知りな紋太らしく、ホント素っ気ない。「行こ」と私に声をかけただけで、タバコを吸いながらタマちゃんズには目を合わせない。気まぐずい雰囲気をごまかすように私とタマちゃんが神経質にハハハと笑って、んじゃ行こっかみたいな雰囲気とうまいこと持っていく。ダブルデートと言っても、やっぱりタマちゃんと私が話しすぎちゃうのは男二人（特にあたしの方）を孤立させる要因になり兼ねないので、私達は絶妙な目配せで意思を疎通し合い、ちよっとお互い離れて自分の男と並んで歩く。急に無口になってしまった紋太の腕を私は引っ張り、「うー」とか唸りながら甘えてみせるけどやっぱりダメで、彼はどこ見てんだかわからない感じでタバコのフィルターを口に運んでる。

「もつと話そうよー」と私は言う。彼はタバコを指先でピンと弾いて、歩きながら踏み踏みする。「誰と？」そう言ったのはそれからだった。「誰とって、決まってんじゃん」と私は言う。すると彼

は気の抜けた表情で伸びをして、急にお出かけに冷めちゃった子供
みたいに半開きの目で私を見る。「だってつまんなそうなんだもん。
美奈子と二人の方がよかった」ドキっとしてしまふ。というか嬉し
い。けどもやっぱり憂鬱。あゝホントにメンドクセ。「そんなこ
とと言わないで楽しもうよ」とか私は言うけど、楽しもうよって楽
しんでない人間に言う言葉か？とか自分で思っ、て、「ってかダブ
ルデートって言ってもそんなにあっちと絡みないよ、多分」と訂正
する。彼はふゝん、とそれほど興味なさそうな相づちを打って、「
まあフツーにしてるわ」とか言われて、私はびみょーな心持ちにな
る。……ああ、一体この場でのフツーってなんなんだろう？

ボーリング・フォー・リボーン 3

川上ボウリングは土曜ってこともあって、けっこう混んでいたんだけどレーンを取れてラッキー。私達4人はジューズを買ってコンピュータに名前を入力。タマ、ミー、モン、ジロ。玉見紋次郎？まあそれはいいとして、私達はそれぞれダッサイ靴をレンタル＆自分用のボールを持ってきて、12号って重てえーとか思いながら私は第一投。はい、ガーター。はい、スぺア。どうでもいいけどボーリングの玉ってハニワに似てんなーとか思ったり。

「12号重くないですかー？」と私に訊いてきたのはニコニコしたタマちゃんの彼氏で、「うん、ちよつとあたしには重いかも」と言う、彼はなんと私のために8号のボールを持ってきてくれて、うひょーこれ軽ーいとか思いながら彼に「ありがとう、ごめんねー」と言つて、彼は「アハハ、いいんです。アハハ」と笑つて、いい子……とかしみじみ思う私。それに比べて私の紋太と言ったら仏頂面でただでさえ狭いレーン手前に設けられた椅子でタバコをプカプカ吸つて、自分の順番になると幽霊みたいにふらふら投げて、あははガーターでやんのー、とか笑つてやりたいけどそんな雰囲気じゃなくてむしろ気まづくなっちゃうんですけど、これなんなんですか？もう私の方が居たたまれなくなつて、タマちゃんとジロ君が話してる隙を狙つて紋太にすり寄つて、「もう帰る？ 帰りたい？」とか真剣に訊くけど彼はなぜか不機嫌みたいで、私の言うことを聞いてるんだかどうなんだかもわからない。そして私はちよつと泣きそうになる。本気で泣きそうになる。やばい。心がぶるつと震えたら涙の合図。必死で盛り上げようとする自分が可哀相に思えちゃったりすると余計に泣けちゃう。あ、ホントやばいやばいやばいやばい私は顔を伏せて、「ん、ひつく」「あひつ、ん」みたいな嗚咽をなんとか堪えることに全神経を集中する。おいおいおいあたし何やってんだよー、とか内心の声は全然冷静なのに、涙腺や湧き上が

る感情は全くの制御不能。心臓がめちゃくちゃドキドキしてきて、川上ボウリングのアナウンスやタマちゃんズの楽しげな笑い声にエコーがかかる。「お前さっきあいつと話してただろ」と横にいる紋太が言つて、私は泣いてて混乱してるせいで彼の言葉の意味がよくわからない。「お前の彼氏つて誰だよ。もうつまんねえよ」と言われた時点でハツと言葉の意味に気づいて、途端に涙が止まる。何？タマちゃんの彼氏とたかが二言三言話ただけでこいつ怒ってるの？器小さっ！私はとりあえず荒くなった息を静めることだけに一点集中を図り、言い返す言葉を見つけ出す。「そっれは、違ふよ。ただっ……ふっ、ボーリング、の玉持ってきてもらっただけだよっ」私はじゅるじゅるの鼻水をすすり上げ、涙を両手の指で拭う。どうやら彼は私の涙に気づいてるみたいだけど、私が泣いてる理由を多分勘違いしてる。私が泣いてるのは人の彼氏と話したぐらいのちっけな罪悪感からじゃなくて、自分があまりにも頑張り屋さんだから泣いてるんだよー！と思うと、またぶわっとな涙が溢れてきた。思いつきり自滅。しかもそんなタイミングの悪い時に私の番が回ってきて、タマちゃんが「ミーちゃんの番だよー」と元気一杯に言うので私は顔を背けながら「おっけー」と答えて玉を持つけど明らかに不自然。腹筋はまだひくひくしてるし、走っても歩いてもないのに、肩で息をしてる。神様、お願いだからあっちの二人の雰囲気までは悪くしないで下さい。

そしてガーター二連続。涙で視界はゆらゆら歪んでるし、力はいらないし、足元はふらふら。そりゃしょーがないよ、美奈子たん。でもそのおかげで涙は幾分治まった。目の端はきつと赤いだろうけど、今ならまだごまかせそう。私とすれ違った紋太はおどおどして、少しだけ私が泣いてることにびびってるみたいだった。そしてまたあいつもガーター。下手くそだなあ、ジロ君なんてターキーとか取っちゃってんのに。

終わってみると、やっぱりジロ君の圧倒的勝利。スコア218つですげえ。私なんて100も行ったことないのに。でももつとすごいことが起こっていたことを私はこの時まだ知らなくて、「誰がビリ誰がビリ？」と涙の後の空気で画面を覗くと、71と68つてのが並んで、あゝ私がビリか、と思ったらペケの名前はモンだった。

「あ」はい、思いつきり低い声出ました。

けれど挫けない私の心は、一つのことだけを願っていた。こういう時の紋太には絶対に慰めの言葉をかけちゃいけない。プライドの高い、自分崇高の彼は決して相手に同情をかけられるのを許さない。私はすぐに紋太をトイレにでも誘って気を落ち着かせようとしたけど、タマちゃんの方が一瞬早かった。彼女には何の罪もないのだ。ただ場をちよつと和ませただけなのだ。

「また次あるよ、ドンマイドンマイ。そうだ、もう一戦やるつかー？」

紋太が背を向けるのが見えて、私は全てが終わったことを確信した。すたすたと出口の方に向かっていく彼にタマちゃんズは啞然としていて、私は咄嗟に紋太に駆け寄った。彼はすごい速さで歩いて、私の小走りでやっと追いつくと、ピタリと足を止めて私に得意のスネた半開きの目を向けて言った。「俺、もう帰るわ」私はまた泣きそうになる。口を開くけど言葉に詰まって、紋太の目を見ると何も言えなくなる。バカバカバカバカ、クソ紋太。お前ふざけんなよ、マジで。全部お前のせいなんだからな、と私の中の冷静な私は言うけど、それが言葉として表に出てくることはない。私は涙が出そうになるのを必死で答えながら、どうしてなの？ という目線を彼に送る。でも彼はもう完全にどーでもいーやーモードに突入していて、お目々うるうる作戦ももはや通用しない。じゃあ私はどうすればいいの？ もう何もわからない。

「紋太はどうしたいの？」と私は必死に言う。「私はどうすれば

いいの？」

「……」

「何か言ってよ、二人も待ってるんだよ？」

「……」

「ねえ戻ろう。戻って笑ってれば二人も全然気にしないよ」

「やだ」と彼は言って、私にずんずん近寄ってきて、頬をパチンと叩かれるのかと思ったら、何を思ったのか、彼は私の口にキスをした。私は声にならないかすれた声で「えっ」と思わず言って、目をまん丸にしてると、紋太は相変わらずあの冷めた目のまんまだった。なんじゃこりゃ。なんであたしキスされてんの？　とうとう紋太は頭がイカレちまったのか？　それとも私が現実逃避しすぎてヘンな夢でも見てるのか？　ぐるぐるぐるぐる。何がどうなってるのかかわからなすぎ。でも彼が私に背を向けてどうやら帰ってしまったいそうな感じなので、私は「待ってよ」とつい口にする。

「俺が謝ってたって言つといて。俺やっぱわけわかめとか言ってる連中とは付き合えねえわ」

え？　ってかだからわけわかめとか言わないし。しかしそれを捨て台詞に彼は本当に行ってしまう。私の足はもう動かなかった。紋太のあのキスが私の心をごっそり奪い取って、もう立ってるのもツライ。この場にへたり込んでわんわん泣けたらと思う。悲しいキスってことでいいのかな？　そんな気もするし、なんか全然違う気もするんだけど。

レーンに戻ると、タマちゃんの涙がさらに私の心をごっそりと根こそぎ奪った。タマちゃんは椅子に座って膝に顔をうずめるようにして泣いていた。彼氏がハンカチを出すけどひたすら首を振って、自分を責める言葉と共に泣いてる。ジロ君の真剣に慰める優しい言葉がタマちゃん涙を助長する。最悪の状況に陥っても、こんなカップル羨ましいと思ってしまう自分。私は最低の不幸を呼ぶ女だ。タマちゃんは元々なんの関係もなかったのに。

しばらく私が立ち尽くしていると、ジロ君が存在に気づいて立ち上がり、「ほら美奈子さん戻って来たよ」とタマちゃんに言うけど、タマちゃんは「ごめんね、ごめんね」しか言えなくて、ジロ君は私に黙って首を振る。それから私に歩み寄ってきて「ごめんね」とお互い言い合った後、ジロ君が私に説明を求める。そりやそうだ。私にだってよくわからん。なんて説明したらいいんだろう。「人見知りがすごいんだ。だからホント二人のことが嫌だったとかそんなんじゃないくてさ」と私は言う。でもジロ君はちよつと納得いかないみたいで首を傾げて、「え、何？　どういう人なの？」と私に訊く。近くで見たジロ君の顔はすごくシリアスで、私はちよつと怯える。赤く充血した瞳に怯える。ジロ君だってちよつと腹が立ってるんだ。そりやそーだよなー、と。だって彼女が泣いちゃったわけだし。あいつはすんげー自己中なわけだし。「まあ、なんていうか、……すぐく内にこもるタイプで」私がそう言うと、ジロ君は腰に手をあてて、床に視線を落としながら残念そうに首を振る。「ダメだ……俺わけわかんねーそーゆー人……」その言葉は私にも少し残念だった。「……もうわけわかめだよ」

あ。おいおいホントに言っちゃうのかよ、わけわかめって。これってオチですか？

ボーリング・フォー・リボーン 4

いいえ、オチません。悪しからず。

人生最悪の一日を迎えてもやっぱりその原因となった人物は我が家の居間にいて、畳に寝っ転がりながら頬杖ついてテレビを見てます。お、ジャイアンツ勝ってるねー、ってそんなことはどうでもよくて私が帰って来てるのどうせ気づいてるんでしょ？ なんて何も言ってくれないのかなー？ すごく大変だったんだよ、今日。私はタマちゃんが泣いてる時、自分がいなくなればいいのになと思ったんだよ？ もちあんたのせいで。

でも私の心の呟きは当然彼には聴こえなくて、テレビの小さな音量が余計に私達二人の沈黙を浮き彫りにする。私は黙ってベッドルームに行き、クローゼットを開けて脱いだ服をハンガーに掛けていく。キャミソール、パンツ、タンクトップは洗濯機で、ベルトは千枚通しで一個穴開けなきゃだった。バッグは充電器入ってるから出さないとだし、下着は昨日変えなかったから洗わなくちゃいけない。それから買いたい物も山ほどあった。ブラとパンツは数が減ってるし、Viviで特集してたラガーワンピース、ミニ丈ベストもちよつと気になるし、エクステばろばろ、それから就活用のスーツも、あとワンちゃんにネイルに化粧品にCDにピアサーにコーヒーマーカーに液晶テレビにサングラスに旅行にグローブとサンドバッグ、それから新しい彼氏。

私は泣いていた。自分でもびっくりするぐらい感情の起伏なしに泣いていた。ちょ、なにになんなのこれー！ という感情の起伏すらないほどに自然に、呼吸するのと同じくらい当たり前に涙を流していた。きつと、本当に悲しいからだ。もう私と紋太が分かり合えることも、どこかに仲良く出かけることも一生ない。私達の終わりが本当に近づいてるんだ。分かり合おうとすればするほど二人共傷ついて、自分達が分かり合えないという現実ただ直面するだけ。

お互いの、私達の限界を知ってただ悲しみに暮れるだけなんだ。私はもう涙で顔がぐしょぐしょになっていて、息も出来ないほど苦しかった。涙は流れても苦しくなかったはずなのに、やっぱり後から波のように悲しみが押し寄せてきて、私はその場に力無く座り込んでしまう。彼は一度も私の方を向いてはくれなかった。もうきつと私達の心はバラバラになってる。朝までは確かに存在した二人の空気も、今は互いに押し潰すような圧迫感で窒息しそうになってる。

「ひつ、あぐつ、んっん、はあつ、ひつ、ふえつ、ふわっ、んっん、へぎつ、ふぐつ、うあつ、ひぎつ、はっ」もう私は止まらない。

全部流してしまうんだ。彼への愛も、私達の思い出も、全部涙で流すんだ。そうしたら、きつといつかは立ち直れる。

「俺、明日から仕事探すよ」

……えつ、今なんて言いました？ 私はピタツと泣くのをやめて顔を上げる。鼻水がたらりんと一筋流れて、あまりにも水つぽいから顎まで流れていく。ぐっすん、ぐちゅぐちゅ。彼は彼のまんまだった。正確に言うと、畳に寝転んで頬杖ついてるままだった。

「今なんて言ったの……？」私の声はどこかの空洞を通り抜けた後みたいにか弱い。ビール瓶の口に息をふうーって吹きかけるぐらいか弱い。本当のあたしはすんごくか弱い。誰かに守ってもらわなきゃ立つてもいられない。誰かに守られたい。私は紋太に守られたいの。

「来週もまたどっか行こうなって」

はあって息を飲んで私は胸を抑えこんで、彼の言葉を心に閉じ込める。紋太の声が温かくて優しくてふんわりしてて、私はじんわりと心が満たされるのがわかってまた泣いてしまう。愛してる愛してる愛してる愛してる。もう死ぬ程愛してる。ふえーん、紋太のバカー！ 紋太のこと好き好き大好き超愛してるー！ お願いだからわけわかめも許したげてー！ と思いつながら私は思わず駆け出していて、横になった彼の上に覆いかぶさる。「うおー危ねーって」とか言いながら彼はがっしりとあたしを掴まえていてくれる。そんな君

にはちゅーしてあげよう。くっすん、おめでとう。

ロンドンの夜明け

往々にして覚醒の後、昨晚見た夢を思い出すことは稀だったが、この時ばかりは別だった。夢の中では19世紀のロンドンを思わせる霧が立ち込めていて、いつからそこにいたのかわからない、それどころか素性も知らない妖しげなシルクハットを被った男が自分に声をかけた。

「ムシュー」フランス語だった。「ちょっとお手を拝借しまして、私の足首を握ってくださいませんか」

俺はどうやら夢を見ているのだな、とここでわかった。そんな男が今の時代にいるわけもなく、やはり現在のロンドンにこれほど霧は立ち込めていない。男はハットを驚づかみ少し持ち上げ、私にそれほど気のない挨拶をした。男の頼みはとも自然なもので、あたかも当然のような響きを感じ取れた。まるで私が世間知らずなことをして、それを暗にたしなめるような響きだ。あるいは、と夢の中の私は思う。こいつは嫌な金持ちか何かか？

「いいでしょう」夢の中の私は無然としてそれに答えた。

羽織っていたコートを後ろへ撫でつけ（夢の中の私は普通の身なりとほぼ同等の物だった）、私はしゃがみ込んで言われたとおり男の足首を右手でぐっと握ってやった。うん、と男は低く唸り、私は「いかがか？」と具合を尋ねた。

「もう少し」と男は言う。

私はさらにぐっと力を込め、爪を立てて男のふくらはぎに食い込ませた。男はそれにも微動だにせず、表情も一つとして変えなかった。

きつとまだ夜は明けないだろう、と夢の中の私はそのとき思った。冷たい風が霧の中を縫うように踊り、男の剥き出しの脛や私の手首を冷たく撫でつけた。男が何を言おうと、毅然としておればいいのだ。俺の推測どおり、俺自身が知らぬ間に何かをやらかしたとして、

それがなんだ？　こうして胸を張っていれば、世間からすると男のように傲慢さを臭わせるよりかは幾分見栄えもよく、紳士的なのではないか？

「もう結構」

男は邪険にそう言うのと、手に持っていた杖をトン、とレンガの地面に突き立てた。私はまた慥然として脚から右手を離して立ち上がり、ふくらはぎに残った食い込んだ爪の真っ赤な痕に少しだけ目をやって、それから何も言わずに立ち去ろうとした。男の言動に腹を立てていた私はこのまま立ち去り、男の心に少しでも後味の悪いものを残してやろうと目論んでいた。

「もし」しかし男は言った。「何か礼がしたい」

私は、あるいはこのままだんまりを決め込んでそのまま霧の中に消えてしまおうかとも考えたが、底の方に僅かばかり残った良心がそれを引き止め、そしていうなれば男が実はそれほど悪い人間ではないのかもしれないという期待を持ち、瞬間の葛藤を乗り越えて男に振り返った。だが男の表情から何かを読み取ることは不可能に思えた。ああ、やはり、と夢の中の私は思う。この男は機械のように冷徹な男なのだ。そう証明された所で私は、男が良き人間だとはもはや信じられず、かといって一度振り返っておいてまただんまり立ち去るというのも妙なので、仕方なく私は「何か用があるのか」と男に言った。

「私の家に案内をする」

男は私の返答を待つこともせず振り返り、かつかつと革靴を鳴らして霧の中へと進んだ。私が「もし」と呼んでも返事はせず、私は売春婦達のようにレンガへ唾を吐き、好奇心など一片として無かったのにも関わらず、男の背を追った。

俺はどうしちまったんだ、まったく。私の夢は半分が私の物であり、もう半分は運命に委ねられているように、この時の私には思えた。あるいは夢でなく現実のものなのだろうかと訝ったが、やはりそれはない。広場を歩いているというのに移民のケバブ屋も閉まっ

ているし、酒場は眠り呆けている。立ち並ぶアパートの明かりは一つとして灯っていないかった。

男の歩く速さは私のそれとあまり変わりなかった。男がどうやら歳を取っているらしいぞ、と私はここにきて気づく。男のハットから覗く白い髪や、先ほど言った男の声が何度も頭の中を巡る内、私にはそれがわかった。

それにしても、と夢の中の私は思う。一体どこに向かっているのだろうか？ 噴水広場を越えた辺りから1000フィートも歩いただろうが、私の心は突然不安に駆られた。なおも男ののっそりとした、しかし品格を漂わせた足取りは変わらない。ぴんと背筋を張り、杖を奴隷か何かのようにして男は悠々と歩いている。「どこに行かれる」と私は言うが、我ながらに弱々しい声で、男の風格に氣おされているのが簡単に解り、それは霧の中へと吸い込まれていった。男はまるで、後ろに私の存在など感じていないようにすら見えた。何か嫌な予感がする。トラブルの臭いがついには男の背中から漂い始めたのを感じ、私はこのままではまずいとようやく悟った。しかし今さら、何も事を終えずに男と別れることは無理だ、と私の中の経験が告げた。

なればこそ、なればこそと夢の中の私は思い、決心する。10フィートほど離れていた男との距離を縮め、私は男の背を殴りつけた。さらに男に効果的な痛みを与えるためによろけた体へ肘を打ち、レンガへ男が堕ちる様を見て最後に蹴りを見舞った。もう男の顔は見えなかった。まるで初めからそうなることが決まっていたかのように男は地面に突っ伏し、無様な敗北をそのままに、ハットが男の頭からずり落ちて白髪が覗く。夢の中の私は息を切らすことがなかった。適度な興奮を感じ、それに酔いしれ、尚且つ勝利の栄光を勝ち取ったかのように微笑を浮かべていた。男が動かないのいいことにして、私はレンガに落ちたシルクのハットを拾い、自らの頭に被った。もう男が立ち上がることはあるまい、とその時の私には何故

か判っており、まるで決定付けられたことであるようにすら思われた。

それから見たものはロンドンの夜明けであつた。地平線の彼方から、まるで巨大な手の平が風景を摘んで引き剥がしていくかのよう
に光の帯が昇ってくる。暫くそれを眺め続けていたが私は思い立ち、
男の杖も奪うことにした。男のそれは艶のある黒檀仕上げの杖であつた。私は突つ伏したままの男に向かいハットを鷲づかみに少し持ち上げ「それでは、ムシュー」と挨拶をし、それから杖でレンガを鳴らして霧の中へと歩み出した。

「誰か、嫌いな人でもいるの？」

それほど静かでもない、というよりざわついたいつもの授業風景なのに、私の声はいやに自分の耳に響いた。玉木さんと私だけ教室の中にぽっかりと別の空間を作り上げたみたいだ、まるで公衆電話のボックスみたいに。私の声は彼女の耳にだってはつきりと届いたはずなのに、彼女は何の反応も見せなかった。今度は私から声をかけられても動揺しない心構えでいる。一度驚かされたらもう驚かないってか？

「ねえ、玉木さん」

どうやら徹底的に私を無視しようとしてる彼女に、私は徹底的に話しかけてやろうと思う。おせっかいやら好奇心ではない。ここで引き下がったら負けなのだ。そのせいで玉木さんが心苦しくなろうと、彼女の心の中で私のウザ度がちょびつと増そうと、私は全然かまわない。だって玉木さんと私がこれからもつと親密になることは考えにくい。これは私にとってユーモアに富んだ冒険たんになるはずなのだ。後で力ナちゃんや涼子に報告して笑いのネタにするつもりなのだ。だから私は容赦なく踏み込める。これが後に笑いのタネになるのなら少々の犠牲は厭わない。

あたしはそういう女なのだ。えっへん！

「精神衛生に良くないよ、殺すとか」

私が言うと、振り向いたのは隣の席にいる高田だった。あー！と言いたげに口を開き、なんでそいつに話しかけてんだよー！みたいな目で私を見る。私は玉木さんがまだ俯いているのを確認してから高田に小さく首を振る。バカヤロー、今はうちらにかまうんじやねえ、ぶっ殺すぞ。と目線を送って、断念した高田にほっとする。この子はマンツーマンじゃなきゃ人に何かを打ち明けたりする子じゃない、……と思う。

でも結局彼女は授業が終わるまで私に何も言っはくれなかった。それどころか起立、礼で授業が終わると彼女はいきなりすっと立ち上がって（この時あたしはマジで殴られると思った）すすい教室

から出て行ってしまった。作戦失敗。笑いのネタになるどころか、このままじゃただの気まずい話だ。玉木さんがあたしに対して感じたウザ度はよっぽどのものだったかもしれない、と私はここで思い直す。ちょいやり過ぎたか。人間誰しもつつこまれたくない部分はあるもんなあゝと私は私らしくなく反省。人を傷つけたと思うと罪悪感も感じたりする。どうしよう、謝つといた方がいいかな、一応そう、あたしだって少しは道徳的な人間だったりするのだ。えっへん！

とんでも学校クライシス 2

授業が終わった途端に歩み寄ってくる、実は最近ウザかったりする同じクラスの明海ちゃんに「ちよつとごめんね」と言つて教室を飛び出し、私は、どこだどこだ？ と玉木さんの姿を探す。あ、いた。あの暗いオーラを纏った後ろ姿。玉木さんと呼ぶのは周囲の目もあつて気が引けるので、私は早足で廊下の角に消える彼女の姿を追った。廊下を曲がると、早歩きで追ったにも関わらず、彼女は次の曲がり角まですでに歩いていていた。廊下に並んだ幾つもの窓から陽の光が差し込んでいて、休み時間で皆それとなく和やかなのに、彼女だけは別の世界の人間みたいに黙つてひたすらに歩いている。なんと驚いたことに、彼女の歩く早さは尋常でなく早かつたのだ。それとも私の気配を感じたのだろうか？

そんなことがぐるぐると頭の中を回っている間も、私は彼女を追いつけていた。気づくと小走りになっている私。職員室を通り過ぎ、階段を上がり、1年生の廊下を歩く。いい加減歩きすぎている。ここで私は思う。

一体彼女はどこに向かつて歩いているのだろうか？

玉木さんの考えていることなんて私はおろか教室中の誰もがわからない、と思うのは私だけではないはずだ。クラスに玉木さんの友達は何人としていないし、誰かと話しているのも見たことがないあれ？ でも休み時間は教室で何をやってるのだろうか？ 注意を向けてないからわからない。と前の席の私が思っているくらい存在感のない人だ。でも別に害のあるような人ではないので、皆はそれとなく彼女の存在をスルーしている。しかし私は見てしまった。彼女が自分のノートに殺すという文字を羅列させる姿を。ここまで来ると、もういつそのことその謎を解いてやろうと思ひ始める。始めはただちよつかいを出して笑いのネタを提供してもらおうと思つていた私も、今では彼女の不思議に歪んでいるであろつ心の内を覗き見

たくなっている。

彼女が最後に曲がったのは1年生と2年生の教室を繋ぐ間にある、ちよつと荒んだ雰囲気を持つ小ぢんまりした通路で、その通路の先は行き止まりになっている。私はほつとした。まず私に追われているということに気づいていないこと、それから通路の先にあるのは図書室だつてこと。玉木さんの行動にだつてちゃんと根拠はあるのだ。夢遊病の患者みたいに枕を脇に挟んで鼻ちようちんを作りながら夜道をあてもなく彷徨ったりはしない。

彼女が図書室に入ると、学校の廊下はいつもの活気を取り戻したみたいに見える。もはや彼女を追う私ですら、彼女の独特の空間に入り込んでいたらしく、彼女が視界から消え去ると、いきなり夢から覚めたような気持ちになった。いかんいかん、これからよ、と私は思う。だつてこれからもつと彼女の空間に踏み込むんだから。

玉木さんによつてきちんと閉められたのであろう図書室の入り口で立ち止まり、私は肩で一つ大きな深呼吸をする。ドアの『図書室は静かに利用してください』という張り紙を一瞥して戸を引き、私はなんでもない顔を作つてすたすたと図書室の中を進む。少し緊張している私は周りの景色を上手く捉えることが出来ないでいるけど、少なくとも視界の中に玉木さんの姿は無かった。図書室の窓は全て深緑色のシックなカーテンで閉めきられていて、蛍光灯の明かりが私に一番近い位置にいる長椅子に座つた暗そうな男子の髪に反射している。どことなく玉木さんと同じような雰囲気をもつ彼は、調べ物でもしているみたいに片手で厚い本を開き、小さな用紙にメモを取っている。図書室の中のまばらな人間は、誰も私に目を配らなかつた。こんなにかわいい子が入ってきたのにウインクの一つもないなんて！なんてバカなこととは思わず、私はひとまずほつとする。音が立たないよう気をつけて入ってきたのだ、順調順調。しかもウインクつて。古っ。

もちろん図書室の入り口に立つてきよきよしているわけにも
いかないので、私はスカートを翻して暗そうな男子のいる手前から
本棚の列に移動し始める。背の高い本棚は図書室の右と左で3列ず
つ分けられていて、私がいるのは左側の入り口から一番近い、作者
順でアゝケ行までが並ぶ本棚。芥川龍之介、江戸川乱歩、川端康成、
……それから誰かに適当に返されたらしきヘミング・ウェイの「老
人と海」。本を読んだらちゃんと元の場所に戻しましょう。えーと、
えーと、なんて白々しい演技をしながら本を探すふりをして、私は
図書室の至るところに目を配る。まだ彼女の姿は見当たらない。も
しかしてあれは私の幻覚だったのか？　なんて思うが、それは正に
それこそがいつもの冗談を言う私が勝手に作り出した妄想なので却
下する。入ったのは間違いないのだ。もしかしたら私の気配に実は
気づいていて、図書室に入ってから密かに抜け出したんだろうか。
カーテンの閉めきつた窓から身を乗り出して？　こんなもの静かで
おとなしい人間達を前に？　玉木さんがそんな行動に出るとはあま
りにも考えにくい。

おいおい、じゃあもしかして彼女はルパンの子孫だったのか？
私の中の阿呆な私がそう考えたときだった。調べ物をしていたさ
っきの暗そうな男子に、一人の女の子が話しかけていた。スカート
から白いおみ足を覗かせ、その子は男子に向かって楽しげに笑う。
私は仰天した。というかそれすら通り越して、ぽかんと口を開けた
まま二人の様子を窺うでもなくただぼんやりと眺めていた。玉木あ
かねは暗そうな男子に向かって話しかけ、時おり心地良さそうな笑
みを浮かべている。

手に半分掴みかけていた本がするりと指の間を抜け落ちていった
瞬間、私はハッと我にかえった。しかし慌てて落ちた本をキャッチ
しようとするも、小指の先がちよびつと当たっただけで、むしろそ
のせいで床に落ちる勢いが増して、本はバン！　と大きな物音を静
かな図書室の中に響かせた。ふざけんな分厚い本。重力ってこえー。

なんだよ、ダイバーのための海水魚図鑑って。まず高校生はダイビングになんて全然行かないし。しかも4500円って高！ そんな意味もない状況判断が私の意識も追いつかない内に頭の中を駆け巡って、もつと重要な図書室に置かれた私についての状況判断を遅らせるばかりか、もうどうでもいいや的思考にすら落ち着かせる。ああ、本を読んだらちゃんと元の場所に戻しましょう……。

私は平静を装って、屈んで本を手に取り、埃を払った。でも全然そんな行為は嘘っぱちで、心臓はバクバク、息は震えるわ肩は震えるわで、背筋には寒気すら走っていた。耳に焼けた針を刺されたみたいなの沈黙の中で、同時に私の心臓の鼓動が、まるで体の内側から誰かにドスドス殴られているように響く。首が機械みたいに不自然に働いて、私の胴体にちゃんと落ち着かない。落ち着け、あたしの色んなところ！ しかし私が死ぬ程気になるのは二人の反応だった。そーっと薄気味悪く目の玉を移動させ、気づかれていますように、と心の中で何度も願いながら二人の様子を窺う。

彼女の、玉木さんの目は確実に私を捉えていた。瞬間、私は絶望し、そして恐れた。彼女は今度こそ私に敵意を丸出しにしていた。黒い前髪の隙間から覗く彼女の冷たい瞳。10秒前までのあの明るい玉木さんはどこにいったしまったんだろう、と私は思う。私はその場の雰囲気をごまかすみたいに咳払いを一つして、図鑑を本棚に戻し、玉木あかねのいる長椅子の前に歩いていった。どういうわけか足がすいすいとまるで彼女に引き寄せられるみたいに進んでいく。私の本能は察知していた。ここで自分から話しかけなきゃダメなのよ、と。ここで沈黙を打破しなければ私は負けたことになるし、これからもし負い目を引きずっていくことになる。なぜかはわからないが、それには確信めいたものがあつたのだ。

私が歩み寄る間も玉木さんは顔色一つ変えずに私を見ていて、やっぱり冷めた目つきで睨んでいた。それは彼女と私を結ぶ一本道で、逃げ場はどこにもなかった。私がすたすたと歩み寄る音を聞いて、玉木さんの傍に座る暗そうな男子が本から目を離して、何かと顔

を上げる。私の足音が止まり、長椅子の前に立つて私は玉木さんと睨みあいなし、見つめ合う。え？ なんなの、この人？ みたいな目で男子は私を見る。でも彼ですら私と玉木さんとの間にある尋常でない雰囲気だけは飲み込んでいるみたいだった。あたしだってこんなわけわかんない。たかが後ろの席のくらい女の子が自分のノートに自分の書きたいことを書いていただけだ。その何が問題なんだろう。愛してる、って書くのとまあ大して変わりはないんじゃないか？ 精神衛生がどうか、バカみたい。なのにあたしは自分の面子やちっけなプライドのためだけにここまで追ってきてああ、やっぱりそうだ、悪いのは完全にあたし。

「ごめん、謝りたくてさ。ノートを覗いたこと」

切なげに微笑むことの出来た自分にちよつとだけ救われた気がした。普段は阿呆なことばかり言ってるくせにプライドの高い私みたいな女にこんな顔はなかなか出来ないと思う。本当に悪いと思うたからきつと出来たわけで。私はそれだけ言うと振り返って図書室の出口を目指し、彼女の返答は求めなかった。というより、あまりにもいい顔が出来たんで私的にはもう満足だった。罪悪感っていうのはいかに他人を納得させられるのかじゃなく、時に自分を納得させた時点で薄れ始めるものだと思う。これ以上はいいのだ、もう。もしあれだけの顔をして彼女が私を許さないようなら、今度は私がムカツときてしまう。それはどうあっても抑えられないものだし、そう感じてしまった時点で私は自己嫌悪を感じるし、私を許せなかった彼女にも幻滅してしまうであろう。そしてそんな理不尽なことであまり世間では認められない。だからこの時点で図書室を去るのが一番のタイミングなんだ。

つまりそうしてあたしは一番心のリスクが少ない方法を選びましたとさ、ちゃんちゃん。

とんでも学校クライシス 3

教室の前の廊下を歩いていると、「モモちゃん」と叫ぶ声は明海ちゃんだった。彼女は私のところまで走ってきて、それほど走ってもいけないのにわざとはあはあ息をつきながら、うるうるした媚びるような上目づかいで私を見る。

「今日モモちゃん達とゴハン食べてもいい？」　ずっと探してたんだけどモモちゃん帰ってこないから心配したよ」

「え……　ってかもう涼子とかあたし放つといて先に食べてるよ、多分」

それを聞くと彼女は一瞬驚き、驚いたにも関わらずごまかすような笑みを浮かべて、私の腕を取った。

「いいのいいの、今からでもいいから一緒に食べよ、ねっ」

ねっ？　ねっ？　を連発する明海ちゃんを断れない私は腕を引かれるままに教室の中に引きずり込まれる。私よりずっと背の低い彼女に引かれると思わずこっちはこけそうになるっていうのに、能天気ではつきり言っただけ彼女はそのことにすら気づいていないみたいに、自分の席を引いて私を座らせる。こういうところには気を使うのだ。抜け目のない子であり、ちょっと人間の裏側を覗ける能力を持った大人な人間にとってはあざとい子。

明海ちゃんは傍から机を一つ持ってきて私の座ってる明海ちゃん本人の机とくつつける。しかも向かい合って。あたしはもう高校生だっつーの！　と言いたいのをぐっところえ、お約束どおり明海ちゃんが私のカバンを勝手に開けて持ってきた私のお弁当を明海ちゃんの机の上で開ける。

どうなの？　これって。

「見て見て、今日自分で作ったの。ミートボールあるんだけどいる？」　あっ、モモちゃんのお弁当箱かわいー萌え萌えー」

最近の明海ちゃんは萌え萌えー、がお気に入りだとき。けど明海

ちゃんのお弁当箱ははつきり言っただけの年季の入ったキティーちゃんのお弁当箱よりは全然かわいらしい。明海ちゃんの弁当箱の柔らかなピンク色に大して、私のキティーちゃんは一番擦れる顔の中心部がほとんど剥がれてしまっているだけでなく、もう全体的に廃品物のオーラが漂っている。でもこの子にはわからないのだ。過剰なお世辞が時に皮肉として解釈されることを。

それから始まったのは、彼女の周りで起こった様々な出来事をしなくても彼女の意見まで含めて克明かつ大胆を旨として私に延々と伝える話。彼女の会話は一方的すぎて、私は相づちを打つ暇もない。

「でね、もうマジできんもゝとか思っただけ。しかもそいつあたしのこと追いかけてくんのゝ！ 髪が超長くて絶対オタでさゝ、もうあたしモモちゃん助けてゝ！ とか思っただけもゝん。あつ、あと土曜日に美容師の人と遊んだって言ったじゃん？ その人なんだけど――」

大体の話は明海ちゃんのそれとない自慢話か、誰かをけなすような話。あたしあの子と仲良けれどホントは嫌いなんだゝ、とか、この前遊んだ人の家に行っただけゝゝしやっただけゝゝ、とか。一体この子は何がしたいんだろう、と私は思う。秘密を共有することで私とのパイプを繋げたいのだろうか。そんなどす黒い友情関係やらなんやらを聞かされて私がいい気分にいる思っただけだろうか。あたしが明海ちゃんのことをもっと大事にしようと思うと目論んでるんだろうか。

……やっぱりこの子も玉木さんと同じくらい謎。もつとも全然タipesは違っただけ。

ようやく明海ちゃんから解放されたのは5時間目開始のチャイムが鳴ってからだった。これほどまでにチャイムがあたしを救ってくれたことはないんじゃないか？ 明海ちゃんは、「嫌だゝモモちゃんと離れたくないゝ」とマジなんだかふざけてるんだかわからないぐらいの勢いで、私の制服を引っ張りながら言う。私は私で「はい、戻って戻って」とか笑顔で言っただけ、咄嗟すぎてわけのわからん

ないお姉さんキャラになってるし！ なんなんじゃあーこりゃー！
と本当は叫びたいけど色んな事情が世の中の人にあって世の中の人がみんな結局はまともな行動をとるように、私も自分の席に戻って授業を聞くとともにしにシャーペンを指の間でくると回している。後ろの席には私が席につくより前に玉木さんが座っていた。一体いつ教室に戻ってきたんだろう、と思うけど、きつとあたしが明海ちゃんの世間話に手一杯になっているときにするりと私の視界をかいくぐったんだと思う。なんといっても彼女には先天的に備わった人目につきにくいという能力があるのだから。私は耳を澄ましてみるけれど、もう彼女のシュー、シュー、という鼻息は聞こえてこない。一体本当にあれはなんだったんだ？ 図書室で会った彼女はまるで別人だった。それとも向こうの玉木さんが本物の玉木さんで今は仮面を被っているだけなのか？ 人とのコミュニケーションを上手くとれない子が社会から疎外され、やがては自ら集団を拒絶するように？ もう私は何もわからない。どうしてそんな行動に出るのかもまるでわからないのだ。ノート一杯に殺すと書いていた後ろの玉木さんはあの時どんなことを考えて鼻息をシュー、シュー、とさせていたんだろう。妄想の中で誰かをいたぶり、腕を切り落として脚を切り落として脳みそを棒でぐちゃぐちゃかき回すぐらいのことはやっていたんじゃないかと私は思う。私にだって誰かを心から殺してやりたいと思ったことぐらいはある。あたしは世間知らずのバカな女の子じゃない。あのシャーペンの芯で胸の中心をぐりぐりえぐられていくような心の痛みは忘れたくても忘れられない。
やっぱり玉木さんも誰かに苛められてるんだ、と私は思う。だってやっぱり、ノート一杯に殺すなんて書くこと、誰かを憎んでいないきやできないもん。

スケープゴート 1

石田はあの奥行きのない瞳で高見美穂を見つめていた。いや、見つめるなんてものじゃない。それはもはや立派なストーキングだった。それにあの石田の目、と僕は思う。石田の目は冷え切っているのにどこかおぞましく、常に静かな狂気といったものを宿している。今もそう、見つめる先に何かしら巨大な思惑でもあるみたいに僕からは見える。その演出に一役買っているのは彼の前髪の長さで、その間から覗く目の玉がまた恐い。漆黒の底から覗く白目が恐い。恐い恐い恐い。僕だってあんな目に四六時中監視されていたくはないと思う。

だがしかし、僕は彼を監視し続けている。彼の考えていることを、彼の心の内を少しでも把握したいと願っている。でもやっぱりそう思うのはどうやら僕だけらしくて、現に高見美穂は恐怖に震え上がっている。

視線に気づいたらしきグループの一人が標的となっている彼女の耳元に口を寄せ、囁く。

見てるよ、あいつ。

言ったかどうかは知らないが、高見美穂はからくり人形よろしく、恐怖のあまり震えているのか首をぎこちなくねじった。瞬間、二人の視線が宿命的な様を帯びて繋がる。しかし石田に向けられた高見美穂の視線は、恐れでも訝しさでももちろん愛しさでもなくて、それこそ圧倒的な怒りに見えた。そりゃ怒りになってしまっただろう、と僕も思う。監視されるなんて誰も好かないし、そもそも自分がぶった相手にしつこくそんなことをされては気味が悪い。

そして石田はいえ、顔色を変えず、何も言わないまま、幽霊が消えるようにして教室に入っていく。

「やばいっしょあいつー。そのうちレイプとかすんじゃないの？」と僕の隣に立った正樹が言う。正樹の顔は呆れきっているし、声に

は微かに怒りも含まれている。

「しないしない。そんな勇気ないよ、石田には」と僕は呆れた風を装って言う。

「俺さあ、もう一発びしつと言った方がいいと思うんだよね、マジな話。じゃないと絶対これからエスカレートするよ、あいつ」

「まあいいじゃん。そのうちやめるって」

そんなはずはない。たぶん石田の高見美穂校内ストーキングは、高見美穂と石田が学校に通い続ける限り続くだろう。ひよっとするとその後だってまだ延々続くかもしれない。それをわかりきった上で僕は石田を擁護する。それは別に傷心した彼をいたわってやるのかそんなことでは全然なくて、やっぱり僕の好奇心から芽生えたものだ。

ミホチンこと高見美穂はそれなりにかわいくて（ちよつとチークが濃すぎる気もするけど）、学年の清潔な界限に入る女子だった。石田が彼女に告白したのは去年の暮れで、その噂はたちまち学校全体に広がった。少なくとも、同じ学年で知らない生徒はいないと思う。なぜそこまで広がったかという点、それは彼の――石田の一風変わった風貌からだった。石田には入学以来一人も友達がいなかった。発言回数はそれこそ数えるほどで、高校生活が始まって3ヶ月も経つのに未だ、思いつきり謎の人物だった。初めのころこそ積極的に話しかける生徒もいたけれど、時間が経ってグループが出来る上だと共に彼は完全に孤立していった。孤立することが具体的にどういった心的ストレスを生むのか僕にはわからない。僕は割かし、そういった環境に恵まれていると言ってもいい。でも想像するからに、それは果てしなく虚しい、寂しいものなんだろうと僕は思う。無人島で一人になることよりも辛いことなのかもしれない。一人だけクラスの輪に馴染めないなんて嫌だ。親戚一同が会って集まったおばあちゃんの何回忌かなんかでも、僕はそんな風だった。ひどく退屈で、気が滅入った覚えがある。

しかし彼はそう言った面をあまり見せなかった。少なくとも、僕が高見美穂を監視する彼を監視している間では一度も憂鬱な表情を見せたことはない。あるいは、彼は強い人間なのかもしれない。でもやっぱり僕を含め生徒達がひしひしと感じてしまうのは、彼の持つそこはかとなく不穏な空気、冷静さの裏側にある陰謀の影だった。もしかすると、そんなものは彼の中に存在しないのかもしれない。けれど、みんな得体の知れないものは初め、とりあえず恐れておくものだ。

そして時間が経ち、石田の漂わせる空気にもみんなとりわけ違和感を感じなくなっていた。たぶん、みんな慣れてしまったのだ。実際何も起こっていないわけだし、そんなことを考えていても仕方ない、と。僕も同じだった。石田は打ち捨てられた銅像や、廃墟の中の忘れられた運河も同じだった。その頃の彼には、「あいつはあれでいいんだよ」とか「何か抱え込んでると思われないんだよ」という言葉がぴたりとくる。それが実際そうであつたかどうかはわからないが、彼はやっぱり無言無表情のまま、周囲もそう考えるしかなかったんだと僕は思う。ごちゃごちゃとわからないことに考察を続けるよりかは、いつそこじつけてしまった方が僕ら周りとしては楽なのだ。それがいささか乱暴な見解だったとしても。

しかしそんな石田が突然ミホチンに愛の告白をしたことで事態は急展開を迎える。簡潔に言ってももちろん高見美穂の答えはノーだったわけなのだけれども、学校は水面下で騒然とした。封印したはずの壺が開かれたみたいに、生徒の話題はもっぱら石田のことになり、生徒達の石田を見る目もまた変わった。どちらかと言えば、それは漠然と恐れから蔑みに変わったのだと思われる。みんなはようやくして、彼という人物に一つ納得する要素を理屈づけることに成功したのだ。よって、石田を巡る石田の考察についてはこれで終幕を迎えるものと思われた。みんなが納得し、蘇るかと思われた不穏の末に平穏を獲得し、校内の均衡がまた元の状態に戻り、全ては石田が

一人傷ついて終わるものだと思われた。

だが石田は高見美穂に付きまとった。いや、その言い方は正しくないかもしれない。正確には付きまとっていないし、ただ見ているだけだ。ただ影から見つめ、影から見つめ、影から見つめる。一体どういった心境で石田がその行為を続けているのかは誰にも少しもわからなかったけど、それが普通でない、陰鬱で歪んだ恋であることにどうやら間違いなかった。果てしないほど不気味なその行為は、健全な高校一年生達の心に強烈な苛みを与え、まるで胸にぐりぐりと拳をねじ込まれたような不快感をもたらした。

そして石田は一斉に生徒の非難を浴びることとなる——というのが現状である。なにせ恐れはもう取り払われてしまったのだ。まだ誰も何も本人には言わないけれど、憎しみは黒い渦を巻いて存在する。なめられちゃいけません。なめられたらお終いなのだ。だから石田は高見美穂なんかに告白するべきじゃなかった。

けどふられた拳句に高見美穂に付きまとう石田を見て僕の苛みの中に予想だにせず生まれたのは、翻ってある種の尊敬だった。

すげえじゃん、石田。お前すげえよ。

僕は心の中で密かにこう思っていたのだ。なぜなら普通そんなことはできないから。そんなことで延々傷つき続けるぐらいなら、適当な誰かに乗り換えた方がまだと僕なら思ってしまうから。だけど石田はとりあえず凄い奴なのだ。ある意味で恐れを知らない。

スケープゴート 2

そんな石田の重たい何かにずどんとやられた僕はもう彼にぞっこんだった。石田の考えていることが知りたくて知りたくてたまらなかった。人はある一定の影響力を超えた人物を目の前にすると、それを恐れたり崇めたりすることは出来るけど、絶対に無視することはできない。となると僕は崇める方？　そこまではわからないが、強く惹かれていることは確かだった。

僕はそんな石田を一ヶ月近く観察してきた。最近では石田が何を考えているのか気になって気になって、夢にまで彼が登場するほどだった。夢の中での彼は傍若無人で、狂人みたいな振る舞いで怯える生徒達に脅しの言葉を吐きかけ、嫌がる高見美穂をレイプしまくっていた。そして僕はそのお付き役。それはもしかすると僕の願いであるかもしれない。僕は石田に憧れすら抱いていたかもしれない。僕にとつての石田は未知なる領域だった。僕の知らない世界に住む住人みたいに見えたのだった。踏み出したらもう元には戻れないかもしれないと思わせるほどの彼の違和感は、僕にぎりぎりのスリルを与えてくれていた。ミホチンを無言で観察し続ける石田を無言で観察し続けるうち、僕は自分が興奮していることに気づいてしまったのだ。

そしてある時、それは訪れた。石田と僕の宿命とも言える接触。

昼休みになってお弁当を食べて正樹と教室に戻ると、石田はいた。廊下の壁に肩をほんの少し預けて、ずっと両腕を下ろし、ほとんど直立不動で階段の手前にいる女子生徒達を見据えている。もちろん石田の目が捕らえているのは高見美穂だった。今はまだ石田の異様な視線に気づいていないらしく、高見美穂を含む女子生徒らは華やかで楽しげだった。僕にはそれが現実ともう一つの世界との境界線

みたいに見えた。存在はしているが、普段は見えない世界。僕は石田を通してその世界をほんの少しだけ垣間見ているのだ。

この頃にはもう石田のエピソードは一人歩きを始め、手のつけられないありさまだった。ミホチンが一人になる隙を窺って帰宅時モ後をつけている、といったものに始まり、果ては高見美穂が下着を一枚失くしたという話から飛び火して、石田が盗んだんじゃないかという疑いにまで発展した。だからなめられちゃあお終いなんだって、とこの時僕は思った。ある場合において恐怖とは諸刃の剣なのだ。一度恐れが解消されてしまえば、トランプの城みたいに権威はくずれ、全く反対の立場にまで追いやられる。なめられたら何をされても文句は言えないし、また何かあれば疑いがかかるのだ。

僕が階段でふと止まったことから正樹が感づき、目を細めて廊下の奥を見つめる。

「あつ、またやってんのかよ、あいつ。もうマジでいい加減にしろよ」

正樹が呟いて階段を下り、見られてるよ、と女子達に告げる。バカ、そんなことすんなよ、バカバカバカ、と僕は思ったのだが、正樹を止めるわけにも行かなかった。止めてしまったら、今度陰で非難を浴び、足元を見られるのは僕自身かもしれない。少なくとも疑いはかかる。そして女子に何かを言われた正樹が何を勢いづいたのか知らないが、石田の方に向かってずんずんと歩き出した。その時の正樹の後ろ姿は、確実にトラブルをまとっていた。僕は叫び出したいくらいだった。正樹の馬鹿野郎。僕は急いで後を追って、階段を駆け下りた。これ以上はまずい、いくら何でもまずい、と脚がまず初めに動いたのだった。そして正樹は石田の前に立ち、その正義に満ち溢れた目で言った。

「お前さあ、もういい加減にやめろよ。みんな嫌がつてんだよ」

正樹が今にも石田の襟首を掴まんばかりだったので、僕は咄嗟に彼の両腕をがしりと抑えつけ、まあまああ、と言いながら話に割って入った。

「そんなつかかったってどうしようもないじゃん。石田だつて

しかし正樹は興奮していて、僕の両腕を乱暴に振り払ったかと思うと石田に詰め寄り、Ｙシャツの襟首を掴んで壁にどんと押し付けた。

「お前何か言えよ。いつも黙ってんじゃねーよ、気味わりいんだよ」

その瞬間、空気が一転するのがわかった。体格のいい正樹に胸ぐらを掴まれた石田はマツチ棒みたいに細く見えた。正樹が凄い力で壁に押し付けるから、石田の踵が少し浮いている。ついに冷戦に耐えられなくなる者が現れたのだった。しかし同時に、僕の中の暴力的で荒々しい血が沸騰するのがわかる。それは共鳴だったのかもしれない。とりあえず僕はもう自分を抑えてはいられなかった。

僕は言う。「お前が落ち着けよ、正樹。なに正義の味方ぶつてんだよ馬鹿。石田は暴力振ったりしてねーだろうがよ」

僕の剣幕を無視して正樹はなおも石田を壁に押しつけようとするが、僕はそれを許すわけにはいかない。正樹の腕を石田の襟首から引き剥がし、同時に石田のＹシャツからオフホワイトのボタンが飛ぶ。すでに何人かがこの小規模な争いを色んなところから見守っている。見守ってる？ いや、違う。こいつらは石田がぼこぼこにのされてしまえばいいと思っっているのだ。これまでの僕と同じ、日和見主義のうんこ野郎。僕もやはり願っていたのだ。石田を見るたびに何かを起こしてくれと。きっとだから僕はあんな夢を見たんだろう。一番醜いのは誰よりも野次馬だ。醜く、そして性質が悪い。その証拠にほら、誰も動かない。

「正樹！ マジでやめろつて！」と僕は完全に石田から正樹を引き剥がす。

「だってこいつ……」

僕の両腕に羽交い絞めにされながら、その一瞬見えた正樹の怒りのかげりを察して、ここぞとばかりに僕は廊下の床に正樹を突き飛

ばした。僕は自分でも自分が何をやっているのかよくわからなかった。正樹を硬い力で突き飛ばした瞬間、頭におがくずを散りばめたような混沌に僕は陥っていた。正樹はわけがわからないといった当惑した顔で両手を床につき、僕を見上げる。

そして注目を浴びることに慣れていない僕は言う。その声は自分が想像していた声のちょうど倍ぐらいの大きさの怒鳴り声だった。

「だってじゃねーんだよ！ てめえ普段はスジがどうか言ってるくせにこういうことすんなよ！」

怒声がすうつと廊下の奥に消えていき、途端にぞくつと寒気が走った。廊下は舵を下ろした船のように静まり返っていた。みんなによつてたかつて殴られるような気がした。まるで肺が死んでしまつたみたいにくまく空気を吸い込めなかった。

でも当然そんなことは起きなかった。辺りはそれこそリモコンで一時停止したみたいにしんとしていた。正樹が顔を伏せ、左手を廊下の床について目の辺りを拭い、僕にはそれが泣いているのだとわかる。別に悲しいわけじゃないんだろうけど、色んなことが一気に起きすぎて泣いちゃってるのだ、きつと。人は心が飽和しきると、混乱の果てに大抵が泣いてしまう。正樹は心配ないので、僕は石田のYシャツのボタンを拾って彼に渡し、一声かけた。

「気にしないで。別にあいつも本気で怒ってたわけじゃなくてさ、たぶんちよつと勢いづいちゃったところがあつたんだよ、ごめんね」

「……もう見るのやめて」

「えっ？」と僕は訊き返した。

「もう見ないで」

石田はそう言つてボタンを受け取り、それをYシャツのポケットに納めると、黙つて僕に背を向けた。

僕には石田の言っていることが何なのかわからなかった。そんなわけのわからないことを一言いうよりも、もっと別の言葉があるんじゃないの？ と僕は思った。しかし、すぐにさつと血の気が引いて、石田の言つたことの意味を理解した。石田は僕が高見美穂を見

ている石田を観察し続けていることを知っていたのだ。それからもう一つ、石田と正樹のいざこざの最中も、石田が見ていたのはずつとこの僕だった。僕は途端に恐ろしくなった。恐怖のいざなう収拾のつかない混乱の中に僕は置き去りにされ、石田への好奇心なんて一瞬でどうでもよくなつた。僕はとんでもないところに足を踏み入れようとしていたのだ。僕はそのことによく気づいた。そして、もう踏み込んでいるのかもしれないということにも。

だが次に僕の言った言葉は僕の考えていることとは限りなくかけ離れたものだった。

「石田、今日一緒に帰ろう」僕の声はひどく若い、未成熟な声だった。幼稚で、抑揚がなく、まるで紙に書いた白痴な文脈を読み上げたみたいな響きだった。

石田は振り向き、僕を見た。その目は少なくとも驚いているようには見えなかった。石田の目は全くのがらんだつたのだ。そこに感情は介在していなかった。僕がその時石田の目を見てイメージしたのは、骨となった動物の死骸や、建設途中のまま放置されたマシンの鉄筋コンクリートだった。その瞳に見据えられると、僕は自分がからっぽに思えた。今まで密かに積み上げてきた僕の後悔や自責の念が白日の下にさらけだされたような居心地の悪さを感じさせた。物怖じしないその目は他人を全く信用しないという意志の現われであり、同時にひねくれた人間のする目だった。僕は自分が大人になつて結婚して嫁さんが子供を産んでも、息子や娘がこんな目で自分を見ることだけはやめて欲しいと思つた。

そしてそんな一瞬の間に詰め込まれた寂寥感に反発するように僕は石田に言つた。

「歸りに裏門で待つてるから」

スケープゴート 3

事件のあと、正樹は僕に謝罪した。

「……あそこまでするつもりはなかったんだけどさ、ホントゴメン、わりい、お前に迷惑かけた」

「まあいいつしょ。しょうがねえって。誰でもそういうことあるし。俺も突き飛ばしてホントゴメン」

と僕は正樹を慰めて自分の過ちについて謝ったのだがしかし、頭の中では全く別のことを考えていた。

果たして石田は放課後、裏門に来るのだろうか。

高見美穂はあの時あの瞬間、階段の手前で石田よりも僕に驚いていた。何言ってるの？ と口に出さなくてもそう言いたいことはわかった。

石田、今日一緒に帰ろう。

本当に僕は何言ってるの？ って感じだった。それは今でも謎のままだし、自分の起こした行動についてわからないことがあるなんて僕は嫌だった。でもたぶん、僕はあの時あの瞬間、この恐れをすぐにでも解消しなければならないと咄嗟に判断したのだと思う。一度踏み込んだのにその場所から引き返してしまえば、二度とその奥にまで到達することはできないのだ。永遠に恐怖は残り、僕は心のどこかで常にいつも、石田に怯えていなければなくなる。その恐怖の度合いは変動するだろうし、ある程度時間が経てば気にもならないサイズにまで収縮するかもしれない。でも決して消え去ることはないのだ、僕が生きている限り。つまりは僕の本能が、生への執着が、僕の口にあの言葉を発せさせたのかもしれない。

5時間目が終わって6時間目が終わっても、あの騒動の余韻はまだ学校に残っていた。幸運だったのは、誰も先生に事件のことを告げ口しなかったことだった。石田も正樹も僕も、三人共クラスが違

うからなんとも言えないけれど、報復じみたものは何もなされていないようだった。

そして帰りのホームルームが終わり、正樹が教室にやってくる。

正樹の顔には緊張の気配があり、僕にはそれが何を意味しているのかもわかった。

正樹は僕の机に手をつき、「で、行くの？」と僕に尋ねる。

「行くよ。行くしかねーでしょ」

「やべーんじゃねーの？ 危ないかもよ」

僕は笑っておく。「大丈夫だって。しかもまだ来るかわかんねーし」

正樹はしばらく黙り、「じゃあ気をつけて。なんか言ったら教えて」と真剣な眼差しで僕に言った。それから片手を挙げて教室を去っていく。その時僕は、謝ってないんだ、と気づいた。正樹は僕に謝ったけれど、石田には謝っていない。つまりところ、石田への猜疑は残されたままだった。正樹の心にも、生徒達の心にも。

火がくすぶり続けている限り、疑惑は消えない。

裏門に石田の姿はなかった。僕は鞆を抱えて門に座り込み、とりあえずこの正体不明の緊張をなんとかしようと思った。正樹があんなことを言うからだ、と僕は思ったが、たぶんそれは違って、僕自身もやはり石田のことを恐れているからだ。しかしそれだけじゃない。好奇心だってある。石田への興味はついていない。僕はそれに縋るしかないのだ、と僕は思う。恐怖に打ち勝つためには恐怖を一度受け入れるしかない。

石田は裏門に来ることには来るはずだ、と僕は思う。石田が裏門から一人で下校しているのを僕は何度か目にしている。そういう意味では、僕の観察も全く意味のないことではないように思える。しかしずっと石田を見ていて僕が思ったのは、彼にはリアリティーを感じないということだった。僕の言うリアリティーを感じないということの意味はつまり、彼という人間をうまく頭の中で構築するこ

とが出来ないということだった。個性を重要視する時代にあまり誉められたことではないけれど、僕は頭の中である程度人を分類しながら生きている。そしてそれに基づいて行動性を先読みし、右往左往している。けれど彼の場合、分類する以前に、行動性の核とも言える重大な部分を掴めなかった。そのせいで、僕はつたを上ることは出来るのだけれども、ある点にまで達すると困惑し、また力なく元の場所までふりだしに戻ってしまう。それを何度も何度も繰り返していた。僕には石田が家族と話しているところや、果てはオナニしているところなんかが、どうにもうまく想像できなかった。それはひどく2次元的なイメージだった。だから僕は石田にリアリティーをどうしても必要としていたのだ。でもそれはやはり、リアリティーを超越しているわけじゃなくて、むしろ欠如しているんだろう、人として。

その時ふと辺りに誰か人の気配がした気がして見回すと、錆びついた裏門の柵に石田が立っているのが見えた。「あつ」と僕が言つて、二秒ほど沈黙が続く、石田は「こっち」と言つてすたすたと小道を歩き始める。僕はすぐに立ち上がって鞆を脇に挟み、石田の後を追った。僕は嘘みたいだと思った。石田がまさか僕を自分の領域に受け入れてくれるなんて。はは、なんかうける、と思った僕はあっさりと消え去った恐怖に安心してケータイを取り出し、正樹にメールを打った。でも思い直してメールを送信するのはやめて、ケータイを元のポケットに滑り込ませた。石田が僕を受け入れてくれたのに、そんなことをするのは道理に反すると思ったからだ。それに、この悦びは僕の中にだけ秘めておきたい。

スケープゴート 4

石田と僕は5メートルぐらいの感覚を置き、学校の裏手にある薄暗い林の中の踏み分け道を歩いていった。ただし踏み分け道は迷路みたいに曖昧で、それでいていきなりぶつんと途切れていたりして、僕はなんだか落ち着かなくなった。そこはとても大勢が通る道だとは言いがたかった。正確には道でさえないのかもしれない。膝元まで伸びた雑草は、半ズボンで歩いたらスネのどこかしらがまず間違はなく切れただろうと思う。林全体からは夏独特の強い草木の匂いがして、僕はこの匂いが嫌いだった。石田はもしかすると、僕をこの林で葬り去って土に還そうとでも企んでいるのだろうか？ そう考えるとなおさら肌寒くなった。そんな結末でもおかしくないと思っってしまった。恐ろしいことに、石田にはそういう雰囲気があるのだ。僕は不安になって尋ねた。

「石田、これどこに向かってんの？」

「家」

家。たぶんそう聞こえたような気がした。

とりあえず石田が何か言葉を発してくれたことに僕はほっとした。それで十分だった。少なくとも僕の前を歩いている高校生は、僕と同じ人間なのだ。おそらく。

石田は黙って歩き続け、僕もその後を黙ってついていった。石田の歩みに躊躇と見られるものはほとんどなくて、僕はついていくのがやっとだった。石田の独善的な歩みは、僕をどこか突き放しているぐらいに思えた。でもそれはきっと違うんだろう。僕が試されているか、あるいは石田なりの照れなのか。草を踏み分けるがさがさという音以外には別段音という音はなく、せいぜいが学校から響いてくるチャイムの音ぐらいだった。20分も歩くとやがて林の先に光りが見えてくる。何年ぶりに見た光りと言ったら大げさだけど、随分久しぶりに見る光りみたいに見えた。林を抜けると僕は草木の

匂いから解放され、空気を胸に閉じ込める。道の先には住宅街があり、それは見たこともない土地だった。一軒一軒の家にかなりの年季が入っていて、僕は林を抜けたことであっちの世界と離れ、こっちの世界に来てしまったのだとふと思った。石田のいる世界。僕は一旦立ち止まってズボンについた葉っぱを払ってから、見る見る遠ざかる石田に声をかけた。

「ちよつと待つて。今行くから」

石田は初めて僕に振り返った。歩きながら横を向いただけだったが、その仄暗い瞳は確かに僕を捉えていた。古びた住宅街は死んだように物静かで、夕陽に染まり始めた家々は死体安置所みたいな不気味さがある。しかもそれらは厭世的な石田の雰囲気と絶妙にマッチしていて、まるで石田のために描かれた風景みたいだった。

葉っぱを払って「オッケー」と言い、僕は走って石田との5メートルを再び獲得する。どこか遠くの家から聞こえるピアノの音がポロンポロンと響いていて、それは「僕と石田と住宅街」というタイトルの戯曲に虚無感を引き立たせていた。短い坂を越えて、住宅街を歩くとやがて石田の足は、一軒のひとときわ古い平屋に向いた。石田があまりにも何も言わないので、圧倒された僕は思わずつぶやいた。

「石田んち？」

石田は微かに頷いた気がした。でもそれは僕の勘違いかもしれないなかった。

家の庭は恐ろしく広く、ほぼ裏の山と繋がっていると聞いていいぐらいだった。長い竹が覆い茂り、こうべを垂れるようにして屋根瓦の少し上をざわざわと神経質に揺れている。

石田は一切の迷いなく玄関の引き戸を引いて、中に入りこんだ。僕はもう諦めていたし、同時に覚悟していた。石田はいちいち細かいことを説明するような人間じゃないのだ。僕はそれでも底に僅かばかり残った恐れから開け放たれた引き戸の前で数秒立ち尽くしたが、唇をぺろりと舐めて中に進んだ。行くしかないっしょ、って感

じだった。もういちいち戸惑ってる場合じゃないのだ、こんなところまで来て。

僕は靴を脱いで玄関に揃え、狭い廊下の先で消えそうになる石田の背中を早足で追った。黒くすすけた木の廊下は夏でもひんやりと冷たく、靴下越しからでもその冷気が伝わった。途中に通り返けた居間には家具が揃っており、家具はどれもこげ茶色だった。低い木目のテーブルには灰皿と煎餅の四角い銀色缶が載っていて、しかし煙草の吸殻はないし、煎餅の食べかすも無かった。どれも整頓されすぎていて生活感がない。庭にある小さな池に水は張っておらず、緑色の苔がびっしりと生えていた。家全体に漂う空き家のような静けさに、僕は少しだけぞっとする。家のどこからも人の気配はしなかった。僕は石田のリアリーティーの無さに、少しだけ納得することが出来た。

石田を追って廊下の先を曲がると突然に引き戸があつて、僕は「おわっ」と小さく呟いて上体を仰け反らせてしまう。まるで何かの設計ミスのように、その扉は突然にあった。そしてその引き戸はすでに半分開いていた。扉はベニヤ板を二枚重ねた程度の薄さで、半分といっても人が一人やつと通れるほどの隙間だった。中はよく見えなかったが、光りが漏れていて、ごそごそと人のいる物音はした。「入るよ」と僕は言う。自分の声は自信がなく、弱々しかった。

家全体があまりにも不気味に静まり返っているせいで、僕はまるで誰かがこっそり聞き耳を立てているような猜疑心に見舞われた。廊下の方に首を突き出すと、艶のない廊下が伸びていて、やはり無音だった。この家には音を吸い込む何かがあるのかもしれない、と僕は思う。耳を澄ますと部屋の中から石田の息づかいが聴こえてきそうだった。

「入って」

引き戸の前ですつと僕が佇んでいると、しばらくして石田の声が聞こえた。催促するような声では無かったけれど、僕は言われた通り引き戸の取つてに指をかけた。中からテレビを点けるぶつつん、

という音が聴こえ、僕は引き戸を少し引いて、部屋に入る。中に入った途端、何ともいえない匂いがした。それはいい匂いでもなく、別段悪い匂いでもなかった。ただその匂いは、石田が漂わせている違和感とどこか似ていて、その違和感を濃縮したみたいな匂いだっ

た。

部屋は六畳程で、思ったとおり殺風景だった。壁のような背の高く浅黒い箆笥が釘で打ちつけられてあるかのようにどっしりと小窓の傍に構えていて、しかしそのモノリスみたいな箆笥以外の家具はほとんど存在感を発揮していなかった。家具はどれも部屋の四隅に寄っていて、部屋の中央だけが隕石でも落ちたみたいにぽっかりと空いている。16歳という自分の年齢を考慮してポスターぐらいあってもいいんじゃないの？ と僕は思うけど、それは逆に石田らしくないように思えた。それにそこまで僕が干渉できる／するべきこ

つちやない。

スケープゴート 5

石田は小豆色の座布団の上であぐらを掻き、テレビからきつかり1メートル離れた場所に腰を下ろしていた。僕が部屋の引き戸で佇んでいると、石田はどこにでも座れとばかりに顎をほんの少し傾けた。でもやつぱり、それは僕の勘違いかもしれない。石田の動きは、その全てがどこか締めりなく、頼りない。いちいち訊くのも野暮だと思ったので、僕はそのまま引き戸の傍に腰かけた。

それから長い沈黙が訪れた。薄暗い部屋で唯一光ったテレビからは、ニュースの終わりを告げる癒しの音楽と新宿のビル街を遠ざかる映像が流れていた。暗い部屋でテレビを点けていると、CMが変わるたび、まるで古い映写機か何かのように、そのおぼろげな光りのトーンに合わせて反対の壁と部屋の中心が一瞬パツと明るくなる。そしてそのつどそのつど、石田の顔が彫刻のように浮かび上がる。それはまるでデ・キリコの絵みたいに僕の不安を駆り立てた。なんか嫌だよやめてよ石田、と僕は思った。石田は光りに不似合いだったし、本人も嫌っているみたいに見えた。怪訝ではないにしろ、影は彼の持つ虚無感をどこか誇張させているように見えた。

ニュースに続いてバラエティー番組が始まり、じゃあもう7時だよ、と僕は思う。そしてそんなはずはない、と同時に思う。どう考えたって僕は一時間以上の時を失っている。あっちの世界とこっちの世界では時間の流れ方すら違うのだろうか？ しかしそんなものは僕が便宜的に、あっちこっちと呼んでいるだけであって本当にそんなわけがない。ただの学校を中心としたあっち側とこっち側だ。あれ？ あれ？ としばらく頭の中で時間勘定を繰り返したが、僕は結局どうでもよくなった。僕と石田の時間は自然発火現象よろしく、ロウソクの上で突然に一時間分燃え上がってしまったのだ。それに一生分の一時間ぐらい誤魔化されてもまあ僕はよかった。あっちの世界とこっちの世界では時間の流れ方が本当に違うのかもしれない。

ないのだ。

僕が部屋に入ってから石田はずっと何も話そうとはせず、僕だってもちろん何か話そうとはしなかった。石田がどう思っているかははっきり言って全然わからなかったけれど、僕は僕でこの沈黙を十分に楽しんでた。僕はとうとう石田家の石田の間に辿りつくことができたのだ。そこにはある種の達成感があり、同時にこれから始まるであろう何かにも僕は期待を寄せていた。得体の知れない石田という人物にももちろんまだ恐れはあるけれど、僕がこうして石田の部屋で石田と同じ空気を吸っていることは、少なからず彼が僕に心を許した証のようなものだった。僕はひた隠しにはしていたものの、石田が次にどんな言葉を発するのか楽しみで楽しみで仕方なかった。あるいは酔狂な心理学者なら僕のこの心境を察してくれていたかもしれない。ここで部屋の隅に置かれた勉強机から石田の秘密日記がぼろりと飛び出してきたりなんかしたら、僕はもうこの気持ちを抑えられそうになかった。

そして石田はようやく、手つかずのまま放っておかれた沈黙を破った。

「何か、飲む？」

瞬間、部屋全体の空気がぎゅっと縮まったような気がした。石田は僕の方に少しだけ顔を向け、しかしほとんどこちらに注意を向けてはいないように見えた。前髪はやはり伸びすぎていて、俯くとほとんど顔が隠れてしまう。その長い前髪は明らかに不自然さを醸しだしていて、髪で顔を隠すのつべらぼうみたいだった。

「何でもいいよ」と僕は言う。

「待つてて。持つてくる」

石田はどこか疲れた歯切れの悪い声で言うと、おもむろに立ち上がって僕の後ろを回り、引き戸を開けて廊下の奥へと消えていく。にしにし、という床の軋む音が聞こえ、畳みに手について引き戸の先に首を伸ばすと、夕陽の赤がその強みを増していた。

石田のいない部屋で僕は大きく息をつき、改めて部屋を見回した。

天井には淡いまだら模様の染みがそこかしこに出来ていて、この家の過ぎた長い年月を思わせる。とりわけ目につくものもないので、僕は座ったまま大きく伸びをした。石田の部屋で一人になると、僕は妙に落ち着いた。じいちゃんの家にとっくりだから？　そうかもしれないし、そうじゃないかもしれない。一つ言えることは、僕にとっての石田の空間はそれほど居心地が悪くないということだった。さて、と僕は考え、冷静になった頭で、もう一度状況を整理してみようと思った。僕はこうして石田の部屋で胡坐を掻き、石田が飲みものを持ってくるのを待っている。それは親睦の証と考えていいのだろうか。おそらくそう考えていいんだろう。それから他人を部屋で一人にするという点についても、僕にそれなりの人格的信頼は置いている、と。今日いちにちないし数時間の間で？　あのひねくれた目をしていた石田がこの僕に？　たぶんそれはそうなんだろう。石田はこの僕をけっこうな場所まで受け入れてくれている。でもそれは僕が正樹から石田の身を守ったこととはおそらくほとんど関係していなくて、僕が石田に対して持った興味によるものだと思う。好意的とまでは言えないにしろ、僕は恐れとはまた違った特別な意識を石田に対して抱いていたのだから。

けれど石田の僕に対する見解が完全に合っているかと言えばそれはまた別の話で、現に僕は部屋を物色したくてうずうずしている。手を伸ばした先には、ありとあらゆる石田の秘密が眠っているに違いないのだ。調べたいことが山ほどある。石田という人格を築いている部分のタネを一つでも明かすことが出来たら、僕はそれで十分オーケー、この探検に一区切りがつく。しかし石田が部屋に僕を一人にするということは、ある点で僕を試しているのかもしれない。そうなるといよいよ、立ち上がることも困難になってくる。石田なら音もなく部屋に戻ってきそうだし、部屋を入ってきたときに僕が立ち上がっていたらどう思うだろう？　必然的に疑いは生まれる。今は何よりも信頼を勝ち取ることが先決なのだ。そうして徐々に彼の心に忍び込んで、僕はもつと石田のことを知りたいと思う。

石田を通して別の世界に踏み込んでみたいと思う。

石田は漆塗りのお盆に洋風のカップを二つ載せて、やはり静かに帰ってきた。僕の座る目の前にそれを置き、また座布団の上にあぐらを掻く。ただし、今度は僕の方を向いていた。さり気なかったが、ぴいんと第六感に来るものがあつた。石田のYシャツの襟は開けていて、第一ボタンの箇所では白い解れた糸が踊っている。あの第一ボタンが全てをもちたしてくれたのだ、と僕は思った。何がどう転ぶかなんてホントわからない。石田と僕は対になって向き合い、部屋は確実に何かの予感を孕み始めていた。

「ありがと」と僕は言い、カップの取っ手をつまんで口元に持っていた。中に入っていたのはオレンジジュースだった。

「いいよ、別に」と石田は小さな声で言う。それは誰かに返答したというよりも、口の中で呟いたという方が正しかった。

石田は耳をぴくりと動かしたかと思うと顔を上げ、それから首を30度ぐらいねじって庭の方から聴こえるカラスの泣き声に耳を澄ました。あるいは、カラスの声を聞き分けていたのかもしれない。それからまた向き直り、俯いて黙りこくった。カップには手をつけず、足元で両手の指を組み合わせて親指をぐるぐると回している。また部屋に沈黙が降りてくる。まるで初雪みたいに音もなくゆつくりと。それは石田が部屋に居ないときの沈黙とは別の代物だった。石田が部屋にいると、やけに空気が乾いているような気がした。

「それよりさ……」随分時間を置いて、石田がぼつりと言う。

「うん」と僕は言う。それよりなんだよ？ と僕はいい加減じれつたくなってくる。

石田はカップのオレンジジュースを一口飲む。その緩慢な動作に、僕は焦らされているような心持ちになる。早く言ってくれよう、と僕はいたって冷静な顔を保ちながら、頭の中で訴える。そして石田は言う。しかしその言葉は、僕の想像していたものとは全く別のものであった。

「この前の期末テスト、どうだった？」

「えっ」と思わず声を出してしまったのは、今日初めての僕の失言だった。「期末？」

「俺、最下位に近かったから」と石田は言う。

それから慎重に顔を上げ、僕と水平に目線を合わせる。僕は石田に見られ、石田は僕に見られる。

その瞬間、僕は不思議なことに、ありありと部屋の情景を客観視することが出来た。それだけじゃない。僕は石田に見られる自分の心境はもちろん、僕に見られている石田の心境も手にとるようにわかった。あるいはそんなことは気のせいだったのかもしれない。でも絶対的な普遍の法則に則るみたいに、僕ら互いにニヤリと笑った。抗いがたい強烈なおかしさだった。人と人が分かり合えた瞬間みたいなものがそこにはあって、そうか人は分かり合えたとき、ほくそ笑むんだ、と僕はそのときわかった。

石田も僕も顔を背けてそのニヤリとした笑みを隠し、最後はオレンジジュースを飲んで誤魔化した。正確には誤魔化せてなんかいない。僕と石田はもう分かり合ってしまったのだ。だからその誤魔化しも、十六歳のな照れ隠しに他ならなかった。

沈黙のあと、「そうか」と僕は言う。「最下位に近いのはやばいな」

「何番だった？」と石田が言う。

「92番」

「じゃあ俺より全然上だ」

再び、僕はニヤリと笑う。ニヤリの巨大な陰謀にこの空間だけが支配されてしまったみたいだった。

スケープゴート 6

初めてまともに言葉を交わした石田は、その風貌や噂に似つかわしくないほど人間臭かった。そう、彼にリアリティーはどうやら存在したのだった。いやいや違う、僕が彼にリアリティーを附着させることに成功したのだ。それはつまり、僕が石田の心の内を覗くことに成功した証だった。しかし、僕はもう石田を取り巻く謎なんか半分どうでもよくなってしまうていた。石田に自分の願望を投影していたことに奇妙な喪失感を感じてはいたにせよ、やっぱり悦びの方が断然大きかった。全てを客観視できたあの瞬間、僕達は誰がなと言おうと分かり合ってしまったのだ。それはある意味では互いのこれまでの人生を全て把握するよりもずっと難しいことなんじゃないか、と僕は思う。結果、僕の中の恐怖はそのほとんどが消滅し、僕も石田も（これが友達と呼べるのかどうかまではわからないけど）互いに好感を持つことが出来たらしかった。僕はこれでまあよしだった。謎の人物と感覚的に分かり合えたことでもう何もかも満足だった。

けれど高見美穂のことを話題に出すのは避けていた。それは僕らの足元にある落とし穴のような暗黙下で巨大な存在感を放っていたけれど、今の雰囲気には似つかわしくなかったし、必要とされていないかった。それは地雷だった。それを踏んでしまえば、後はもうどう転ぶかもわからない。あるいは石田の機嫌を損ねるかもしれないし、培った信用を失うかもしれない。とりあえずプラスになることは何もないさそうだった。

それから、僕と石田のぼそぼそとした会話は弾むことすらなかったにせよ、それなりに円滑だった。勉強のことや、食べ物のことや、夜8時台のテレビ番組について。どうやらその頃、僕は僅かながらに拍子抜けしていたらしかった。今日はもうこれ以上なにも起こらないだろうし、そんな可能性への予測は恐れと共に知らず知らずの

内に消滅してしまっていた。そんな暫定的な仮説を僕は自分の中で無意識の内に絶対的に信賴していたらしく、石田が突然わけのわからないことを言い出したときにはそれなりに困惑したし、後々考えてみてもそれはやっぱり謎だった。

「スケープゴートって知ってる？」

オレンジジュースを飲み終えて、またぼんやりと足の指を眺めながら石田は言った。僕にはその突然の質問の意味がまるきりわからなかったけれども、石田が僕に何かを伝えようとしていることはころうじてわかった。石田は何か重大なことを僕に告げようとしているのだ。

「身代わりってことじゃないの？」と僕は言う。なるべく関心がない風を装って。

「そう。そうだけど、でも違う」

「じゃあ何のこと」

石田が顔を上げ、しかし僕の方は見ずに、何か思い出したように後ろを振り返る。部屋に置かれた家具が息づき、じっと押し黙って石田の一挙手一同に注目しているみたいだった。石田の動作には、何とも言いがたい、不自然さの、歪みの片鱗みたいなものがあつた。要を得ないやりとりに僕は当惑した。

「スケープゴート」と後ろを振り向いたまま石田は呟く。

「うん」と僕は言う。

石田がこちらに振り返り、またも視線を落として今度は自分の足のいびつな爪先を見つめる。それが話の続きを頭の中でまとめあげているのか、それとも話すことをためらっているのか、僕にはどちらともわからなかった。

「贖罪ってわかる？」としばらくして彼は言った。

「しょくざい？ 贖罪って何？」

石田が僕の方をちらりと一瞥し、また俯ける。僕はその時、石田の瞳に冬の海岸のような寂しさが一瞬だけ浮かんだような気がした。「古代ユダヤの話なんだけど」と石田は言う。僕は幾分顔を近づ

けた。石田の声はぼそぼそとしていてすごく聞き取りづらい。「人の罪を代わりにヤギに背負わせて荒野に放す儀式がある」

「それが贖罪？　つかスケープゴート？」

しばらくして石田は言った。「そう」

石田がゆつくりと顔を上げ、僕は首を引く。僕は何がなんだかよくわからなかった。

石田は確実に何かを僕に伝えたがっていた。今までの会話だって十分不思議な感じがしたのだけれども、少なくとも突然古代ユダヤの話が出てきたりはしなかった。それに石田が顔を上げた瞬間、石田の目にまたあのがらんどろがぽっかりと浮かび上がった気がした。でも次の瞬間、ふとそれは消えていた。

「イケニエ」

「えっ？　何？」

「生け贄ってわかる？」と石田は言った。

「わかるよ。生け贄ね」

「他人の罪を背負わされて身代わりになる者」

「わかる」

さっきまでの静けさが、急に耳の痛くなるような沈黙に変わった。僕は少し緊張し始めていた。

「それなんだけど」と彼は続けた。「現実にもありえると思う？」

「……現実って今？　この時代に？」

「そう」と石田は答えた。

僕はその時、石田の息が微かに震えているのを見逃さなかった。閉じた顎が一度だけ細かく振動したのを見逃さなかった。石田はこちらに真っ直ぐ顔を向けているのに、視線を僕から少し逸らしている。僕にはわかった。石田は何かに怯えている。

「あるよ」とよく考えてから僕は言った。

石田がその答えを望んでいることが僕にはわかった。石田は味方を欲しがっている。

「俺もそう思う」

石田はそう言つと、花柄のカップをお盆に載せて立ち上がり、さつきと同様静かに部屋を出て行った。

部屋の障子の先に仄かな暗がり透着ていた。僕は石田がオレマジューズをもう一杯持つてくるにしろ持つてこないにしろ、彼が戻ってきたら、もう帰ると伝えようと思った。

スケープゴート 7

事件が起こったのは僕が石田の家に招かれた日からちょうど一週間後のことだった。僕と石田は学校では以前のままで、互いに目も合わせないし口もきかなかった。正樹には、石田は裏門に來なかつたと僕は言った。そのとき僕がどうして嘘をついたのか自分でもよくわからなかつたけど、たぶん僕は少しだけ石田よりの人間になっていたのだ。それはやはりニヤリのせいじゃないかと僕は思った。人が本当の意味で分かり合うということが可能なかどうか僕にはわからない。けれど限りなく近づくことはきつと可能なんだろう。僕と石田にあの瞬間起こった不可解な出来事は、現象を越えたある種の形而上学的なシンクロニシティだったのではないかと僕は思った。

「ミホチンがいなくなった」

その話を聞いたのは昼休み、正樹の口からだった。

「石田が誘拐したくせー」と彼は続けた。

「馬鹿でしょ。そんなわけないじゃん」

正樹は首をゆっくり振って、何か考えるように廊下の先を睨みつけた。危惧していた災いがついに起こったみたいな形相で。

「家出じゃないの、どーせ」と僕は言う。

「女子が朝からずっとその話してる」

「じゃあ普通に家出でしょ」

「違うよ。石田がさらつたつて話してんだよ、女子が」

「はあ？ 何それバカみてえ」

「石田最近なんか変なとこなかつた？」

「知らねえって。そんなこと」

ふーん、と正樹は言った。僕が石田の家に本当は行ったんじゃないかと疑っているのだ。

「たぶん今頃女子が石田んとこ行ってるよ」とどうでもよさそう

に正樹は言った。

「えっ、マジで？」

「マジだよ。昼休みに行くって言ったもん」

「嘘じゃないよね？」

「嘘じゃないよ。嘘ついてどうすんだよ」

俺を試そうとしてるってこともありえるじゃん、と僕は心の中で思った。

「ちよつと俺見てくるわ」と僕は言って、立ち上がった。

正樹は黙って僕の顔を見つめていた。けれど僕が行かないわけにはいかなかった。

やばいじゃん。いよいよ石田やばいじゃん。

その声は教室の外からも聞いて取れた。僕は教室の引き戸を背にする恰好で、気配を忍ばせていた。

「じゃあ昨日どこにいたの？」

固く、責め立てるような声色は、騒がしい昼の廊下にも耳に際立つて響いた。僕が我慢できなくなって中を覗くと、そこには教室の角に置かれた机を取り囲むように立った三人の女子が見えた。もちろんその中心に座っていたのは誰であろう石田だった。石田は顔を上げず、ほとんど身動きせずに中心にいる人物のちょうど腰あたりを見つめていた。もしくはその先にある不透明な何かを見ていたのかもしれない。石田には女子達が見えていないような気がした。石田の視界に入っているはずの三人は、石田の目に捉えられていないような気がしたのだ。

だが女子達は別だった。全然別だった。彼女らの目には——特に真ん中の子には——揺るぎない怒りがあり、今まさにそれがぶつけられようとしているのだと僕にはわかった。

よりによって酒井裕子かよ、と僕は思った。酒井裕子は女子間で問題があるたびに登場する阿呆だ。自分が学校のドンだと勘違いしている阿呆。虚栄心の塊みたいな女。自己顕示欲が強く、人の意見

を聞き入れないことで有名だった。だから本当は女子達の間でも嫌われている。いや、周りだってずるい。こんなときだけ酒井裕子を利用するのだ。活動的な馬鹿より恐ろしいものはない。——ゲーテ曰く。

「ほんとのこといいなよ。うちらあんたがやったってわかってんだから」

神経質に靴底で教室の床を叩きながら、冷たい声で酒井裕子は言った。だがその声はいくぶん上ずっている風にも聞こえる。それに目が据わっていない。どうやら彼女は石田に半分怯えてもいるようだった。石田は今まで酒井美穂が相手にしてきたような連中とはわけが違うのだ。彼女は自分を勢いづけなきゃ何も出来ないみたいだった。そりゃそうだよな、と僕は思った。怖気づいてなかったら初めから一人で来るっつーの。

石田は黙っていた。というより、特に何も感じていない風だった。目をつむったり背けたりすることはなく、変わらずにがらんだうの瞳をスカートのゴム紐あたりに向けている。石田はこういう時、一体何を考えているんだろう？ と僕は思った。

その時、石田を取り囲む女子達の真ん中に立っていた威勢のいい彼女が、ターンと靴底で思いっきり地面を叩いた。僕を含め何人かがびくついた。それを見て、僕には教室にいる何人かが僕と同じように聞き耳を立てているのがわかった。

その後で真ん中の女子は「怒りを通り越して呆れた」という風に小さく首を振って演技がかったため息をつくとおもむろに腕を組み半開きの瞼から石田を冷たく見下した。

「別に何も言わないならそれでいいけどさ、あんたマジでどんな目に会うかわかんないよ。言っとくけど美穂彼氏いるんだからね。多分このこと知ったら彼氏キレるから。そこんこよろしく。どうせ美穂に彼氏いるって知らなかったんでしょ？ マジでお前バカだな、バーカ」

ひつでえ、と思わず僕は音もなく呟いた。そこまで言うことねえ

じゃん。まだ疑惑の段階なのに。

言い終わると、教室が一瞬だけしんとした。底冷えしたような沈黙が辺りに漂い、僕は首筋に嫌な汗を掻いていた。女子は怒りを吐き出し終わると、行こ、と隣の子に軽く笑いかけて教室を後にする。ずるずると仲間をつれて。僕はその白々しい態度に心底うんざりした。

出たよ、と僕は再び音もなく呟いた。余裕を気取った作り笑い。小心隠しの下手な嘘。現場からすぐに立ち去ろうとするのがそのいい証拠だ。強がりやがって、内心ハラハラのくせに。途中から口調が激しくなったのもそれが虚勢だつてことを裏付けているわけだ。引き下がれないとわかって強く出た弱い人間の典型的な過ちだ。僕にはわかる。あのときの僕と同じなのだ。正樹を廊下に突き飛ばしたときの僕と同じ。

僕はその三人を見ているとあまりの嫌悪感に窒息しそうになった。胃がむかむかする。まるであらゆる忌みごとがこの場に集結したみたいな空気だった。めまいがして、吐きそうになった。錆びたなまぐらのナタやノコギリで骨を削られているみたいだった。思わず廊下の床にくず折れそうになったぐらいだった。

だが石田は何もしなかったし、やはり最後まで何も言わなかった。彼女らが立ち去ると彼は何事もなかったかのように机の中から教科書とノートを取り出し、筆箱を開けてペンを机の脇にそっと置いた。そして最後に、教室に蔓延した重たい沈黙を一つにまとめあげるみたいにかチリと筆箱を閉めた。この数秒の石田の行動に題をつけるとしたら、「平生」がふさわしかったと僕は思う。石田にとっての今の出来事は、道端で犬に吠えられたそれと変わらないように見えた。あるいは彼の中にはブラックホールみたいなものがあって、時と場合によってそれを有効利用できるのかもしれない、と僕は思った。石田は自分を意識的に無感覚の仄暗い泉に――あるいは境地に――浸すことができるのかもしれない。ただ僕にわかるのは、石田が並じゃないということだった。やっぱり石田は普通じゃないのだ。

いくら僕がリアリティーを附着させることに成功したからといって。

スケープゴート 8

正樹はどこから耳にしたのかはわからないけれど、すでにそのことを知っていた。

「石田が犯人でしょ。その確率高いよ」

僕はそれに何も答えなかった。石田が普通じゃないことは僕にもわかる。けれど、それとこれとは別だ。石田はこれまでに何かしたっていうわけじゃない。ただ疑惑が勝手に膨らみ続けているだけだと僕は思う。だが生徒達の見解も僕の見解も、いずれにしろ暫定的なものだ。でもじゃああのニヤリはどうなる。僕はあのとき確かに石田と理解し合ったのだ。そしてそのとき理解した石田という人間は、誰かをさらったりレイプしたりするような人間じゃなかった。

やはり僕には石田を信じるしかない。石田は悪役に仕立て上げられているだけだ。不可解な人間だから、集団に馴染めない人間だから、みんなが決定的な理由を欲しがっているだけなのだ。こういう人間なんだ、という納得する理由を欲しがっている。石田が人と交われないわけを、性格的欠落で埋めようとしている。もっとも傲慢で、独善的な手段で。つまり、いっさいがっさい罪を押しつけることで。

こんなうさん臭い話はなかった。あまりにいかさまじみてる。

10代ほど残酷で、暴力的な時代はない。人はしばしば、自らのエゴのために、自分の理解の及ばないものをこれと決定づけるに明確な理由を欲する。生徒にとっての石田の理由は、この事件で十分だった。集団はいつだって暴力的だ、と僕は思う。そこに倫理や道徳といったものはない。秩序は彼らの中にあり、ルールを定めているのもまた生徒側なのだ。本人達は気づいているが、気づかないふりを続けている。誰だって的が自分じゃなかったら平気だ。それは僕だって同じはずだった。

しかし僕は知ってしまったのだ。石田の人間性もリアリティーも。

次の日、石田は学校を休んだ。そして次の日も、また次の日も。そのことで、石田犯人説がより本格化することになってしまった。いや、彼らが本格味をつけることに成功したのだ。何しろまだ当の高見美穂は学校に姿を現していない。どうしてなんだよ石田、と僕は思った。こうなることぐらい誰にだってわかったはずだ。

石田の言ったとおりだった。あのわけのわからない言葉は予言だったのだ、と僕は思った。石田はこうなることを全てわかっていたのだ。ならどうして、とも僕は思った。解決する方法はいくらでもあったはずなのだ。

このことで意気込んだ女子や、それに促された血の気の多い男子は、石田の家に乗り込むとまで豪語していた。暴力とは正義をまとった瞬間、完全な悪へと姿を変える。彼らの結束をより現実形づけるため、石田はその生け贄になろうとしている。

そして石田は、ついに完全なる学校のスケープゴートと化した。だが同時に、僕は石田が罪を押し付けられたことに、後ろめたさを感じていた。その罪悪感の源はあのとき、石田が女子生徒達に責め上げられているときに僕が行動を起こさなかったことだった。あのとき僕が何か一言でも口を挟んでいれば、少しは事態が変わったかもしれない。そのことは少なからず、僕を「石田スケープゴート計画」に加担させたように思えて仕方なかった。

行くしかない、と僕は思った。とりあえず行くしかないのだ。何より先に、石田の家に。

スケープゴート 9

昼を過ぎた6月の空は、灰がかった厚い雲に覆われていた。雲はとつぷりと湿気を孕んでいる上に淀んでいて、遠くの家々に低く垂れ込み、まるで何か不吉な世迷い事を溜め込んでいるみたいだった。放課後、僕はすぐに教室を出て、裏門からひとりで学校を抜けた。

正樹は僕のいない教室を見てどう思うだろう？ 石田の家に行った、と思うかもしれない。そうなると僕の信用はいよいよ暴落し、下手をすると僕自身、石田と同じく贖罪の山羊と化すかもしれない。まあそれでもいいや、と僕は思った。今さら僕がどんな嘘を並べたところで白々しいだけだし、どうせ何かで悩むのなら自分が正しいと思うことをやって悩んだ方がずっといい。

空をずっと見上げているとめまいがした。今にも雨が降りそうだった。どうしよう、傘なんて持ってこなかった。

やれやれだ。僕は地獄の底より深いため息をつき、地べたから立ち上がった。前には人を寄せつけない鬱蒼とした林が広がっている。こんなときにかわいいクラスメイトが傘を僕の前にさっと出して相合傘で二人で帰ってメールアドレスを交換し合ってお互い別れてエアコンのドライ機能を効かせた部屋でぐっすり眠って朝起きたら元の生活が始まっていたらよかったのに、——僕は何の因果か、これからわけのわからないやくざな林を一人で抜けて石田の家に向かわなくてはならない。それも時間を捻じ曲げてしまうような能力を持つ不明瞭で逆説的な林を抜けてだ。

いかれてる。僕はいつたい、どこで何をやるうとしているのだろう？ 自分の居場所がわからなくなる。これじゃまるで現実と非現実の境目にいるみたいだ。林の向こう側が非現実、こちら側が現実といった具合に。僕はちょうど互いの円の交わる中心で自分の居場所を見失っている。

だがある意味ではメタフォリカルなのかもしれない、と僕はふと

思った。たぶん僕はこの騒動のキイをある程度握っているのだ。僕の動き方しだいでは石田がもう二度と学校に来れないかもしれないし、石田への疑いを全て払拭できるかもしれない。

因果は全て石田に結びついている。そして僕だけが石田を知っている。

僕はいちど屈伸をして、それからあの日と同じように道なき道を歩み始めた。僕は思う。今さらどうこう考えるのはよそう、行動が全てなのだ。

「行くしかないっしょ」と僕はつぶやく。そう、行くしかないのだ。

草木は暗い雲のせいか前よりも陰鬱な緑に見えた。いわゆる油照りというやつで、空気は湿っていてべったりと肌にまとわりつき、僕を不快で落ち着かない気持ちにさせた。風邪を引いたときそっくりの寒気がする。背中をなぞる汗はいやに冷たかった。

踏み分け道がぶつんと途切れていても、僕はどういうわけか迷うことがなかった。石田のおかげ？ そうなのかもしれない。僕には林の先にうつすらと石田の後ろ姿が見えるような気がした。それは言いすぎかもしれないけれど、歩いているときにふと前に気配を感じたような気がした。気のせいかもしれないし、そうであって欲しいと思う。石田の生き霊になんか決して何があっても会いたくはない。

道を抜けると、やはりあの住宅街が出現した。それは、目の前に広がったというものではない。その古い住宅街は石田の目みたいに妙に奥行きがないのだ。あるいはアンリ・ルソーの静止画みたいにけどアンリ・ルソーはこんな住宅街をカンバスに描いてはくれないだろうな、と僕は思った。あまりに色が無さすぎる。

坂を上り、霜みたいな汗を僕が拭って立ち止まったところに石田の家があった。あのときと変わらず、長く伸びた竹は憂鬱にこうべを揺らし、扁平な屋根の上でざわざわと音を立てていた。喪失を思

わせる家々は、心の琴線に触れ、僕をぞつとさせる。そしてもう一つの不安は石田がどんな顔で僕を迎えるのかということだった。石田はあるとき、僕が廊下で見ていたのを知っていたかもしれない。というよりも、僕は石田が限りなく知っているように思えた。ああ、やっぱり僕は石田に罪悪感を覚えているのだ。謝ろう、と僕は思った。石田に会ったら最初にごめんと謝ろう。

前回は気づかなかったけれど、玄関の引き戸の脇には、後からつけたような簡素なインターフォンがあった。多分何度も建て替えているのだ。今思えば、石田の部屋が不自然な行き止まりにあったのもそのせいかもしれない。

インターフォンは押しても鳴らなかった。電池が切れているらしい。僕の親指の先で押し黙ったそれは、どこか学校での石田を僕に連想させた。この家は全てが石田の性格を汲んでいるのかもしれない。

引き戸に指をかけると、鍵のかかっていることがわかった。僕は少しだけ悩んで引き戸を開けた。車輪がカラカラと乾いた音を立て、玄関が現れる。足元にはサンダルと白いランニングシューズが、部屋の方を向いてきちんと並んでいた。中は薄暗く、この前と同じように人の気配が全く感じられない。空気は不思議なほどしんと静まり返っていた。

「こんばんわー」と僕は言った。

がらんとした石田の家に声が響き、唾を飲み込むと、獣が低く力の入った声を出すみたいにな、ごくんという巨大な音がした。背後では風がびゅうびゅうと呻りだしていた。それに合わせて竹藪が囁くみたいにざわざわと揺れる。二羽のガラスが沈黙を助長するみたいにカアカアと交互に鳴く。僕はもう一度、こんにちわと同じように呼びかけてみた。しかしやはり、反応はなかった。そして僕は、どういうわけかその場から動くことが出来なかった。足に根が生えたみたいに、右手を引き戸のくぼみに引っ掛けたまま、身じろぎ一つできなかつた。背中が薄ら寒い。何もかもが嫌なことの前ぶれみた

いだった。突然吹き抜けた風も、竹藪の囁きも、カラスの鳴き声も。だがしばらくすると廊下から衣擦れのような音が聴こえた気がした。そしてそれはよく聴くと石田の声だった。

「いいよ。入って」

石田はまるで僕が来ることをわかっていたように別段驚きもせず、僕よりも少し高い板敷きの玄関間に立ち、道化みたいな表情のない顔で佇んでいた。むしろ僕の方が驚いたぐらいだった。危うく、わつと声を上げそうになるところだった。知らない間に石田が目の前に立っていたなんて嫌だったし、不思議だった。一体今まで僕の意識はどこに行っていたのだろうか？

石田が振り返って廊下を進み、僕もあわてて靴を脱いで浅黒い板敷きの廊下上がった。

「何か、飲む？」と振り返らずに石田は言った。

「平気」

そう言い終えた後で、あつ、と僕は思った。謝るタイミングを見失った。

僕と石田はそれから黙って廊下を歩き、石田はまた部屋の引き戸を一人分だけ開け、小豆色の座布団に座った。あの日と変わった点といえば、石田が制服でなく部屋着でいることと、テレビが点いていないことぐらいだった。やはり電気はついていなくて中は外よりずっと薄暗かった。この部屋は常に竹藪が日光を遮っているのだ、きつと。

「いつもひとりなの？」と僕は石田に尋ねてみた。

石田はこちらを見ていなかった。がらんどうの瞳で、がらんどうの、光りの消えた暗黒のブラウン管を見つめている。そこには深い沈黙の気配があり、シニールレアリスティックな何かが漂っていた。その姿はテレビの中の奇怪映画から出てきた幻の主人公みいだつた。古い、デジタルの映らない箱型テレビ。それに畳み張りのこの部屋は、なぜか彼にとってもよく似合っていた。

「大体ひとり」石田はぼつりと言った。

風で部屋にあるゆいいつの窓ががたと窓が乱暴に震える。急に風が強くなってきた。梅雨の時期は大抵、息の詰まるような大気が下方に停滞しているのに。

「学校、来ないの？」と僕は思い切って言った。

石田は瞬きもせずに、ブラウン管を見据えていた。あまりに連続した静寂に一瞬、何かが起こるような気がした。めまいのようなものが僕を襲って、石田が暗黒の画面に吸い込まれていくような気がした。あらゆる現象をぐにやりと曲げて、僕と石田が暗黒に吸い込まれていくような気がした。だがそれは、いつものように僕の思い過ごしだった。石田はあくまで普通の高校生なのだ。無口でストーキングが趣味の高校生なのだ。石田に何かをこじつけるのはやめなぐちやいけない。石田と僕のニヤリを忘れてはいけない。

そのとき突然、ふと思いついたように雨が降ってきた。夕立だ。雨の音はすくはつきりとしていて、ひとつひとつがストローでビールに穴を開けるみたいにボツボツと響いた。そしてすぐに雨脚は強まった。大粒の雨は殴りつけるように屋根を叩き、窓を叩き、その音はまるでビールシートの上にバケツ一杯分のビーンズをぶちまけたみたいな音だった。

やがて部屋が一瞬光り、遠くから雷の音が聴こえると部屋の空気は一段と重苦しくなった。雷鳴の弾みで緊迫感と臨場感が息づき、部屋はどこか湿り気のある沈黙に変わった。僕の心臓はたった今動き出したみたいにサンドバッグを叩くような低く深い音でリズムを刻み、体の中を反響する。部屋には匂いのないお香のような妖しさが漂い、それらはぐうとまるで旅行鞆に無理して詰め込むように僕の心を圧した。

石田はうつむいて首を振り、ばらばらになった前髪を一本だけ指でつまんで、それを上目づかいに見た。僕の不思議な感覚はそのとき終わる。石田はその髪をしばらく見つめると、座布団をずりずりと僕の方へ方向転換して、伏せていた目を上げた。

「スケープゴートの話、この前したっけ？」

石田と向かい合うと、ふとあの時の感覚に遡った。僕は自分が笑ってしまっんじゃないかと思った。だがちつとも微笑む気にはなれなかった。

「したよ。ヤギの話を聞いた」

「魔女の話」

「魔女？」とびつくりして僕は言った。

「中世ヨーロッパの魔女狩りも母性崇拜を失くすためのスケープゴートだった」

「ああ……、よくは知らないけど」

「集団の抱える問題を個人に押しつけて問題解決を先延ばしにすること」抑揚のない、まるで何かを読み上げるように平面的な声で石田は言った。「人は不満や不快感を覚えると無意識のうちに問題の原因を他人に置く。心理学だとそういう意味の用語で使われてる」

「心理学」と僕は小さく呟いた。心理学で僕が何か石田と語れることなどなさそうだった。「その原因を置かれた人間がスケープゴートってこと？」

石田は構わず続けた。「ナチスのホロコーストもそう」

僕は黙っていた。オレンジジュースが欲しい。喉がいやに渴いていた。

「学校どう」しばらくして石田は言った。

「普通かな、まあ」と僕は嘘をついた。

石田はおそらく僕の目を見ていた。確証はない。しかし、石田の瞳を見続けていると、その黒い瞳の中に僅かながら光りがちらちらと見えるような気がした。

「石田」と僕は決心して言った。「あのとき助けなくてごめん」

石田の瞳の中に一瞬だけ何かが横切った。月明かりを遮る、夜の雲みたいに。

「いいよ」と石田は呟いた。

「ごめん」

沈黙。

「……高見さん、きつとすぐに戻ってくるよ」

「えっ？」

石田はそのあと何も答えなかった。石田はスイッチの切れた、ちようどそばにあるテレビのように、がらんどうの瞳を僕に向けていた。そこには敵意も信頼も存在していないように思えた。だがそれは違ったのだ。僕は石田の瞳を見るうちに、自分自身気づかないまま、ゆつくりと石田という人間を理解していった。それは人と人がただ見つめあうという純粹な行為ではなかった。石田の瞳の中でちらちらと光るものの正体を僕は突き止めたのだ。

石田の瞳はがらんどうなんかじゃなかった。石田の目は強く、そして生きていた。誰かを理由もなく悲しませたり蔑めたりするような――誰かを自分の自尊心の身代わりにするような人間の目じゃなかった。

石田はその日、とうとう僕が帰るまであの言葉にどんな意味が含まれていたのかを明かすことはなかった。石田の家を出ると雨はぱつたりと止んでいた。雲が流れを取り戻し、止まることなく動いていた。葉から雨水の雫が滴り落ちている。空気が雨の降る前に比べるといくぶんひんやりとしていた。

高見美穂はその二日後になつて学校に戻ってきた。

やはりあれは石田の予言だったのか、と僕は思った。でもそこに確証というほどのものは存在しなかった。石田はすぐに戻ってくると言ったのだ。石田の言うすぐがどれほどまでに限定されていたのか僕には知る由もない。言えることは二つ。

石田が高見美穂をさらったんじゃないこと。そして石田が高見美穂の失踪に関する事実を何かしら得ていたこと。

しかし後者にそれほど確証はないかもしれない。石田がただ漠然とした予覚のようなものを僕に伝えたに過ぎなかったのかもしれない。

高見美穂は平然としていた。自分の行動が石田の疑惑を強めたことなんて微塵も予想していなかったし、同時に何も知らなかっただろう顔で登校してきた。ホームルームの始まる前の廊下で、グループの女友達に心配の声をかけられながら、高見美穂は馬鹿みたいに笑った。

「はあ？ 何それ、違う違う、そんなわけじゃないじゃん——っていうかあんな奴に声かけられたらまず叫ぶし。殴ったら勝てるっしょ、もやしだもんあいつ。実はね、ほら、あのあたしとプリー緒に写ってた人いるじゃん？ ハタチの人。あの人んち泊まってたの。お母さんとめちやくちゃケンカしてさあ、行くとこなかったからしょうがなくて。ごめんね、もう玄関飛び出しちゃったからさあ、ケータ

イも財布も忘れて——みんなも心配してるかなあって思ったんだけど。ほんとごめーん」

ミホチングループの女子達は（酒井裕子も含めて）、非難よりも先に笑った。

「勘弁してよ美穂——。あたし石ころにカマかけちゃったじゃーん」

「そうぞ。裕子あのとときすんげーかつこよかったし」

「あんときのあいっキモかったよねー。なんか何も言わなくせにこっち向いててさあ。見んなっつーの。うう寒っ」

寒っ、の動きでぶひゃぶひゃ笑う。つまんねーよ馬鹿。

幻滅より怒りがまさった。別に彼氏がいるのに他の男の家に泊まりこむのがどうこうということじゃない。それは僕に全く関係ないし、完全に高見美穂の問題だ。けれど僕が許せないのは周りのへらへらした連中だった。過ぎたことなんでも笑いのネタにしていると思うてる。いや違う、笑うことで罪の意識から逃れようとしているのだ。自分の中で無かったことに出来れば彼女らは十分なのだ。まやかしの免罪符に縋りついているだけだ。

だがそうはさせない、と僕は思った。胸がねじ曲がるような思いだった。これはここであっさり終わっていい問題じゃないのだ。そしてここで僕が行かなければ、僕自身一生後悔することになるだろうと思った。

僕は席を立ち上がり、連中のいる廊下にまで真っ直ぐ歩いた。心臓がぎゅうつと縮まり、僕に退けと命じている。

嫌だね。絶対に嫌だ。

「謝れよ」と僕は言った。ポリウムを絞ったみたいに彼女らの話し声が止み、訝しげにこちらを振り返る。

「えっ、何……」

僕は言う。「石田に謝れ。酒井でめーだよ」

沈黙が僕らの間に降りた。教室も校内も騒がしいのに、廊下の僕らがいる場所だけが静かになった。喧騒の中で沈黙はありありと浮き彫りになる。もう心臓の音しか聞こえなかった。でも引き下がる

気はない。

最初に事態を把握したのは酒井裕子だった。瞳が困惑から敵意に変わったのを僕は見逃さなかった。

「ってかなんであんなに言われなくちゃなんないの？ 関係ないでしょ」

「関係ないわけねーだろ。友達なんだよ阿呆」

「は？ こっちは知らねーよそんなこと。出てくんなっつーの」
酒井裕子の腕が伸びて僕の胸をどん、と硬く押し飛ばした。僕は思わず意識が飛びそうになった。頭の中が白んで、意識の尾が手からすると抜けていくのがわかる。

僕はぐっところえ、拳を強く握った。「触んじゃねーよブス。とつとと石田に謝りに行けよ。カマかけたんなら謝んのがスジだろうが」

「だからおめえには関係ねえっつーの。しゃしゃってんじゃねーよガキ」

何も言葉が出てこなかった。どうしてここまで言えるんだろう、と僕は思った。正しいのはこの僕だ。僕だ僕だ僕だ。自分に否があるがなかるうが、彼女には関係ない。利己主義のサイコパスはいつだって世界が自分のために回ってると思い込んでいる。場しのぎの口論に勝つことが全てだと思ってる。

憎い。

殺してやりたい、と思う。酒井裕子の首を絞め、骨の折れる音を聞きたいと思う。酒井裕子の苦悶の表情や、叫びにもならない声をゆっくりと味わいながら殺してやりたいと思う。その願望は強く胸を打ちつけ、手を震えさせる。僕の胸の内を黒く重たい血が沼のようにとろりと渦巻いている。

「殺すぞ」

「は？ 何？ 聞こえねーよ馬鹿」

「ぶっ殺す」

「殺す？ はい出た」と酒井裕子は怒鳴った。「ちよつとみんな

聞いてー、こいつあたしのこと殺そうとしてんだけどー！」

酒井の声で廊下にいた何人かの生徒がこの騒ぎに気づき、酒井裕子は鼻を鳴らして「早く殺してよ、ほら」と僕に言った。高見美穂はどっちつかずの不安そうな顔をしていた。それは僕の顔が本気だからなのだろう。僕はこのクソ女を殺したくて殺したくて殺したくて――殺す。暴力と制裁は違う。

「ちよつと待ってちよつと待って、何やってんだよ。落ち着けつて」

隣のクラスから出てきたのは正樹だった。

「出てくんなよ正樹。今あたしが殺されるの待ってるんだから」

「ちよつと待って。今こいつ興奮してんだよ。だからちよつと待って。放つといて、悪いけど」

「興奮なんかしてねえよ。正樹どけよ」と僕は言った。

正樹は余裕のない顔で僕を見た。複雑に絡み合った顔をしていた。まるで病の姉が死の床についてるみたいな青白い顔だった。

「お前もいいから」と正樹は言う。「ちよつとこつち」

正樹はそう言っ僕腕をがしりと掴み、酒井裕子のいる廊下から3メートルほど引き離れた。抵抗しても正樹の力には到底かなわない。

「正樹」と僕は言った。「マジで俺殴るから。あいつだけは石田に土下座するまで許せねえから」

「もう少しだから」と秘密を打ち明けるよう正樹は囁いた。

「早く殺してよー」と上靴の底で廊下の床をたたきながら酒井裕子が挑発する。本気じゃないことはすぐにわかった。あるいは酒井裕子も、最近の自分の評判がよろしくないことを知っていたのかも。ここで自分の権威を有効に披露することが得策だと思っただのかもしれない。なんてくだらない権威だろう。余裕のない人間がこれで全て出揃ったわけだ。

僕は酒井裕子を見殺して正樹に言った。「もう少しして何がもう少しなんだよ」

「石田が来る」

「は？」

「登校してきてる。今」

「えっ……石田？ 嘘っしょ？」

「マジだよ。こんなときに嘘つけねーって」と正樹は苦しげに笑った。「だからあとは二人で直接話してもらえばいいじゃん。酒井と石田でさ」

「あっ」

石田。

階段の手すり越しに石田の真っ黒で長い髪が見えた。石田だ、間違いない。ぽかんと口を開けていたんだろう僕に気づいて正樹も振り向く。そして酒井裕子も振り向く。真打ち登場とばかり、空気が固く強張った。石田はいつもどおり、少しうつむいて窓際を沿うように足音も立てず歩いていた。

誰も何を言えはいいのかわからなかった。電話ボックスで隔離されてしまったみたいに、僕らのいる場所だけが息の詰まる沈黙に支配された。

そして石田は僕と酒井裕子らの間でふいに歩を止めた。次の瞬間起こった出来事は誰にだって予想がつかなかった。

石田は酒井裕子の髪を掴んで振り回し、酒井は周囲の耳をつんざくような悲鳴をあげた。校舎が割れた鏡のようにバラバラになってしまっんじゃないかと思った。正樹が怒声ともとれる大きさの声で「おい！」と叫び、僕は咄嗟に正樹の胴回りに後ろからタックルをかました。

「何やってんだよ！ 離せって！」

僕は何も言わなかったし、言えなかった。ただ必死だった。石田は怒りをもって、今酒井裕子に制裁を加えているのだ。それを止める権利は誰にもない。

だが僕が正樹ひとりを抑え込んだところでどうにかなるレベルの問題じゃなかった。男子がわらわらと集まってきて石田は酒井裕子

から引き剥がされ、壁に叩きつけられた。喧騒の中では酒井裕子のむせび泣く嗚咽と、男子が石田に向かって怒鳴りつける声が際立って耳に響いた。石田はまた襟首を掴まれ、床から数センチ浮かび上がっている。僕は正樹の胴回りから腕をほどき、止めに入った。でも今度僕の体を羽交い絞めにしたのは正樹だった。誰かが石田の頬を手の平でぺしぺしと叩く。その瞬間に生まれた石田の怒りや憎しみを僕は生涯忘れることが出来ないだろう。石田の目はそのとき生きていた。石田は抑えつけられながらもがくようにしてその相手を思い切り殴りつけ、誰かが叫び、誰かが怒鳴った。石田は倒され、腕を床に押さえつけられ、誰かがその混乱に乗じて石田のわき腹を蹴った。僕は自分でさえもが理解できない声で何かを怒鳴っていた。何と言っていたのかもよく覚えていない。

すぐに何人かの先生がかけつけ、また怒鳴った。酒井裕子は窓際で高見美穂らにもたれかかるようにして両手で顔を覆っていた。大人がやってくると、喧騒は糸が切れたみたいに急にしんとなった。正樹は僕から腕を離し、僕は呆然と佇んだ。僕の平静や理性は白い混沌の中に置き去りにされてしまっていた。男子生徒たちが引き剥がされると、石田は何もなかったように立ち上がり、少しうつむいた。石田と酒井裕子が大人に連れられて行くあいだ、僕は立ち尽くしていることしかできなかった。

その騒動のあと、石田が教室に戻ってくることはなかった。酒井裕子もだ。教師たちは本人たちも含め、色んな生徒から事情を訊きだし、石田があらぬ疑いをかけられていたこと、そのことが関連して石田が学校を休んでいたこと、などを考慮して、石田に停学処分を下した。

それは確かに以前、僕が石田に対して望んでいたことなのかもしれない。でも騒動のあと、僕の心に残ったのはぽっかりと穴の空いたような深い悲しみだった。果たして僕らは勝つことができた

のだろうか。じゃあそもそも、勝ち負けとはいったい何なんだろう？ 僕にはわからなかった。誰かが傷つき、傷つけられたようしか思えなかった。

石田はただ何にも負けなかったのだろう、と僕は思った。スケープゴートという呪いに対して、学校という巨大な暴力に対して。

でも、僕はもうどうでもよかった。問題はあまりに大きすぎて、僕の手の平には抱え込めない気がした。僕はそのとき、この出来事を悲しみとしてでしかとらえることができなかった。早く家に帰って、何も考えずこんこんと眠りたかった。

二週間が経ち、石田が再び戻ってきてからも、僕が彼と何かを話すことはなかった。石田は相変わらず一日中黙ったままで、僕と意図的に目を合わせることもなかった。そしてぱったりと、石田が高見美穂を影から見つめることもなくなった。周りの視線を気にもしない様子の彼は、以前と同じように授業を受け、二三日もするとまたクラスの影に馴染んでいった。因縁もなし、報復もなし。全てはあたかも自然の流れのように、丸く元の平和な学校に収まっていた。

そして僕は時々、アポなしで石田の家に行った。裏門をくぐり、鬱蒼とした林を抜け、死そのもののような住宅街を歩いた。石田は僕を受け入れ、僕はひんやりとした廊下を歩いた。石田が僕を受け入れてくれることはなぜだかわかっていた。あのニヤリのせいかもしれないし、僕らに起こった力オスじみた騒動のせいだったかもしれない。石田は僕にオレンジジュースを勧め、僕はそれにとどき口をつけ、ぼそぼそ話をして夕暮れには帰った。竹藪は不安を囁くように揺れていた。

けれどあの日、あの言葉の意味だけはとうとうわからなかった。

——スケープゴート。

初めて石田の家に行ったとき、薄暗い部屋にこだました謎の予言。高見美穂失踪の真相。

石田はこうなることを全て予測していて、あのことは僕に向けたのだろうか。彼はそれからそのことに触れなかったし、僕が何か訊けることでもなかった。そしてそれは、これからずっと永遠に謎のままにい続けるのだろうかと思った。僕は帰り道ではまたよたと木の根に腰を下ろし、葉の隙間から見える青白い月を眺めながらこの事件について一通り思い起こしてみた。そしてそれらが僕に何を与え、何を変えることができたのか考えてみた。林の中はもう夜のように暗くなり始めていた。

森の中

鬱蒼とした森の中へ足を踏み入ると、それまでとは違い、空気がひんやりと冷たく変わるのが少年にはわかった。森の中は想像していたよりも遙かに静かで、少年が唾を飲み込むと巨大な音を伴って喉元を駆け下りる。瞬間、鳥の声が空に聴こえ、少年はびくりと体を震わせて上空を見上げた。しかし、鳥の姿をその目で垣間見ることはできなかった。根のように張った木々の枝が幾重にも重なって網羅し、奇妙な程偶然に空を覆い隠していた。鳥の声は尚も耳に響く。まあいい、と少年は思う。どうせ空は曇ってる。俺の空にはいつだって霜のような雲が張り付いているんだ。

少年からは才能と名のつくものが全て欠如していた。少年は自らの不才をその目で実感するたびに、自己への嫌悪にひどく心痛した。自分で自分を憎むことができるのは人間ぐらいだ、と少年はいっしょに考えたことがある。だから俺は、俺のために生きることをやめにしたんだ。俺は何もしちゃくれないし、何も与えてはくれない。俺に腕はあるが指は無く、頭はあるが顔は無い。劣等感を押し付けられる人生はもう終いだ。

森を進むと、小枝を踏みしめる度にその乾いた音がきいんと耳に響く。この森はやはりどこかおかしかった。静寂とはまた違った静けさが辺りに漂っている。それは静寂ではなく、沈黙なのかもしれない、と少年は思った。怪物が息を殺して獲物を見据える時のような。それに、空気がやけに湿気を孕んでいる。それはいやらしく、不気味な湿り気であった。森の空気を吸い込む度、湿気が肺に粘りつく。少年にはそれが死臭の余韻のように感じ取れた。死臭を吸った森の木々がそれを吐き出し、今、俺はそれを肺の奥まで潜らせている。少年はそう思うと、今にも吐き出しそうだった。

森の中に生えたみずばらしい雑草は、どれも陰鬱な灰がかった色

をしていた。斜陽の刻だということは少年にもわかっていたが、森はちともそれを感じさせない。まるで人の手が何かを驚づかむ時のような恰好の枝がそこら中に張り巡らされている。少年はそれに背筋の寒いものを感じてはいたが、もう退くことはできなかった。脚は強張りながらも先へ先へと進んでいく。少年はなるべく別のことを考えようと努めた。こんな所にいる自分の状況を把握しきったところで、狂人のような目に磨きがかかるだけだ、と少年は思う。それから彼は、ずっと昔に聞いたアフリカの話进行い浮かべた。まだ彼が9つの頃に聞いた話だった。

金色に輝く大地。そのずっと先にある白い砂浜。砂はあまりに白く照り映えていて目を痛めそうなほどだった。それから高い岬、そびえ立つ褐色の山々。少年は奇怪な森にしながら、遠くに磯波の轟きを聞き、それをわけて漕ぎ寄せる土人の小舟を見た。潮の匂いをかぎ、大陸の微風が送ってくる朝のアフリカの匂いをかいだ。彼はその白昼夢の中でヘミングウェイを読み、島々の白い峰が海上にそそり立っているのを眺めていた。それからやはり、彼の想像する世界にはライオンが登場した。ライオンは薄暮れの砂浜で、子猫のように水と戯れている。ライオンは彼にとって強さの象徴だった。雄雄しく荒々しく、時に残酷なライオンは彼にとって理想に最も近い存在であった。あいつらは決して誇りを失わない。もし生まれ変わることが本当に出来るとするなら、俺はライオンになりたい。少年は物心のついた頃からそればかりを考えていた。少年は自分の描いた描写があまりにも美しかったことに、しばし耽美し、酔いしれた。初めてその話を聞いた時よりも、イメージはずっと洗練されている。

しばらくしてまた鳥の声が聴こえると、彼はその白昼夢からはつと目覚めた。辺りは夕刻とは思えないほど暗い闇に覆われていた。もう随分と森の奥へ来てしまったのだ、と少年は気づく。歩いてここまで来た感覚はあったが、記憶はおぼろげだった。自らの内面ばかりを見続けると、人はしばしば周りの情景を忘れる。鳥は上空で

大きく旋回し、木の枝に止まっては少年を見下ろし、あたかも人のような声で鳴いていた。鳥の黒い羽は闇とほぼ同化をしている。少年が目を凝らすと、なんとかその鳥の体も見て取れた。鳥の目は丸く、巨大なくちばしの先はつるはしのように尖っていた。鳥は頭がいい、と少年は思う。俺を食おうっていうんだ、あいつら。俺がこの森で朽ち果てることを奴らは知ってる。

少年は鳥を睨みつけたが、鳥は一切物怖じしなかった。小首を傾げ、それからつるはしを開いて、くあ、と鳴く。薄気味の悪い連中だ。少年はそう思ってもう目をくべるのを止め、また森の奥へと踏み出し始めた。森は奥へ奥へと彼をいざない、少年が進むに連れて闇の密度を増していく。この森は意思を持っているに違いない、と少年は思った。毎年何百人という人間がここを自らの墓場と決め込んでやってくる。森は魔の引力で人を惹きつけるんだ。そうして森は一つ一つ魂を喰らい、年々成長していく。根を伸ばし葉を伸ばし、やがては暗く、陰鬱な影を地面に落として。

その時、またも人のような鳴き声がして、少年はびくりと肩を震わす。今の鳴き声はまるで本物の人間のようなうだった、と少年は思う。背中に冷や汗を感じ、辺りをゆっくりと見回してみる。しかし周りにはモスグリーンの暗黒が広がっているだけだった。少年はほつとすると共に、少しだけ心の中で自嘲した。俺は一体何に怯えているというんだ、まったく。ここは生き物の墓場じゃないか。たとえ得体の知れぬものがいたとしたって俺もすぐにそいつらの仲間入りさ。だがその時少年の目に、枯れた木の傍でもぞもぞと動くものがちらと見えた。すると少年の目が一瞬の内に狂気じみたものへと変わった。冷や汗ではなく、今度は背にしびれのようなものを感じる。あれはなんだ？ 少年はびくりとも動けなかった。恐怖に支配され、指一本動かすことも困難だった。得体の知れない黒い影は闇の中で相変わらずもぞもぞと動き、その度に少年の背にぞくぞくとしびれが走った。少年はもはや内なる全てを恐怖に駆られ、心から叫びそうになる。しかしすんでのところで歯をぐつと噛み締め、必死の思

い出気配を殺した。悟られてはいけない。こちらの存在を悟られては魂を貪り食われてしまう。しかし、その影はしばらくして、どさつと木々の下にくず折れた。それから聴こえたものは今度こそ人の呻き声だった。少年は再びはつとする。あれは人か！ あれは人なのか！ 少年はようやくして影に向かい第一歩目を踏みしめ、しかし木々の下に目を凝らしたところでもう一度考えた。

あれは本当に人か？ 真正正銘の人間なのか？ もし得体の知れぬものだったらどうする。怪物か物の怪か。もしかすると俺を騙そうとしているのかもしれない。手傷か何かを負って動けぬから同情を売って、精をつけるために俺を一思いに平らげようとしているのかもしれない。

だが少年はそう考えたところで自分に嫌気が差した。俺はどうかしてる。ここまで来て俺はまだ怖じ気づくのか、まったく。物の怪なんかいるはずもないだろう。それに俺は魂を無に帰そうとここに来たんじゃないのか、ええ？ だのになぜこんなことで怖じ気づいてる。死のうとここに来て、どうして死ぬことを恐れる。これほど滑稽な話もないじゃないか。

少年はそこまで考えると、半ば強引に足を踏み込んだ。尚も恐怖は胸中に存在したが、それを無理やり抑え込んだまま木々の下に足早に歩いていき、ついには影の前にすくと立った。傍で見るとようやく影の正体は晴れた。影の正体はぼろきれを纏った足腰も立たぬ老人の哀れな姿だった。少年は恐怖を振り払うために自ら作り出した興奮で気が落ち着かず、老人を見てもどんな言葉を発していいかわからなかった。老人は尚ももぞもぞと動き、腐葉土に唇をつけてうつ伏せになっている。ようやく少年の興奮も治まりを見せた時、老人は前に立っている謎の人物の気配に気がついた。

「ああ神よ……」老人の第一声はそれだった。「私は恥の多い人生を送って参りました。信心深くもなく、また慈悲深くもありませんでした。しかし今なら、……今なら『我らの父』を百回も唱えましょう。ですからお願いです。あなた様の御許へどうかこの私めを

参らせてください、……どうか、どうか」

少年は老人の言葉が第一うまく聞き取れなかった。まるで蚊の鳴くような声だ。見るところによるとこの老人はくたばりかけている、しかし今はまだ苦痛の時間なのだろう、と少年には察しがついた。そして老人は自分を神と勘違いし、どうか一思いに殺してくれと頼んでいる。

あまりに咄嗟のことで思考の飽和状態になった少年は、横たわった老人をごろりと転がし、仰向けに寝かせて頭の下に手を回し、老人の顔についた土を注意深く払ってから、少し持ち上げてゆつくりとわかりやすく話しかけた。

「おじいさん、俺は神様じゃない。何もできない。だから起きてくれ。自分で起きてくれ」

だが老人は変わらず呻るだけであつた。老人の目は切り傷のように細く、それにどうやら開いていないように見えた。少年は同じ言葉で老人に呼びかけたが、やはり結果は同じだった。老人はもはや衰弱しきっており、盲目と難聴であつた。

「ああ、神よ、……お願いします、……どうか、どうか」

少年は涙を流しそうになっていた。心臓が温かい脈を打ち、胸が焼けるように熱い。どうして赤の他人の死でこれほど悲しい思いが胸に迫るのか彼にはわからなかった。何かしなくてはいけない。でも、と少年は思う。俺はどうすればいい。このじいさんに俺が一体何をしてやれるというんだ。

答えは一つだった。彼は老人の頭をそつと地面に置き、それから涙を拭つてなるべく大きな石を探した。石を探して辺りを彷徨う彼の息は荒く短く、そして熱い。石は簡単に見つかった。いかにも硬く、頑丈そうなでこぼことした大きい不細工な石だった。少年は腰を落として、やや地面にめり込んだそれを引っこ抜き、一步一步重い足取りで老人の傍へと歩いていった。

一発で殺してやらなくちゃいけない。それがじいさんのためであり、俺のためでもあるんだ。

老人は尚も呻いていたが、それは声というよりも喉から漏れる音であった。老人のその、ひゅう、ひゅう、という声を聞きながら、少年はまたぐつと胸に詰まるような思いを感じた。駄目だ、とそこで少年は踏みとどまる。俺がその時を遅らせれば遅らせるほど、じいさんの死は苦痛に満ちていくんだ。

そして少年は力いっぱい石を振り上げ、老人の頭めがけて石を落とした。ごつ、という骨と石とがぶつかる低く鈍い音が聴こえ、少年はその反動で膝から地面にくず折れ、後ろへ尻もちをつく。彼は一瞬、自分が何をしてどうなったのかがまるでわからなくなった。眠りと覚醒のひずみに彼は一瞬だけ旅立っていた。そして彼が目を開けた時、老人はすでに息絶えていた。もう老人の体から生は一片も感じ取れなかった。そこには魂の入れ物となる亡骸がただ横たわっているだけであった。

少年はまた胸の奥から涙が溢れるのを感じる。しかし今度は、涙の意味が断然に違った。老人を殺す前の涙と殺した後の涙では、様相が余りにも異なる。彼はどういうわけか笑いだしそうにまでなっていた。自分ではどうしようも歯止めの効かないおかしさが込み上げてきて、彼は腹を抱え、雑草の上を転げまわった。少年はひいひいと森の奥で笑いながら、涙が止めどなく溢れ出るのを感じる。不謹慎だということがわかっていても、どうしても彼にその笑いを止めることは出来なかった。そんな狂気、混乱のさなかに彼は思う。死のうと森へ入って来て、そんな人間が人を殺すなんて。俺は多分いかれちまったんだろう。あるいはいかれたふりをして何もかもをうやむやにしちまおうとしてるんだ。

そして涙が止み、おかしさも止んだ時、森は元の沈黙を取り戻していた。少年は老人の骸の傍で脚を三角に折り、それを抱えるようにしてしばらく森を眺めていた。もう鳥の声も聴こえない。彼は沈黙に身をとっぷりと浸からせ、また自分の内面へと回帰していった。死のうと森へ入った人間が、哀れな老人を手に掛けるなんて。俺

は本当に正しいことをしたのだろうか。じいさんは本当に死を願っていたのだろうか。ただの一時的な、老人の気狂いだったかもしれない。俺がちゃんとじいさんの言葉を聞き取ってやれなかっただけなのかもしれない。

けれどもやはり、と少年は思う。森の奥深くに老人が一人でいたということは、その人生が不幸な顛末を迎えていたなによりの証なんだ。

少年はそう考えるとおもむろに立ち上がり、それから老人のために墓を掘った。森の土にはごろごろと石が混じっていて、それが少年の爪や指をひどく傷つける。だがそれでも少年は一心に地面を掘り続けた。もう自分で自分を憎むのはやめにしよう、と老人のために土を掘り返しながら少年は思う。自分で自分を憎んだところで、何にもなりやしない。俺はこいつと一生やっていかなきゃいけないんだ。腕はあるが指は無く、頭はあるが顔は無い。けれどもこいつが俺なんだ。俺は俺であることから逃げていた。俺は俺と向き合って、正々堂々やっていかなくちゃいけない。今も、そしてこれからもずっと。強くなるというのは、きつとそういうことなんだ。

掘り終わると彼は額の汗を拭い、それから老人を担いで掘った穴へそつと入れた。老人の体は驚くほど軽かった。魂を失うと肉体というものはこれほど軽いものなのか。少年は老人の開いた両眼に瞼を伏せ、両手を胸に置き、自らも胸に手を合わせて老人の冥福を祈った。それから手で土を掬い、少しづつ少しづつ老人の体へかけていった。死後の世界はどんなものなのだろう、と少年は考える。じいさんは今、あの世の前の審判に掛けられているのだろうか。少年は作業の手を一旦休め、それからまた胸の前で十字を切った。ああ、神よ。どうか、……どうか彼の魂を休ましめたまえ。

老人の体がもう土に覆われて見えなくなる頃には、辺りは真っ暗闇と化していた。闇の中で少年の体はその輪郭を失い、辺りに解け込んでいくような気がした。ある意味では完全な黒よりも深い意味を孕んだ闇であった。梟の鳴き声が、ほう、ほう、と辺りにこだま

し、少年はまた老人の墓の傍へ座って、脚を三角に折った。空には黄色い月の光が木々の枝から透けている。明日が晴れであるならば、朝一番に森を抜けよう。彼は膝に顔をうずめ、自らと再び融合を図る。少年は森の沈黙の中で、驚くほど自分が安らいでいるの感じた。そうしている内に、段々と彼は重くのしかかるような眠気に襲われる。俺はひどく疲れているらしい、と少年は思う。森の気温は肌寒かったが、少年は疲れて火照った自分の体の温かさを知った。彼は死の充満した森で、自分が生きているということを改めて自覚する。彼は目を閉じ、老人の墓の傍で座ったまま眠ってしまった。まるで温かい泥に全身を包み込まれるかのような深い眠りであった。そして彼はその夜、淡い月光に照らされながらアフリカの海岸でライオンの夢を見続けていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5962b/>

今日もどこかで

2010年10月14日15時46分発行